

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第91集

# 大 見 城 跡

(主)伊東西伊豆線県道道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1997

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第91集

# 大 見 城 跡

(主) 伊東西伊豆線県道道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1997

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

## 序

大見城跡は、田方平野の南東部にある大見郷の中心部に立地し、この地区は古くから要地として栄えてきた。大見川と冷川の合流地点に突き出す峻険な城山は、まさに天然の要害と言える。大見城は、古くは鎌倉期における大見家政または大見成家の築城、戦国期には後北条氏と結んだ大見三人衆が修築したと伝えられ、伊東と修善寺を結ぶ交通路を見下ろすように設けられている。狩野川から大見川にかけての地域には、城館跡が数多く分布し、伊豆半島における関東の堅固な防衛線を見ることができる。大見城は、この防衛線の相模湾へ抜けるルートの1地点として、戦闘の記録こそないが重要な意味を持っていたのであろう。

また、大見城跡の近くには縄文時代の配石遺構を持つ上白岩遺跡をはじめ、縄文時代の遺跡が多く認められる地域である。日当たりの良い河岸段丘上は、古来より生活に適した自然環境であったといえる。

今回の調査では、中近世の土坑・柱穴や、縄文時代の土器・石器などが検出された。この資料を基に、今後、不明な点の多い大見城の一端が解明され、同時に下層にある縄文時代の生活様式が明らかとなることが期待される。

大見城跡の発掘調査は、当研究所にとって中伊豆町における初めての調査であり、静岡県土木事務所修善寺支所、中伊豆町教育委員会、田方地区文化財保護審議委員連絡協議会をはじめ関係機関の皆様には大変御尽力をいただいた。この場をお借りしてお礼を申し上げる。また、調査にあたった作業員・調査員の労苦をねぎらいたい。

1997年3月

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長 斎藤忠

## 例　　言

1. 本書は田方郡中伊豆町柳瀬地先に所在する大見城跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は「(主)伊東西伊豆縦埋蔵文化財発掘業務」として、静岡県土木事務所修善寺支所の委託を受け、静岡県教育委員会文化課指導のもとに、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。
3. 現地調査は平成8年6月から12月まで行ない、整理作業は平成8年12月から平成9年3月まで行なった。
4. 調査の体制は次のとおりである。

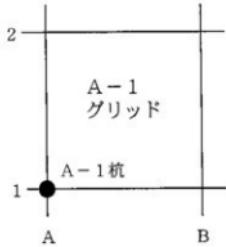
所長　斎藤　忠　副所長　池谷和三　常務理事　三村田昌昭　調査研究部長　石垣英夫  
調査研究四課長　橋本敬之  
調査研究員　望月由佳子　井鍋普之
5. 本書は静岡県埋蔵文化財調査研究所の職員が分担して執筆した。

望月由佳子　第I章第1節、第2節1、第3節1、第II章2～3、第III章、第IV章  
井鍋普之　第I章第2節2、第3節2、第II章1節  
栗木　崇　土器観察表
6. 資料整理は望月由佳子、井鍋普之が中心となって実施した。
7. 資料整理は三島整理事務所（三島市文教町1丁目3番93号）で実施した。
8. 大見城周辺の航空写真測量による現況図の作成、航空写真撮影、測量用基準杭の設置は、株式会社シン技術コンサルに依頼した。
9. 遺物の写真は楠華堂（楠本真紀子氏）に依頼した。
10. 黒耀石の原産地同定については、国立沼津工業高等専門学校の望月明彦氏の指導により、蛍光X線分析を実施した。
11. 大見城の縄張図の作成については、静岡中世城郭調査研究会の関口宏行氏に依頼し、玉稿を第V章に掲載した。
12. 土坑覆土の理化学分析はパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼し、分析結果については第V章に掲載した。
13. 本遺跡についての資料は、すべて財団法人埋蔵文化財調査研究所が保管している。

## 凡 例

本書の記述、図示については以下の基準に従っている。

1. 遺構の実測図は、土層図を1/50、遺構全体図を1/200、土坑引出し図を1/20、遺構検出部分図を1/100、掘立柱建物および棚列引出し図を1/50の縮尺で作成した。
2. グリッドは国土方眼に基づき、10m四方の方眼を設定した。南西の隅の杭番号をもってグリッド名としている。遺物の出土地点を示すため、グリッドを南北に分け北半部をN、南半部をSと記した。



3. 土層の土色は農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』に基づいている。
4. 遺構の略号は次のとおり

S A 棚列	S D 溝状遺構	S F 土坑
S H 掘立柱建物	S P 小穴	S X その他の遺構

5. 遺物の実測図は土器・陶磁器を1/2、石器等を1/1、石斧等を1/2、磨石・石皿を1/4の縮尺で作成した。
6. 遺物の個々の法量、出土地点等は一覧表に示し、文中にまとめた。
7. 土坑の引き出し図は上を北として作成した。
8. 土器の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』に基づいている。
9. 使用痕のある剝片等は使用痕のある部位を|——|により示している。

# 目 次

## 序

### 例言・凡例

第Ⅰ章 大見城跡の概要 .....	1
第1節 調査に至る経過 .....	1
第2節 位置と環境 .....	2
1 地理的環境 .....	2
2 歴史的環境 .....	4
第3節 調査の概要 .....	7
1 調査経過 .....	7
2 土層 .....	10
第Ⅱ章 中近世の遺構・遺物 .....	18
第1節 遺構 .....	18
1 土坑 .....	18
2 掘立柱建物・柵列 .....	28
3 溝状遺構 .....	35
4 焼土混ピット .....	35
5 その他の遺構 .....	35
第2節 遺物 .....	38
1 土器 .....	38
2 銭貨 .....	41
3 その他の遺物 .....	42
第Ⅲ章 織文時代の遺構・遺物 .....	43
第1節 遺構 .....	43
第2節 遺物 .....	44
1 土器 .....	44
2 石器 .....	58
第Ⅳ章 まとめ .....	64
第Ⅴ章 特論 .....	65
第1節 戦国城郭－後北条氏の築城法を探る (関口宏行) .....	65
第2節 大見城跡より検出された土坑の内容物について (パリノサーヴェイ株式会社)	71
付編 大見城跡関連史料集成 .....	75
写真図版 .....	
報告書抄録 .....	

## 挿図目次

第1図 大見城跡周辺小字名	1	第20図 棚列実測図	35
第2図 大見城跡 位置と周辺地形	3	第21図 中近世土器実測図	39
第3図 周辺遺跡分布図・地名表	5	第22図 錢貨拓影	41
第4図 大見城跡調査区・グリッド配置図	8	第23図 土鍵実測図	42
第5図 基本層序模式図	10	第24図 繩文土器実測図(1)	44
第6図 各区土層図(1)	13~14	第25図 繩文土器実測図(2)	46
第7図 各区土層図(2)	15~16	第26図 繩文土器実測図(3)	47
第8図 中近世遺構全体図(1)	19~20	第27図 繩文土器実測図(4)	48
第9図 中近世遺構全体図(2)	21~22	第28図 繩文土器実測図(5)	49
第10図 2~2区検出土坑	23	第29図 繩文土器実測図(6)	50
第11図 3~4区検出土坑	24	第30図 繩文土器実測図(7)	51
第12図 3~2区検出土坑	25	第31図 繩文土器実測図(8)	52
第13図 3~2区・4区検出土坑	26	第32図 石器実測図(1)	59
第14図 2区小穴群検出部分全体図	29	第33図 石器実測図(2)	60
第15図 掘立柱建物実測図(1)	30	第34図 石器実測図(3)	61
第16図 掘立柱建物実測図(2)	31	第35図 石器実測図(4)	62
第17図 掘立柱建物・棚列実測図(1)	32	第36図 大見城縄張図	69~70
第18図 掘立柱建物・棚列実測図(2)	33	第37図 2~2区土坑分布図	72
第19図 3区小穴群検出部分全体図	34	第38図 試料採取位置図	72

## 挿表目次

第1表 発掘調査工程表	9	第9表 小穴計測表(4)	33
第2表 2区土坑計測表	23	第10表 小穴計測表(5)	35
第3表 3~4区土坑計測表	24	第11表 小穴計測表(6)	36~38
第4表 3~2区土坑計測表	25	第12表 中近世の土器一覧表	40
第5表 3~2区・4区土坑計測表	27	第13表 繩文土器観察表	53~57
第6表 小穴計測表(1)	31	第14表 石器一覧表	63
第7表 小穴計測表(2)	31	第15表 土壤理化学分析結果	73
第8表 小穴計測表(3)	32		

## 写真図版目次

図版1 大見城全景	焼土混ビット検出状況
図版2 調査前風景(1区)	焼土混ビット完掘状況
調査前風景(2区)	図版4 2~1区中近世面完掘状況
図版3 1~1区中近世面検出状況(東より)	小穴群完掘
1~2区中近世面完掘状況(南より)	S P-135完掘

S X-139完掘	S X-147覆土堆積状況
S P-140完掘	
図版5 2-2区中近世面全景（南より）	図版16 4-1区ピット出土状況
図版6 2-2区土坑検出状況（北より）	S P-21・S P-22覆土堆積状況
S F-168覆土堆積状況	鋤鉢出土状況
S F-168完掘状況	S X-40・S X-41・S X-42完掘状況
S F-184覆土堆積状況	S P-129覆土堆積状況
S F-184完掘状況	S X-35完掘状況
図版7 2-2区ピット検出状況（北より）	図版17 5-1区全景（北より）
2-2区ピット完掘状況（東より）	5-2区全景（北より）
2-2区掘立柱建物完掘状況（東より）	S X-1・S X-2検出状況
2-2区掘立柱建物完掘状況（東より）	S X-1覆土堆積状況
図版8 2-2区ピット完掘状況（北より）	図版18 1-3区縄文土器出土状況
2-2区ピット完掘状況（東より）	1-3区北半部完掘状況（南より）
図版9 2-3区ピット検出状況（北より）	1-1区縄文土器出土状況
2-3区ピット完掘状況（北より）	1-3区南半部全景（東より）
S F-150検出状況（南より）	1-2区石器出土状況
S F-150完掘状況（西より）	1-1区・1-2区縄文面全景（南より）
図版10 3-3区・3-4区中近世面全景（南より）	図版19 2-2区石器出土状況
3-4区全景（南より）	2-1区縄文面全景（南より）
3-3区・3-4区遭構検出部分	2-2区縄文面全景（南より）
図版11 S D-111完掘状況	2-2区遺物出土状況
銭貨出土状況（S F-95）	2-2区トレンチ内縄文土器出土状況
S F-103完掘状況	2-2区縄文土器出土状況
S F-98完掘状況	図版20 3-2区石鎌出土状況
S F-95内疊出土状況	4-2区石皿出土状況
図版12 3-1区・3-3区中近世面全景（南より）	5-2区石鎌出土状況
3-2区・3-3区・3-4区中近世面全景	3-3区縄文面全景（南より）
図版13 3-2区遭構検出状況（西より）	3-3区北端縄文面検出状況
3-2区S F-85検出状況（西より）	図版21 1-1区北壁土層堆積状況
S F-76土坑内疊出土状況	2-2区西壁土層堆積状況
S F-85土層堆積状況	3-3区北壁土層堆積状況
図版14 掘鉢出土状況	3-2区西壁土層堆積状況
陶器出土状況	図版22 4-3区西壁土層堆積状況
銭貨出土状況	4-2区西壁土層堆積状況
S P-65検出状況	5-2区西壁土層堆積状況
S F-62検出状況	6区テストピット土層堆積状況（北より）
漆製品出土状況	図版23 中近世の土器1 銭貨 中近世の土器2
図版15 4-4区中近世面完掘状況（南より）	図版24 縄文土器1（早期） 縄文土器2（前期 半截竹管文）
4-3区中近世面検出状況（南より）	
4-1区・4-2区中近世面全景（南より）	

- 図版25 縄文土器 3 (前期 半截竹管文)
- 図版26 縄文土器 4 (前期 半截竹管文)
- 縄文土器 5 (薄手の鉢形土器)
- 縄文土器 6 (前期 半截竹管文)
- 図版27 縄文土器 7 (前期か 縄文)
- 縄文土器 8 (前期か 縄文)
- 図版28 縄文土器 9 (縄文・その他)
- 図版29 石器 1 石鎌・搔器・削器・楔形石器
- 石器 2 打製石斧・剥片石器・石匕カ
- 石器 3 磨石・石皿

# 第Ⅰ章 大見城跡の概要

## 第1節 調査に至る経過

主要地方道伊東西伊豆線は、伊東市より中伊豆町を通って天城湯ヶ島町に抜ける道路で、中伊豆町を北東から南西に横切る古来より重要な生活道路である。近年、乗用車や観光客の増加によって交通量が増え、住宅密集地の中を車両が通過する危険性や大型車両の通行の便から、路線を変更し拡幅工事を行なうことを地元では強く希望していた。これを受け平成6年に道路の改築工事が決定し、大見城跡の山裾を抜ける新路線が建設されることとなった。

大見城のある山は城山（しろやま）と呼ばれ、その周辺には下図のように城ヶ平（しろがだいら）、矢取洞（やとりぼら）、馬場沢（ばばさわ）、鍛冶谷戸（かじやと）、敵ヶ平（てきがだいら）等の城郭に関連すると見られる地名が存在し、付近一帯に城に関連する施設が存在したと考えられる。大見城跡を保存すべく、静岡県教育委員会文化課（以下文化課）が静岡県沼津土木事務所および中伊豆町と、計画された道路の路線変更について協議を行なった。しかし、急斜面の山地と川に挟まれた地形で、わずかな平野部は集落域となっている関係から、計画された路線の変更は非常に困難であった。このため、道路建設の予定地内について事前に調査を行う必要性があるとの結論が出された。

文化課は平成6年1月に馬場沢・矢取洞の一部、平成7年4月に城ヶ平の一部について遺跡の有無を確認するため、試掘調査を実施したが、遺構・遺物は発見されなかった。

平成7年9月に中伊豆町教育委員会が文化課の指導のもとに財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所（以下研究所）の協力を受け、城ヶ平・矢取洞の広範囲にわたってトレンチを入れ、遺構を確認する試掘調査を実施した。この結果、中世のものと思われる小穴と縄文時代の配石と思われる石の列を検出し、2つの文化面の存在を確認した。これにより、当該地区の道路予定地を全面にわたって調査する必要があるとの判断が下された。

今回の調査は試掘調査で検出された中世のものと考えられる小穴の性格を明らかにし、縄文時代の配石遺構の確認を行なうこととする目的として、静岡県沼津土木事務所修善寺支所の委託を受け、指導機関文化課、調査機関研究所の体制で実施することとなった。



## 第2節 位置と環境

### 1 地理的環境

中伊豆町は伊豆半島の中央部よりやや北東寄りにあり、面積は110.02km<sup>2</sup>である。西の修善寺町と東の伊東市を結ぶ県道が町を横断し、この道から南西に分岐して天城湯ヶ島町に通じる県道が今回路線変更が決定した伊東西伊豆線である。また、東部の山地を伊豆スカイラインと遠笠山道路が通り、東伊豆方面への主要な交通路となっている。伊東方面に抜ける県道が整備される前は、北側を通る柏崎が重要な交通路として使用されていた。

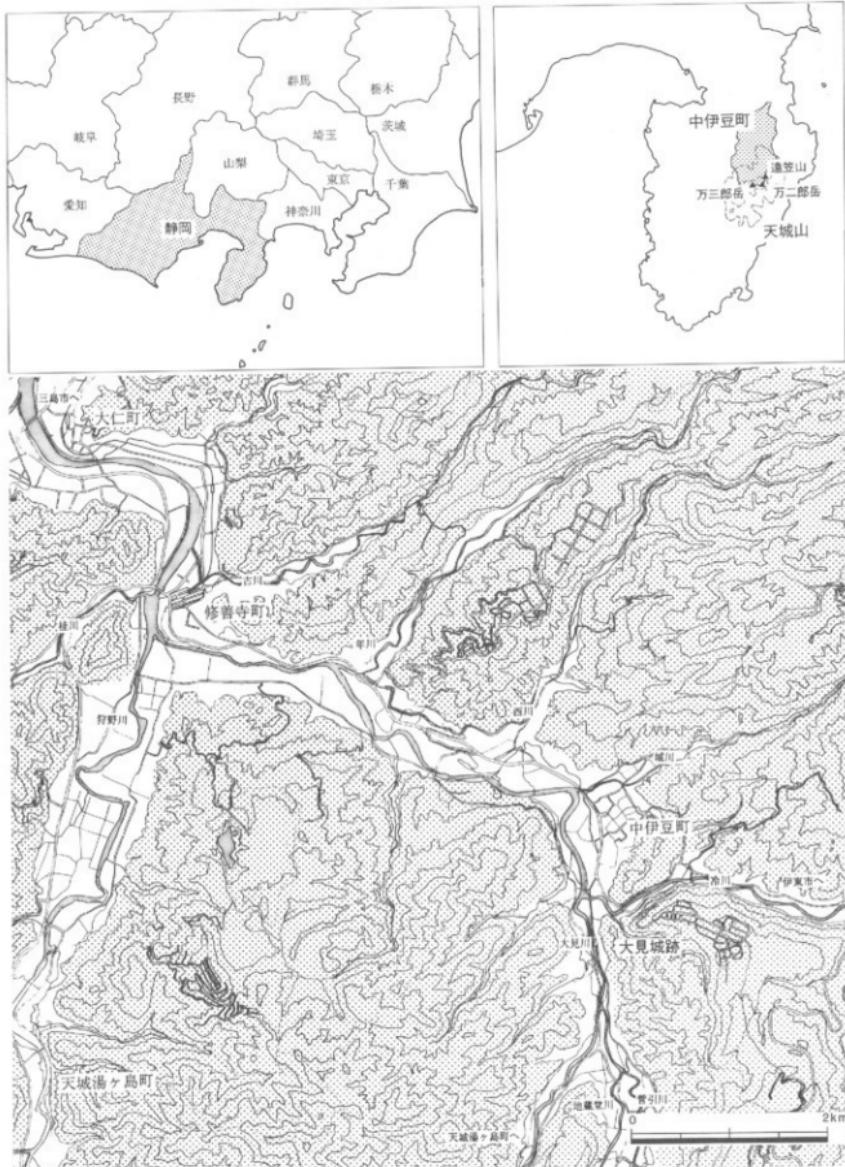
中伊豆町は三方を山に囲まれ、南は天城火山の外輪山である万三郎岳(1405.6m)、万二郎岳(1300m)、遠笠山(1196.9m)など1000mを越える山が連なり、東と西は500m級の山がある。天城山麓に源を持つ狩野川の支流大見川が、三方の山系から流れる河川と合流して北西に向かい、修善寺町で狩野川本流に合流する。このため、周囲は山に囲まれているが、北西側に唯一開けた地形となっている。天城山麓を中心として山林が多く、山林は町の面積の75.6%を占める。山地が多いため、山林での椎茸の栽培や、山から湧きだしている豊富な清水を利用した山葵の栽培が盛んで、古くは木材や薪炭なども中伊豆地区の主要な産物であった。

中伊豆町の南方にある天城火山は富士火山帯に属し、基底が直径15km、直径6.4kmのカルデラを持つ巨大な火山で、周囲にも15の側火山がある。基盤は新生代第三紀中新世の初め(約2500万~約1500万年前)に海底火山の爆発によって凝灰岩などが堆積した湯ヶ島層群で、第四紀更新世中頃(約200万~約20万年前)の天城山の噴火で安山岩が噴出して火山の本体を形成している。約15万年前からは1回の噴火だけで小型の単成火山を形成する活動が盛んとなり、天城山周辺の小火山群を形成している。

町の南端にある側火山の1つカワゴ平は、北に開いた直径800mの火口を持つ。カワゴ平は約3000年前に大規模な爆発を起こし、石英安山岩の軽石と黒曜石からなる溶岩流・火碎流を噴出した。溶岩流は北に向かって長さ3.5km、幅1.25kmにわたって流れ下り、南部の筏場新田・地蔵堂地区の手前で止まっている。軽石質の泥流は筏場地区に及び、段丘状の地形を形成している。火碎流とともに大規模な土石流が発生し、大見川・狩野川を流れ下ったため、大見川流域にはカワゴ平由来の斑晶質の黒曜石や、軽石などが多く見られる。また、この噴火の際に噴出した軽石は伊豆半島一帯に分布し、風に乗って北西方向に流された火山灰は「カワゴ平バミス」と呼ばれ、県内の広い範囲で検出されている。特に中伊豆町内では火口に近いことから、その堆積が非常に厚く、20cmから1m以上に及ぶ。筏場地区付近では、火碎流の中から「神代杉」として知られる炭化した巨木が数多く発見されており、C<sub>14</sub>法によりB.P.2830±120年という年代が測定されている。このため、伊豆半島一帯ではカワゴ平軽石の層が地層の新旧を決める鍵層となっている。

大見城跡は、中伊豆町の中心部である八幡地区の南に接する柳瀬地区にある。大見城のある城山は大見川と冷川の合流地点にあり、北側の山裾は川の浸食によって切り立っている。本曲輪のある部分が210.4mで、南に向かって山は標高306.6mと高まるが、その間の尾根は標高約190mで、城の部分が独立した形をとる。大見川から冷川を通り、柏崎を越える道は「大見道」または「伊東街道」と呼ばれ、10世紀ごろより関東に通じる重要な交通路として発達していたことが、『保元物語』や『曾我物語』に見られる。大見城はこの道を見下ろす位置にあり、伊豆半島における交通の要衝を押さえているという役割を果たしていたと考えられる。また、冷川の対岸には同様に「古城」と伝えられる標高225.3mの吾妻山がある。

大見川流域は、川が流路を変えながら周辺を次第に侵食し、両岸に河岸段丘を発達させている。山側の段丘上は水田や畑地として利用され、一段下がった段丘上には集落が営まれている。段丘部分の標高



第2図 大見城跡 位置と周辺地形

は、柳瀬地区において約120m～150mである。大見城の山裾部分も現在は耕作地となっており、大見川の上流より用水路が引かれている。また、山からの湧水も豊富で飲料水などに利用されている。

## 2 歴史的環境

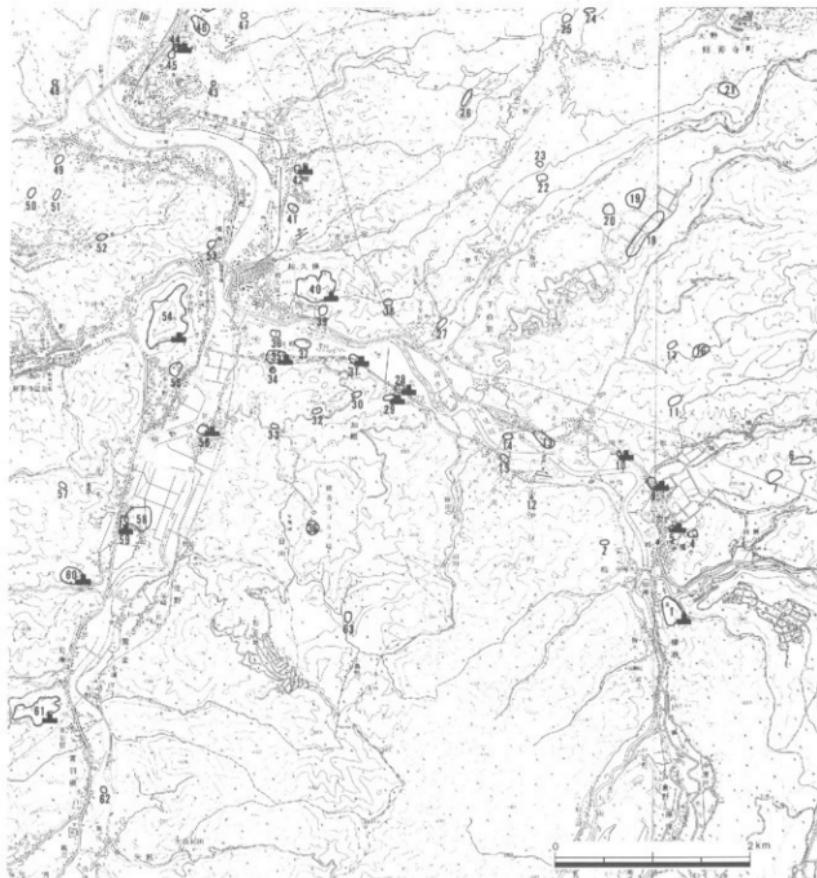
中伊豆町には数多くの遺跡が存在し、縄文時代より人々の生活活動の跡を見ることができる。縄文時代の遺跡は、近年3箇所で発掘調査が行われ、町内では18箇所の遺跡が登録されている。この中の1つである甲之背遺跡からは、縄文草創期の有舌尖頭器や大量の剝片が出土し、石器の粗削りから剝片作出、製品の調整までの一連の石器製作工程を行なった場、大規模な石器製作跡であることがわかった。

大見川流域の近隣の遺跡には、戦前より押型文土器や諸磯式土器などが採集されている葦久保遺跡（旧聖勞農園跡）や甲山遺跡がある。また、桜台遺跡は修善寺町側の大見川右岸に突き出した標高130mの丘陵に位置し、伊豆で初めて発見された縄文時代早期の集落遺跡として学史的な意義を持つ遺跡である。検出した住居跡の配置がコの字状に配置されているのは注目に値する。また、平成6年度から平成7年度にかけて六仙山遺跡が発掘調査された。この遺跡からは早期の住居跡が検出され、6基の住居跡が交互に並ぶように配置されているのが興味深い。

縄文時代中期の遺跡には、大見川流域で最も巨大な遺跡である上白岩遺跡がある。大見川右岸の第二段丘上に位置し、西川や城川によって侵食され独立丘陵状を呈している。昭和28年の下大見村の「村だより」に石器や縄文土器が紹介され、当時は製作所横遺跡と称されていた。昭和53年に第1次調査が開始され、直径13mの環状列石1基、住居跡6基、土坑70基、配石遺構21基が検出されている。住居跡は加曾利E3式と加曾利E4式の2時期が見られ、土坑は加曾利E2式から称名寺式まで長期間にわたっている。この第1次調査の箇所が現在、国指定の史跡となっている。第II次調査では遺跡の範囲が20000m<sup>2</sup>にも及び、全域にわたって縄文時代中期後半から後期前半に属する配石遺構群の分布が確認された。第III次～第V次調査では、調査面積は狭いが、遺跡の北東部を中心に進められ、遺跡の範囲の一端を確認するに至った。現在、第IX次調査まで進められている。上白岩遺跡は、狩野川流域の拠点集落である修善寺大塚遺跡と立地条件や配石遺構の存在、縄文中期後葉から後期前葉の期間といった類似性が認められるが、遺構の内容、年代等に若干の相違があると考えられる。上白岩遺跡の対岸には前の沢遺跡があり、敷石住居が検出されている。このほか、大見川の支流である年川流域には、縄文時代中期後葉の配石遺構を伴う年川前田遺跡や池ノ本遺跡、入谷平遺跡など重要な遺跡が多い。

中伊豆町においては、弥生時代の遺跡が未発見のため、この時期について詳しいことはわかっていない。古墳時代の遺跡としては、大見城西側の梅木地区に古墳時代後期の横穴墓が存在するが、未調査である。現況では、羨道が退化した筒形の平面プランをもつ横穴と考えられている。また、八幡地区的湯の尻付近では須恵器の丸底短頸壺が発見されている。

古代より大見氏はこの地に定着した豪族で桓武平氏を名乗っていた。大見城は大見平三家政または大見小藤太成家が構築したと推定される。『東鑑』によれば、成家は伊東氏の一族である工藤祐経に家臣として仕えた。祐経の命により工藤祐経の暗殺を謀るが、誤って祐経の子祐泰を射殺してしまい、安元三年(1177)祐泰の弟祐清の手勢に攻められ、八幡三郎行氏とともに非業の死を遂げている。治承四年(1180)源頼朝の挙兵の際には、大見家秀、大見平次実政、大見平太政光といった大見氏一族の名が見える。大見氏の本領(大見郷)は、惣領の大見平太政光が繼ぎ、文治二年(1186)に大見家秀は頼朝の命を受けて越後白河荘の地頭職として任地へ移住していく。このほか、大見氏の一族は下野国、伊勢国、加賀国、美濃国、武藏国の地頭職として赴任しており、源頼朝からの信頼は大変厚かったことがわかる。しかし、その後の消息はほとんど不明となり、越後国白河荘の大見氏が後に水原氏と称して上杉謙信に仕え、江戸時代まで存続することが確認されるのみである。



遺跡名	時代	遺跡名	時代	遺跡名	時代	遺跡名	時代
1 大見城	縄文・中世	17 大山	縄文	33 誕烟	奈良・平安	49 大林	縄文
2 梅木	古墳	18 奥原	縄文	34 子神社	古墳	50 平平	縄文
3 原畠	縄文	19 熊ヶ洞	縄文	35 加殿城	中世	51 仲林	縄文
4 法華堂	縄文	20 下荒区	縄文	36 中原 I	中世・近世	52 荒久	縄文
5 八幡館	中世	21 入谷平	縄文	37 中原 II	縄文	53 飯塚	縄文・弥生・古墳
6 葦久保	縄文	22 池ノ本	縄文	38 新野	縄文	54 修善寺城	中世
7 甲山	縄文	23 立間	縄文	39 桜台	縄文	55 東小学校	縄文
8 甲之背	縄文・近世	24 普ヶ沢	縄文	40 柏久保城	中世	56 日向館	中世
9 城城	中世	25 出口	縄文	41 馬場	縄文	57 滝頭	縄文
10 八田館	中世	26 八久保	縄文	42 牧之郷館	中世	58 大塚	縄文
11 長池	縄文	27 年川前田	縄文	43 御社	縄文・古墳	59 大平館 I	中世
12 合原	縄文	28 田代館	中世	44 吉田館	中世	60 大平城	中世
13 上白岩	縄文・近世	29 田代城	中世	45 城内	縄文・古墳	61 狩野城	中世
14 上村	縄文	30 小山田	縄文	46 向原	旧石器・漢文・古墳	62 狩野塚	古墳
15 前の沢	縄文	31 田代館 II	中世	47 平林	縄文・平安	63 美野	縄文・古代
16 犀ヶ平	縄文	32 小山田上	縄文	48 小室	縄文		

第3図 周辺遺跡分布図・地名表

戦国時代にはいると、明応二年（1493）に伊勢新九郎長氏（北条早雲）が伊豆に侵入、堀越公方足利茶々丸を自害させた。この後、大見郷の武士たちは早雲に従い、北条軍団の伊豆衆に組み込まれた。この頃の文書に梅原六右衛門、佐藤左衛門、佐藤七郎左衛門の名が見られる。いわゆる「大見三人衆」と呼ばれた在地領主たちである。最近の研究によれば、明応四年（1495）早雲の伊賀入道宛て文書から、早雲と狩野氏との間に戦闘があったことがわかっている。（小和田 1991）明応六年（1497）四月の大見三人衆宛ての状況に、狩野氏の出城である柏久保城の改修普請と戦闘についての記録が見られ、早雲と狩野氏の戦闘の中で、明応六年（1497）十二月段階においても大見城が籠城の状態であったことがわかる。のことから、『北条五代記』に見られるように早雲は「一ヵ月で伊豆を平定した」というのではなく、狩野氏が粘り強く抵抗していたため、伊豆一国の平定にはかなりの時間を費やしたと考えられる。また、柏久保城の戦いで、戦功のあった大見三人衆に陣夫と細工役を免除しながらも、年中三回の大見城修復の普請を命じていることから、狩野氏と対抗する戦略上、大見城は重要な城と位置付けられていたと考えられる。

大見城跡周辺の中世遺跡としては、大見川右岸の段丘上に八田館がある。現在は県道が中央を横切り、その面影はないが、地籍図で復元すると土塁に囲まれた方形区画の居館であったことがわかる。一説には八田四郎家家の館と伝えられる。城城は城平太の居館と伝えられているが、大見三人衆の一人佐藤氏の居館とも伝えられる。

八幡地区には『増訂豆州志稿』で大見平三家政の居館と推定される八幡館がある。八幡地区の大見畠（だいけんばた）周辺を大見氏の館、その背後の吾妻山を大見古城と考える見方もある。（沼館愛三 1937）付近には大見塚と呼ばれる字名が残り、大見平三家政の墓と伝える。この墓は台風により損壊したため、現在では實成寺内に移設されている。（右写真参照）實成寺は正安三年（1301）大見左衛門實成が祖先の冥福を祈るために、大見氏の荒墟に建立した菩提寺と伝える。現在、境内の一部に土塁が残っており、鎌倉時代の武家屋敷の面影を留めている。

西側の修善寺町には大見川左岸の段丘上を城域とする加殿城があり、上城、中城、下城、中丸、梶谷の字名が残る。加殿字中原より圓場整備工事中に多量の銭貨が出土したことは注目される。田代城は、大見川右岸に突き出た尾根の先端に設けられた小規模な丘城である。田代冠者信綱の城と伝えられ、周辺に田代館Ⅰ、田代館Ⅱが確認されている。

大見城跡は東に宇佐美に通じる伊東街道、南は南伊豆に通じる交通の要衝を押さえ、大見川とその支流の冷川の合流点にあたる標高210mの丘陵の山頂部分に本曲輪を置いた山城である。本曲輪は南北20m、東西15mほどの平坦地で、かつては墓地として利用されていた所であり、北側には本曲輪を囲むように土塁、堀が廻らされている。北に下ると段差をつけて帶曲輪が構えている。さらに下ると、曲輪状になった平坦地があり、現在は諏



城山遠景



大見家政の墓（實成寺内）

訪神社が安置されている。この部分は神社建設により、虎口などの遺構が破壊されていると考えられる。本曲輪の南側部分は幅8mの堀切があり、城の南限である。諏訪神社手前の参道右側斜面には長大な縦堀が残っている。現在、鳥居が置かれている山裾部分は城山に登る入口であり、おそらく大手道であったと思われる。東側は急峻な崖で、谷下は冷川が流れ、天然の要害となっている。このように川を臨んだ要害の地を選定して城館を築いている例は、伊豆地方に数多く見られる。大見城周辺には「城ヶ平」「馬場沢」「敵ヶ平」「鍛冶谷戸」「矢取洞」など城郭に関する地名が残っており、現在の實成寺付近の「城ヶ平」に館跡があったと推定されている。

### 第3節 調査の概要

#### 1 調査経過

調査区は段丘上にあり、さらに石垣等によって調査区内に細かく段が存在し、調査区が細分されている。調査区を北より1区とし、最近の擾乱によって包含層が失われている部分より北を1区、擾乱部分の南から町道までを2区、町道から取水溝までを3区、取水溝から南端の約10mまでを4区、南端約10mを5区とした。石垣などにより細分されている部分や、調査工程上分割して調査した部分については「1-1区」のように枝番号を使用している。また、5区の南の1段下った部分が未買収であったが、用地取得が可能な場合は調査をするため、6区とした。

調査にあたって、相互の位置関係を示すため、10m×10mのグリッドを設定した。グリッドの基準線は国土方眼のVII系を用い、X=+45720、Y=-117070をA-1杭とし、これを起点に西から東へ向かってA・B・C…、南から北へ向かって1・2・3…の列を設定した。これを元に、グリッドの南西隅の杭の番号をもってグリッドを呼称した。

調査地区周辺の道路が狭く重機の搬入が原則では不可能であること、南端の圃場整備の際に作られた農道から調査区へ重機を上げるための搬入路を確保しなければならないことから、調査区南端の5区より調査を開始した。5区は上段を5-1区、下段を5-2区とした。5区は表土剥ぎから遺構面の調査まで全て人力で行い、排土の運搬には100Vのベルトコンベアを使用した。

5区終了後、5-2区を埋め戻し、5-1区と同じ高さに盛土を行い、下の農道から5区にかけて掘込み、重機の搬入路を作った。この作業と平行して、1区の調査を行なった。1区は試掘の際にトレーニング調査を実施していないため、表土を剥いだ後、東西方向にトレーニングを入れ、土層を確認しながらの調査となった。初めに1区の南半部を、次に北半部を調査し、南半を1-2区、北半を1-1区とした。1区も重機搬入が不可能であったため、調査は全て人力で行なった。1区は礫が多く検出され遺構の可能性があったため、礫の分布について記録を行なった。

また、1区調査中に3区～4区の上段部分について、試掘調査を行なっていなかったため、土の堆積状況を調査する目的で20mおきにトレーニングを4箇所設定した。このうち、1箇所（No.1トレーニング）については排水が悪いため調査できず、3箇所（No.2トレーニング～No.4トレーニング）について調査を行なった。この結果、山の斜面ではあるが、包含層の土が西半部を中心にしていたため、3区～4区の上段についても調査の必要があると判断された。トレーニング調査と並行して、4区上段の排水の悪い箇所について排水溝を掘り、調査を行なうため地表面を乾燥させた。

5区を埋め戻した後、重機により3区～4区の表土を除去し、4区南半部の調査を開始した。4区の南半部は上段を4-1区下段を4-2区とした。4-2区に続く4区北半部下段を4-4区として続けて調査を行なった。4区に続く3区の下段についても南半を3-2区、北半を3-3区、1段下がった



第4図 大見城跡調査区・グリッド配置図

第1表 発掘調査工程表

	6月	7月	8月	9月	10月	11月
1-1区			■			
1-2区		■	■			
1-3区					■	
2-1区					■	
2-2区					■	
2-3区					■	
3-1区		■ 試掘			■	
3-2区				■	■	
3-3区				■	■	
3-4区				■	■	
4-1区			■			
4-2区			■	■		
4-3区		■ 試掘			■	
4-4区			■	■		
5-1区	■	■				
5-2区	■	■				
6区					■ 試掘	



1区トレンチ調査



4区精査

部分を3-4区として調査を行なった。4区北半部の上段(4-3区)と3区北半部上段(3-1区)は排土の関係から、後の調査となつた。

3区下段(3-2区～3-4区)と4区(4-1区・4-2区・4-4区)の調査終了後、重機により、埋め戻しを行なつた。引き続き、2区の表土と3-1区・4-3区の排土を除去し、中世遺構面まで掘り下げを行なつた。この作業と並行して、1区の北側部分を1-3区として調査を行なつた。

また、6区は未買収であったが、地主の厚意によって試掘調査が可能となつたため、テストピット2箇所による試掘調査を実施した。この結果、6区はカワゴ平バミスと砂の互層が地中深くまで堆積する深い谷地形であることがわかり、遺跡の範囲内ではないことが確認された。このため、6区については本調査の対象外となつた。

2区は道路より北側の搅乱部分に続く地区を2-1区とし、道路で区切られた南側部分については上段を2-2区、下段を2-3区とした。2-1区は段があり上下に分けられているが、下段部分が狭いため1つの区として調査した。この調査の中で3区北半から2区にかけて土坑群が検出されたため、2箇所の土坑について理化学分析を行なう目的で、土壤の試料採取を行なつた。

2区とともに、残っていた3-1区、4-3区の調査を行なつた。3-1区、4-3区は重機で中近世の遺構が検出される面まで掘り下げ、精査を行なつた。この後、カワゴ平バミスの集積層を人力で掘り下げ、織文包含層を調査した。

各区について遺構面の平面図、断面図は1:20の縮尺を基本として記録し、状況に応じて1:10の縮尺図を作成した。遺物は取り上げる際にトータルステーションでポイントを取り、図上に位置を記録した。写真は6×7判、35mm(カラースライド、白黒、カラーネガ)の組合せで記録し、全景写真はローリングタワーを用いて撮影を行なつた。

全ての調査区において調査完了後、埋め戻しと整地を行なつた。重機の乗り入れ不可能な1-3区と2-1区、2-3区については人力で埋め戻し、他の調査区については重機で埋め戻しを行なつた。

遺物は現地において洗浄と注記を行い、出土地区ごとに分けてコンテナに入れ、仮収納を行なつた。

## 2 土層

### (1) 基本層序

大見城跡の基本層序は試掘の際に確認された層序とほぼ同様であるが、地形上、山崩れによる土の流出・流れ込み等によって、調査区により若干の堆積の違いが見られる。また、山側は畠地・水田として後世の削平を受け、表土も耕作による搅乱が見られる。

試掘の際に第2層とした表土直下の酸化鉄集積層については水田の直下に見られるため、数度にわたって盛土をして水田が作られた部分については、水田土壤と酸化鉄集積層が互層となっている。

全体を通しての基本的な層序は次の通りである。

第1層 表土：近現代の耕作土。

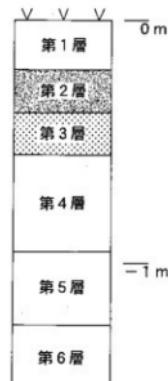
水田や畠地として調査直前まで使用されていた。

第2層 暗褐色土～黒色土：伊豆半島北部に広く分布する中近世の堆積層で、腐食質のしまりが弱い土である。

上部は色調がやや明るめである。中近世の遺物の包含層。

第3層 明褐色土：カワゴ平より噴出した径2～3mmの軽石・火山灰

の集積層。部分的に径5cm程度の軽石も見られた。



第5図 基本層序模式図

縄文時代後期に堆積し、年代の基準（B.P.3000）となる鍵層である。

上面に中近世の遺構が検出される。

第4層 褐色土：縄文時代前期の包含層。カワゴ平より噴出した軽石を含む。

第5層 極暗赤褐色土：スコリアを多量に含む層。こぶし大の礫を含む。

上面で縄文時代早期の遺物が検出される。

第6層 明褐色土：大型の段丘礫を含む地山。粘性が高い。

## （2）各区の堆積状況

調査区のほぼ全域が耕作地として利用されていたため、開墾による削平が各区において見られた。また、各区の地形等により土層の流失も多く、堆積の状況に差が見られた。このため、以下に各区の堆積状況をまとめ、概観してみる。

### 1区の堆積

1-1区、1-2区で確認された土層堆積は、標高145.7mの現地表面から約1.3m下までである。東西方向の土層帯を観察したところ、表土の下には2層の黒褐色土があり、厚さ約10cmで西に向かって緩やかに傾斜して堆積していた。3層の明褐色土（カワゴ平バミス集積層）は8cmから15cmの厚さで部分的に残っていた。3層上面においては、中近世の遺構は確認されなかった。4層の暗褐色土は大小の礫を大量に含み、40cmの厚さで堆積する。試掘の結果では暗褐色土中に配石遺構が存在する可能性が指摘されていたが、遺構は検出されなかった。遺物は縄文土器の細片がわずかに出土したのみである。比較的基本土層に近似した堆積であった。1-2区は南に向かって高まる地形であり、これを削平して水田を作っているため、南端では表土直下が地山となり、包含層は残存していないかった。

1-3区で確認された土層堆積は、標高145mの現地表面から約0.5m下までである。この調査区は今回の調査で、最も標高の低い地点である。表土はやや赤みを帯びた暗褐色土で、約15cmの厚さであり、下部には厚さ5cmにわたって酸化鉄・マンガンの集積が認められた。表土の下は5層の極暗赤褐色粘質土で、上面より石礫と縄文土器片がわずかに出土したが、遺構は検出されなかった。この層は礫を多量に含み、試掘時に配石遺構と考えられた石はこれらの一端であることが確認された。

### 2区の堆積

2-1区は近年、住宅を取り壊した際に出た廃棄物を埋めるため、重機によって掘り込まれてしまった地区である。包含層である褐色土層まで擾乱が及び、遺構は検出されなかった。遺物は縄文土器片がわずかに出土しているのみである。

2-2区で確認された土層堆積は、標高147.6mの現地表面から約1.5m下までである。東西の土層帶の観察より、基本的に6層に分層される。表土は暗褐色を呈する粘質土で、10cmから30cmの厚さである。下部には厚さ5cmから1cmの酸化鉄・マンガンの集積が認められた。調査前は水田耕作土として利用されていたようであり、明治期から現代に至るまでの陶磁器片が少量出土したが、中近世に遡る遺物は認められなかった。2層は非常にしまりが弱く、腐食化の進んだ土壤で、いわゆる「黒ボク土」である。この土層は伊豆半島北部に広く分布し、中近世の包含層とされている。10cmから20cmの厚さで堆積していたが、遺物は出土していない。3層は大量のカワゴ平バミスを含み、黄褐色を呈する。3層上面において黒褐色土を覆土とするピット、土坑を検出した。土坑内より土師器の細片が出土しているが、時期は不明である。層中より少量の縄文時代前期と考えられる土器が出土した。4層は粘性が非常に弱い黄褐色土である。諸磧式の土器がまとめて出土していることから、この土層の形成時期は縄文時代前期後半と考えられる。5層は極暗赤褐色粘質土で、上面から茅山下層式と考えられる土器がわずかであるが出土している。この層の堆積は東の山側から、西に向かって大きく傾く。6層は明褐色粘質土で、

粘性が非常に強い。また、大小の礫を多量に含む。5層と6層は漸移的に堆積している。

2-3区は、2-2区とコンクリート塀によって区画されており、地表面での比高差が約60cmで2-2区よりも1段低くなっている。4層までは2-2区と同様の堆積を示すが、2層の黒色土の堆積と3層のカワゴ平バミス集積層の堆積が薄く、水田開発により削平されたと考えられる。中近世の遺構は、3層上面において検出されたピットと土坑である。縄文土器片、黒耀石剝片が出土しているが、縄文時代の遺構は確認されなかった。

### 3区の堆積

3区は3-1区、3-2区が石垣によって上下2段に区画され、4区に続いている。3-3区は下段である3-2区に続き、さらに1段下がるように3-4区がある。いずれも近年まで畑地として耕作されていた。

3区で確認された土層堆積は標高148mの現地表面より、約1.3m下までである。東西の土層帯を観察したところ、中近世の包含層である黒色土は、上段の3-1区では約10cmで緩やかに傾斜して堆積しており、石垣を隔てて下段の3-2区では完全に削平された状態であった。元は上段に見られるように、緩やかな傾斜をつけながら3層を覆っていたと思われる。3層のカワゴ平集積層は、やや黒みを帯びているが、約5cmの厚さで堆積している。中近世の遺構は3-2区、3-3区、3-4区の褐色土上面で検出されたピット、土坑である。3-1区は遺構が検出されなかった。4層はやや黒みを帯びた褐色土で、起伏が大きく、堆積の厚さは一定ではない。カワゴ平バミスを少量含む。縄文時代の遺構、遺物は検出されなかった。3-3区の東側は河岸段丘の基盤をなす黄褐色土が浅い位置に存在するようである。遺物は表土において、近世後半から現代までの陶磁器片が混在し、中世以前に遡るものは見られなかつた。

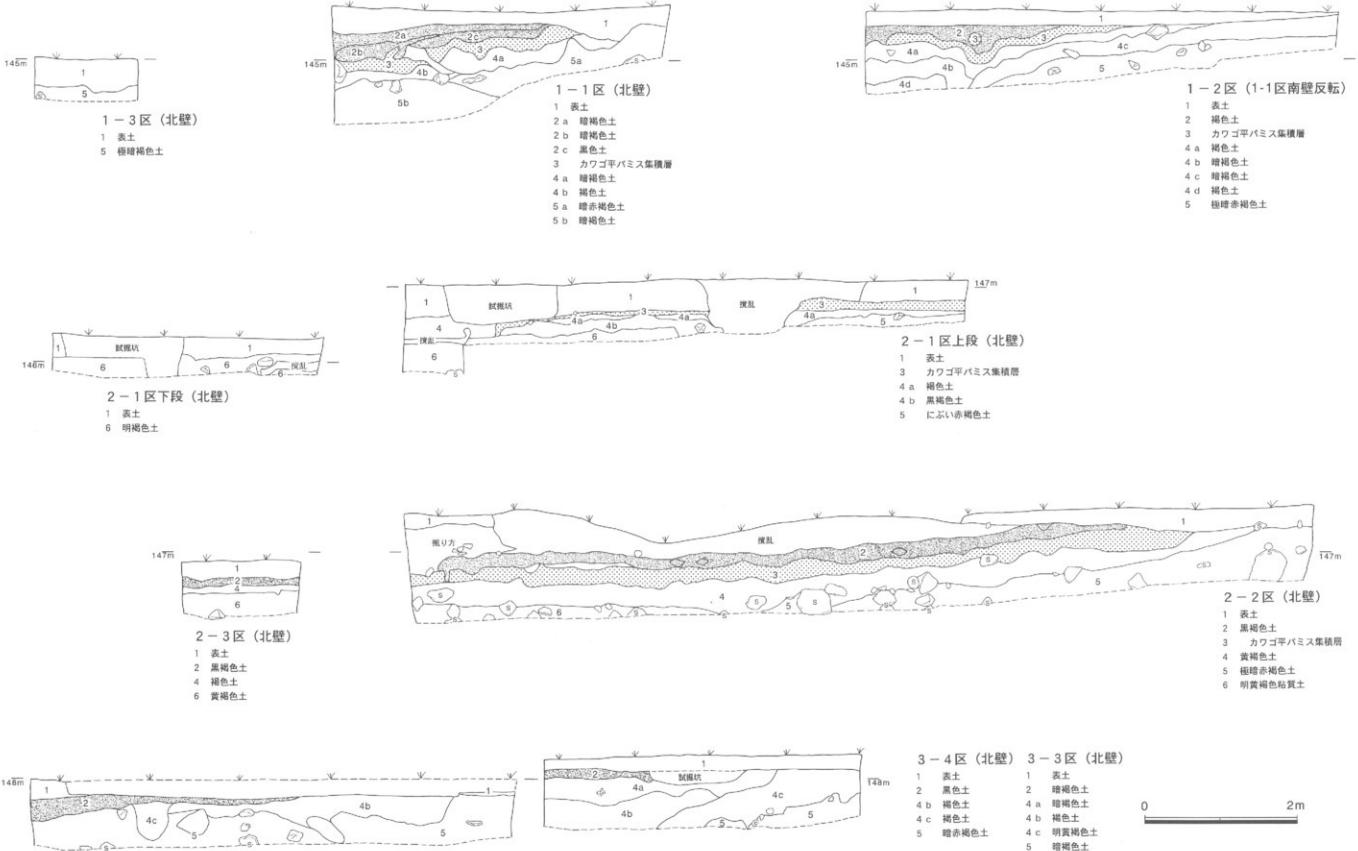
### 4区の堆積

4区は石垣によって上下2段に区画されており、比高差は約1mである。上下段とも最近まで、畑や水田として耕作されていた。

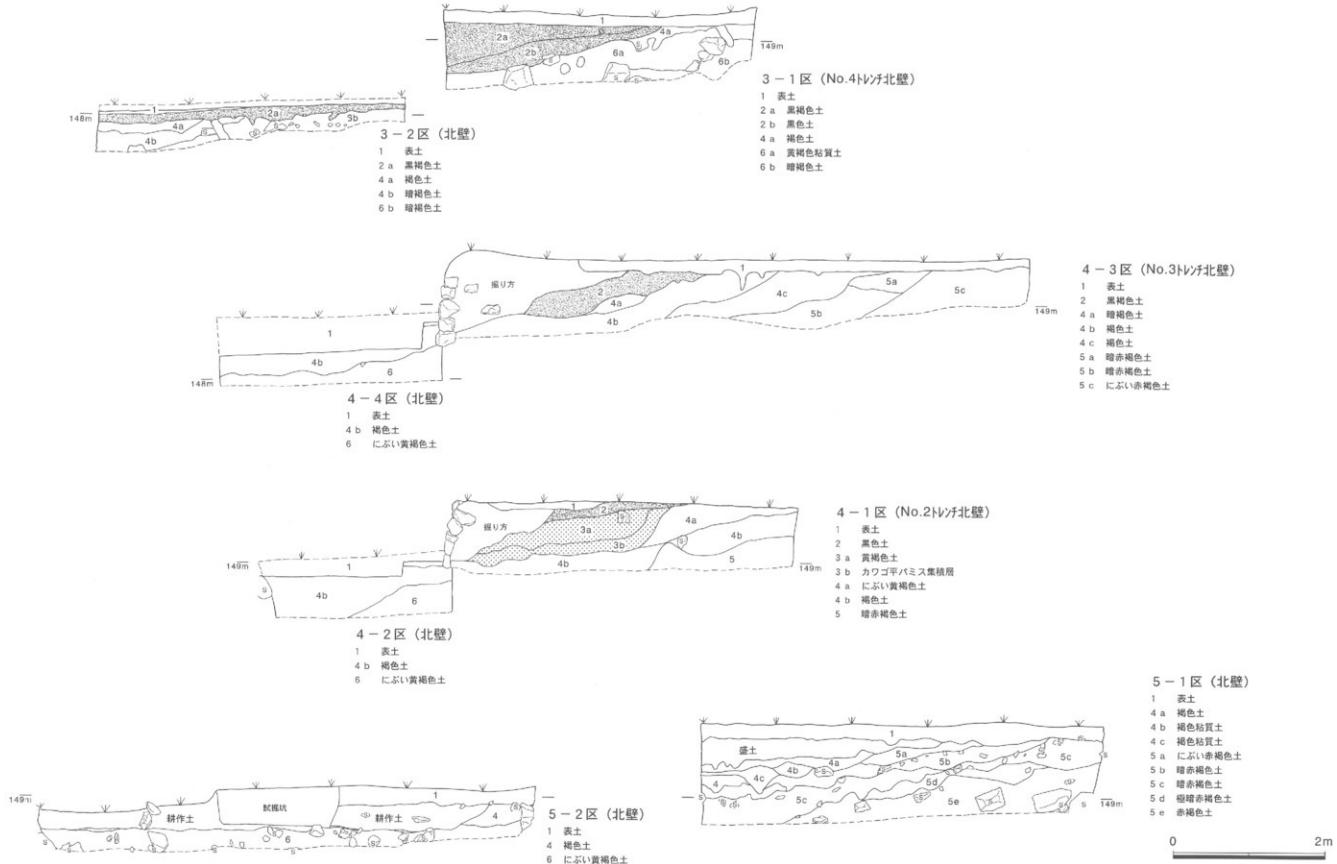
4-1区で確認された土層堆積は、標高149.7mの現地表面から約1m下までである。表土下より、石垣の掘り方が検出され、石垣の約130cm東側から掘り込まれていることが確認された。掘り込みの深さは約80cmで、内部より少量の陶磁器片が出土した。上段の4-1区の4層にあたる褐色土が、下段の4-2区では表土直下の褐色土にあたり、この褐色土は西側に向かって大きく傾斜していることがわかる。

4-3区で確認された土層堆積は、標高149.7mの現地表面から約1.5m下までである。東西の土層帯を観察したところ、上段にあたる4-3区の表土は約15cmの厚さで、下部には約5cmの厚さで酸化鉄・マンガンの集積が見られる。表土直下において石垣構築の掘り方が確認された。石垣より約1m東側から掘り込まれ、深さは約1m、覆土は黒褐色で中に一辺約5cmの角礫が大量に詰め込まれていた。この角礫は石垣の裏込めと思われる。掘り方の内部より、近現代の陶磁器、16世紀後半頃と考えられる瀬戸・美濃窯の摺鉢片が出土した。

4-4区で確認された土層堆積は、標高148.6mの現地表面から約0.8m下までである。表土は灰色粘質土で、厚さは約10cmである。基本層序の第3層にあたるカワゴ平バミス集積層の上面に酸化鉄の集積が見られ、第2層にあたる黒色土は耕作により削平されたと考えられる。褐色土（カワゴ平バミス集積層）の厚さは約10cmで、上面でピット、溝状遺構を検出した。4層は黒褐色土で部分的に黄灰色土のブロックや灰茶色土のブロックが混入しており、不安定な堆積である。5層は極暗赤褐色土であった。4区においては縄文時代の遺構、遺物は検出されなかった。



第6図 各区土層図 (1)



第7図 各区土層図(2)

## 5 区の堆積

5 区は 4 区と同様に、石垣によって上下 2 段に区画され、4 区に続く。南側は大きく下がり、3 m から 4 m の比高差の急斜面となっている。

5 区で確認された土層堆積は、標高 150m の上段の現地表面より約 1.3m 下までである。5 区は今回の調査のなかでは最も標高の高い調査区である。表土は 15cm から 20cm の厚さで、調査以前は休耕田であった。下部には厚さ約 5cm の酸化鉄・マンガンの集積が認められる。5-2 区内に古い石垣の根石が残存し、以前に段差をつけて水田を構築していたことがわかる。5-2 区内の上段の水田面が 5-1 区の 3 層（褐色土）上面につながることから、元は比較的段差の少ない水田が上下 2 枚あったと考えられる。その後、5-1 区に山崩れによる再堆積があり、石垣を構築して約 1m の比高差のある現在の水田を作ったと推定される。遺物は近世後半の陶磁器が少量出土した。下層は段丘の基盤層である明褐色土で、大小の礫を大量に含んでいた。

## 6 区の堆積

6 区は未買収地であったが、地主の厚意により、テストピット 2 箇所を設定し、堆積状況についての調査を行なった。6 区は現在、畑地として使用されており、地表面での 5 区との比高差は 3m から 4m である。

表土である耕作土の下は暗赤色土で、周囲の土壤の流れ込みと考えられる。この層の下は、カワゴ平バミスと火山から噴出したと考えられる細砂と粗砂、厚さは 1m 以上である。他の調査区におけるカワゴ平バミスの集積層は 10cm 前後であることから、周辺から大量の土砂の流れ込みがあったと考えられる。また、現在も大きな段差が見られることからも、古来より 6 区周辺は谷地形であったと推定される。テストピットからは、遺物遺構等は検出されなかった。

## 参考文献

- 中伊豆町教育委員会 『大見城一（主）県道伊東西伊豆線改良工事に伴う試掘調査報告書』 1996  
中伊豆町教育委員会 『丸沢遺跡・六仙山遺跡』 1996  
中伊豆町教育委員会 『甲之背遺跡発掘調査報告書』 1996  
中伊豆町教育委員会 『上白岩遺跡発掘調査報告書』 1979  
中伊豆町教育委員会 『上白岩遺跡Ⅲ IV V 次発掘調査報告書』 1984  
中伊豆町教育委員会 『上白岩遺跡 6 次、7 次発掘調査報告書』 1991  
中伊豆町教育委員会 『上白岩遺跡 8 次発掘調査報告書』 1991  
中伊豆町教育委員会 『上白岩遺跡 9 次発掘調査報告書』 1992  
中伊豆町教育委員会 『大見の史話と伝説』 1981  
中伊豆町教育委員会 『町誌資料 歴史・行政編』 1992  
中伊豆町教育委員会 『中伊豆町誌』 1994  
静岡県田方郡役所 『田方郡誌 金（復刻）』 長倉書店 1972  
秋山富南 萩原正平 萩原正夫 戸羽山瀚 『増訂豆州志稿・伊豆七島誌』（復刻） 長倉書店 1967  
蓮山西町教育委員会 『蓮山西町史 通史編』 10巻  
修善寺町教育委員会 『修善寺大塚』 1982  
静岡県教育委員会 『静岡県の中世城館』 1981  
沼倉愛三 『伊豆狩野地方の古城址の研究』『静岡県郷土研究』 8 1937  
小和田哲男 『北条早雲と大見三人衆』『地方史静岡』 19 号 1991  
静岡県土木部建設課 『平成 6 年度道路交通センサス報告書』 1996  
地学団体研究会静岡支部編 『静岡の自然をたずねて』 1992  
静岡県地学会 『駿遠豆大地みてあるき』 1996

## 第II章 中近世の遺構・遺物

### 第1節 遺構

中近世の遺構は2-2区、3-3区、3-4区を中心に黒褐色土を除去した面で検出された。検出された遺構は土坑、小穴群、溝状遺構である。遺物は黒褐色土中からはほとんど出土せず、遺構からはSF-184より土師質の土器の細片が1点、SF-95の覆土直上より寛永通寶1枚が出土したのみである。また、表土と石垣の裏込め土内より、中世から近代に至る陶磁器が少量出土した。小穴群は、大手道と推定される諿訪神社の鳥居前の道の南側を中心に、大見城西側山裾部分の比較的緩やかな傾斜地で検出された。東側は冷川が流れ、城山の斜面は急峻な崖であるため、大見城に関わる人々の居住域は城山の西から南にかけて広がると推定される。このことから小穴群は掘立柱建物や棚列の可能性が高い。

#### 1 土坑

土坑は2-2区で2基、2-3区で1基、3-4区で3基、3-2区で6基、4-3区で1基、4-4区で1基検出されている所もある。2-3基まとめて検出されている所もある。土坑内からの遺物の出土はほとんどなく、土坑の性格として、その形状から墓擴の可能性があったため、2-2区のSF-184とSF-168について覆土の理化学分析を実施した。しかし、土坑そのものが表土（耕作土）に近いために、農作物の影響が強く出てしまい、確証を得るに至らなかった。理化学分析の詳細については第V章第2節を参照されたい。以下、各土坑について概略を述べる。

##### S F - 184 (第10図)

2-2区のA-16グリッド南半部で検出された。長径100cm、短径87cm、深さ37cmの円形プランの土坑である。底部は平坦であり、立ち上がりが垂直気味であるため桶状を呈する。覆土は下部にパウダー状の黒褐色粘質土が薄く堆積し、南側はやや色調が明るい暗褐色粘質土が流れこむような形で堆積している。覆土の大部分が黒褐色粘質土で、カワゴ平バミスと炭化物をわずかに含み大量の小石が混じる。底部に近い位置より土師質土器の細片が出土した。

##### S F - 168 (第10図)

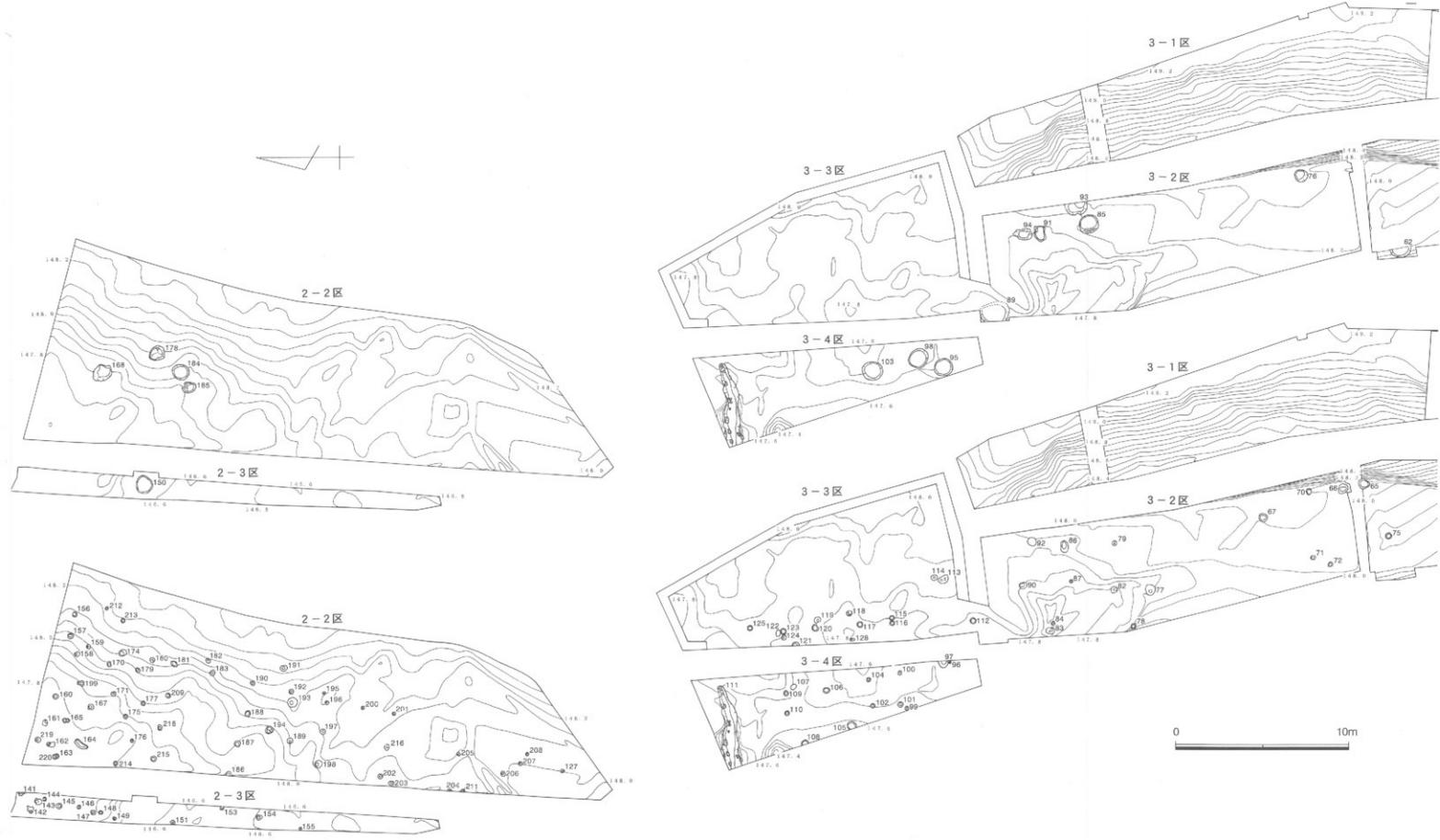
2-2区のA-16グリッド北半部で検出された。長径120cm、短径97cmで、深さは南側にかけて傾斜しながら最大55cmとなる不整形の土坑である。覆土は底面と同様に南側に傾斜して堆積し、3つに分層される。上部はカワゴ平バミスを少量含む黒褐色粘質土、次が暗褐色粘質土、下部が黒褐色粘質土である。いずれの層もしまりが弱く、こぶし大の礫を含んでいた。遺物は出土していない。

##### S F - 150 (第10図)

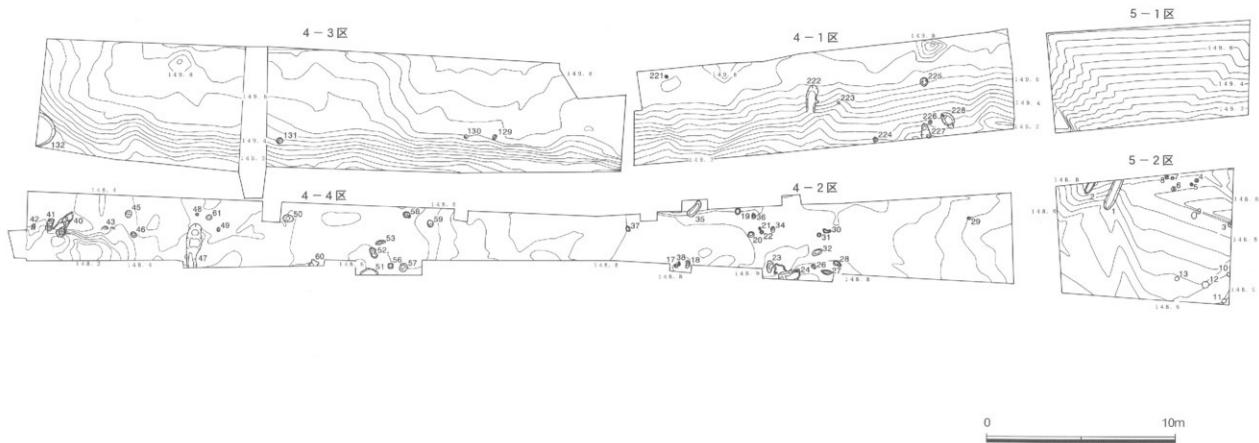
2-3区のA-16グリッド北半部で検出された。長径102cm、短径97cm、深さ13cmの円形プランの土坑である。底部は平坦である。2-3区は上段の2-2区との間に段差があり、土坑の本来の掘り込みは石垣構築の際に削平されたと考えられる。覆土は黒褐色粘質土で、カワゴ平バミスと炭化物を少量、人頭大の礫を含む。覆土より遺物は出土していない。

##### S F - 95 (第11図)

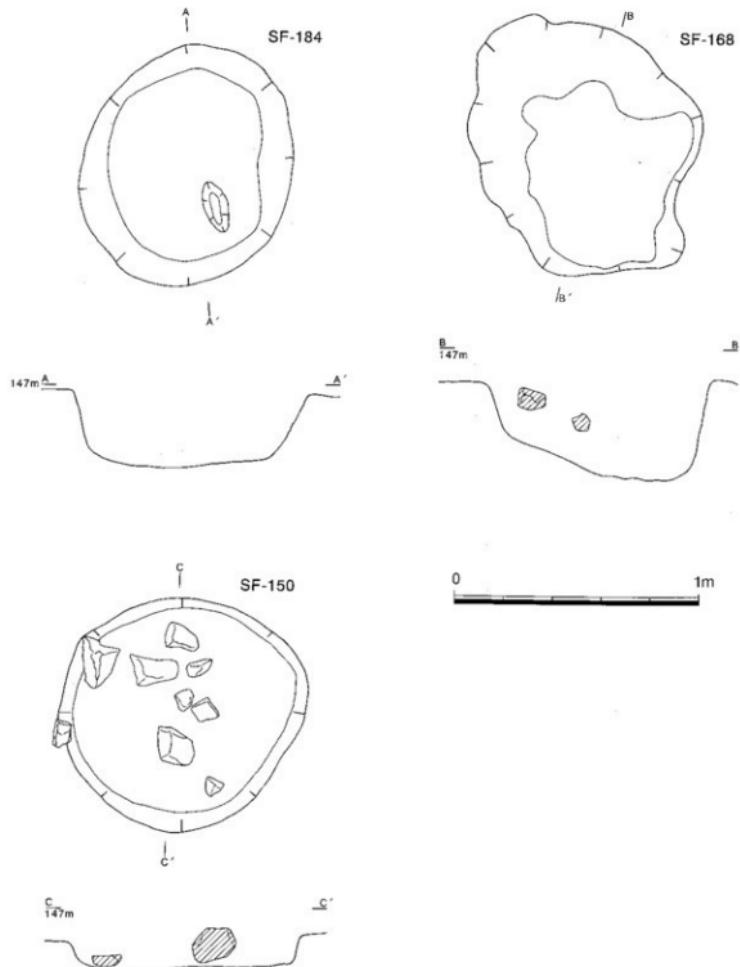
3-4区のA-12グリッド南半部で検出された。長径110cm、短径100cm、深さ52cmの円形プランの土坑である。覆土は上部がカワゴ平バミスを含み、色調がやや明るく褐色で、その下部がカワゴ平バミスを含む黒色土、底部に近い部分が褐色土をブロック状に含む黒色土である。上層の褐色土上面より寛永通寶が1枚出土している。底面には人頭大の礫が大量に含まれていた。



第8図 中近世遺構全体図（Ⅰ）



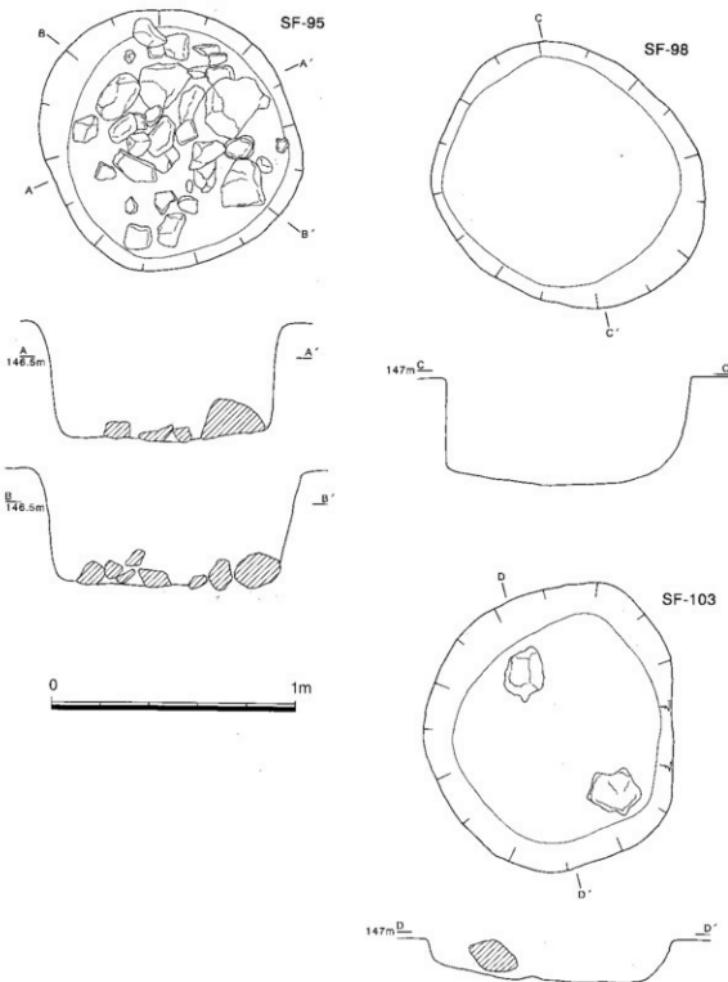
第9図 中近世遺構全体図(2)



第10図 2-2区検出土坑

第2表 2区土坑計測表

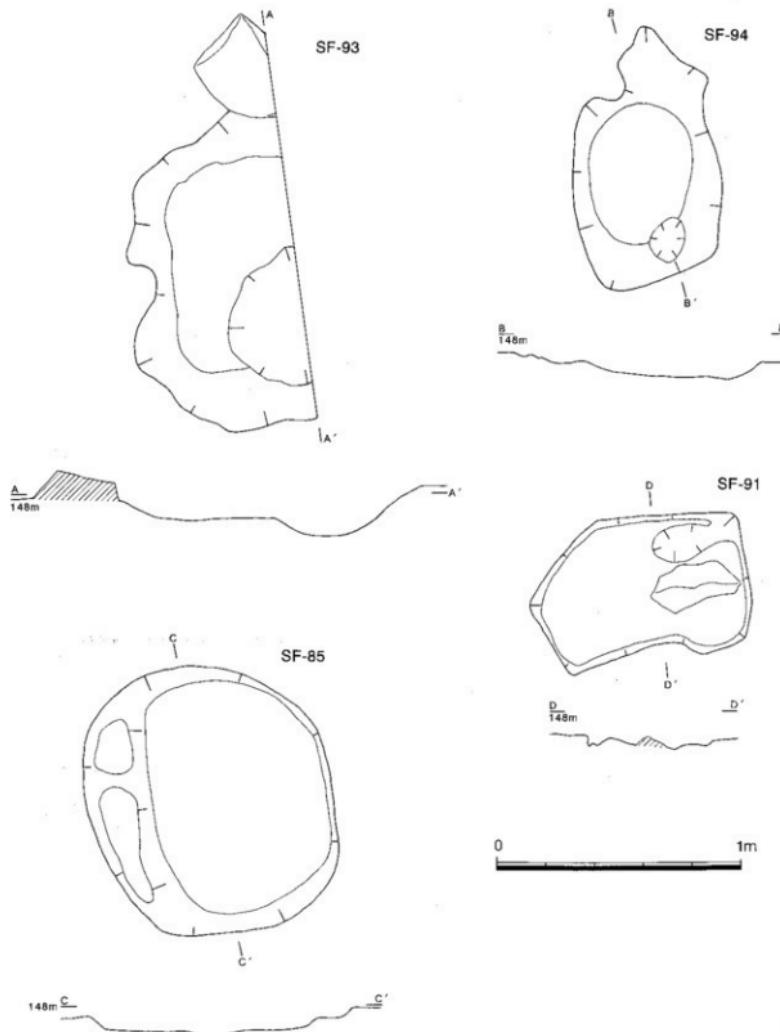
遺構番号	出土区	グリッド	法量(cm)			備考
			N-S	E-W	深さ	
SF-184	2-2区	A-16(S)	100	87	37	
SF-168	2-2区	A-16(N)	106	97	55	
SF-150	2-3区	A-16(N)	96	100	13	



第II図 3-4区検出土坑

第3表 3-4区土坑計測表

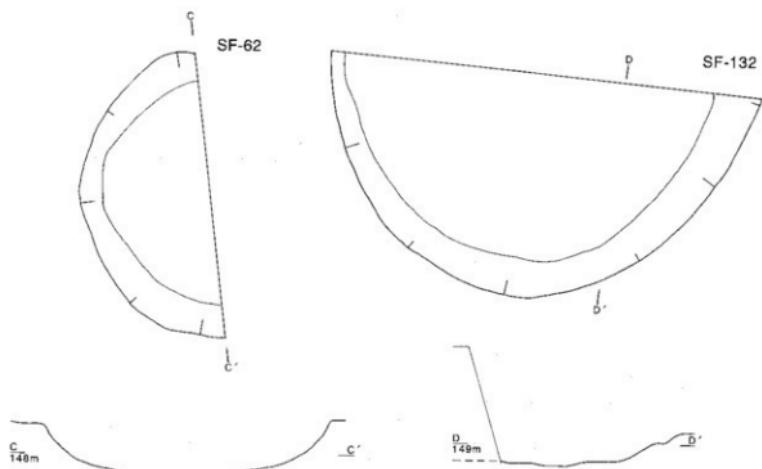
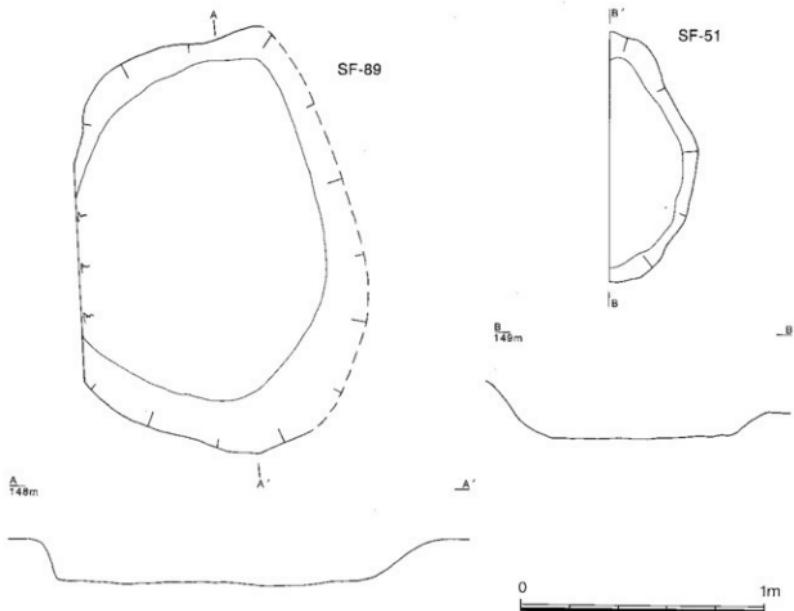
遺構番号	出土区	グリッド	法量(cm)			備考
			N-S	E-W	深さ	
SF-95	3-4区	A-12(S)	107	97	52	覆土上面より寛永通寶出土
SF-98	3-4区	B-12(S)	108	112	47	
SF-103	3-4区	A-12(S)	117	106	18	



第12図 3-2区検出土坑

第4表 3-2区土坑計測表

遺構番号	出土区	グリッド	法量 (cm)			備考
			N-S	E-W	深さ	
SF-93	3-2区	B-11(S)	135	(72)	20	東側は試掘時に削平
SF-91	3-2区	B-11(N)	60	92	8	
SF-85	3-2区	B-11(S)	110	102	16	
SF-94	3-2区	B-11(N)	106	61	11	



第13図 3-2区・4区検出土坑

第5表 3-2区・4区土坑計測表

遺構番号	出土区	グリッド	法量(cm)			備考
			N-S	E-W	深さ	
SF-89	3-2区	B-11(N)	174	(120)	21	東は推定、西側はコンクリート壁で切られる。
SF-62	3-2区	B-9(S)	117	(54)	23	東側は削平されている。
SF-132	4-3区	C-8(S)	(83)	176	23	北側は水路による攪乱。
SF-51	4-4区	B-6(S)	102	(36)	23	

( ) 内は残存値

**S F - 98** (第11図)

3-4区のA-12グリッド南半部で検出された。長径116cm、短径110cm、深さ47cmの円形プランの土坑である。覆土は上部が炭化物を含む暗褐色土で、その下部がカワゴ平パミスを少量含む暗褐色土、底部に近い部分はカワゴ平パミスを含む黒褐色土である。底部は平坦で垂直に近い掘り込みである。遺物は出土していない。

**S F - 103** (第11図)

3-4区のA-13グリッド南半部で検出された。長径120cm、短径102cm、深さ18cmの円形プランの土坑である。水田耕作により掘り込み面が削平されていると思われる。底部は平坦で比較的緩やかに立ち上がる。覆土はカワゴ平パミスを少量含む黒褐色土で、人頭大の礫を2個含んでいた。土坑内より遺物は出土していない。

**S F - 93** (第12図)

3-2区のB-12グリッド南半部で検出された。東側部分が石垣により完掘できなかったが、円形に近い不整形の土坑と考えられる。半分が石垣構築により壊されていると考えられ、径は135cmで東側も同様に掘り込まれていたと推定される。底面は南側がわずかに掘り窪められている。覆土はカワゴ平パミスを含む黒色土である。

**S F - 91** (第12図)

3-2区のB-11グリッド北半部で検出された。長辺92cm、短辺60cmの梢円形に近い不整形の土坑である。覆土はカワゴ平パミスを少量含む黒褐色土である。東側中央部に大型の礫が検出されたが、下層の礫である。土坑内より遺物は出土していない。

**S F - 85** (第12図)

3-2区のB-11グリッド南半部で検出された。長径112cm、短径106cmの円形プランの土坑である。底部は平坦で、比較的緩やかに立ち上がる。覆土は黄褐色粒とカワゴ平パミスを少量含む黒褐色土で、粘性がややあり、上面は赤みを帯びる。覆土内より小礫が多数出土したが、遺物は出土していない。

**S F - 94** (第12図)

3-2区のB-11グリッド北半部で検出された。長径100cm、短径60cmの不整形の土坑である。底面には凹凸が見られる。覆土は黄褐色粒とカワゴ平パミスを少量含む黒褐色土である。土坑内より遺物は出土していない。

**S F - 89** (第13図)

3-2区のB-11グリッド北半部で検出された。円形プランの土坑である。試掘トレーニチに上部を削平されているため、深さは不明である。西側はコンクリート壁の構築により切断されている。覆土はカワゴ平パミスを少量、小礫と赤褐色粒を微量含み、青灰色のブロックが混入されている。土坑内より遺物は出土していない。

#### S F - 62 (第13図)

3-2区のB-9グリッド南半部で検出された。直径120cmの円形プランの土坑である。底部は平坦であり、断面は皿状を呈する。覆土は暗褐色土である。土坑内より遺物は出土していない。

#### S F - 132 (第13図)

4-3区のC-8グリッド南半部で検出された。直径180cmの円形プランの土坑である。大量の礫が含まれていた。覆土は暗褐色土で、遺物は出土していない。

#### S F - 51 (第13図)

4-4区のB-6グリッド南半部で検出された。西側は調査区外へ延びるため、全形は確認できなかつたが、直径102cmの円形プランの土坑であると考えられる。底部は平坦で、断面は皿状を呈する。覆土は暗褐色土で、上部はカワゴ平パミスを少量含み、やや色調が明るい。土坑内より遺物は出土していない。

### 2 挖立柱建物・櫛列

今回の調査で検出された小穴群を検討し、等間隔に並ぶもの、同方向に並ぶものをつなぎ合わせ、掘立柱建物のプランを想定した。その結果、2-2区において掘立柱建物5棟と櫛列2列（第14図参照）、3-3区において櫛列1（第19図参照）を想定した。調査区の幅が狭いこと、東西が道路と石垣により削平を受けていることから、遺構の残存状況が悪く、実際には想定と異なるプランを持つ可能性もある。以下、想定されたプランについて述べる。

#### S H - 1 (第15図)

S H - 1はB-16～B-17グリッドにかけて検出された。桁行3.2m、梁行3mと推定される1間×1間のほぼ方形プランの掘立柱建物である。建物方位は桁を東西方向としている。

#### S H - 2 (第15図)

S H - 2はB-16～B-17グリッドにかけて検出された。桁行3.1m、梁行2.8mと推定される。1間×1間の掘立柱建物である。建物方位は桁を東西方向としている。S H - 1と規模、方位がほぼ一致していることから、立て替えられていると考えられる。しかし、柱穴の覆土はほとんど変わらなく、S H - 1との新旧関係は明らかにし得なかった。

#### S H - 3 (第16図)

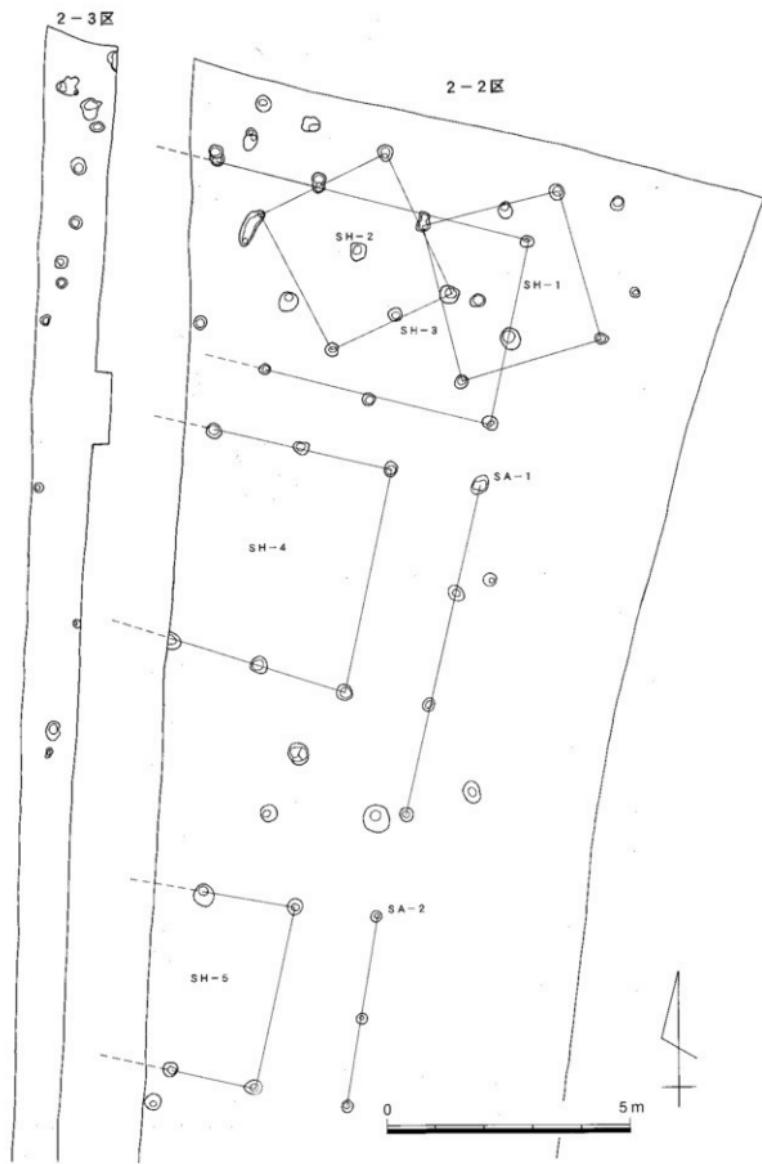
S H - 3は2-2区のB-16～B-17グリッドにかけて検出された。西側は2-3区に延び、石垣により削平されていることから、全貌は不明である。このため、ここでの推定とは異なるプランであった可能性もあるが、2-3区から出土した小穴と関連させて考えると、桁行9.4m、梁行4mを測る4間×2間の掘立柱建物であった可能性がある。建物方位は桁を東西方向としている。柱間は約2.2mである。

#### S A - 1 (第17図)

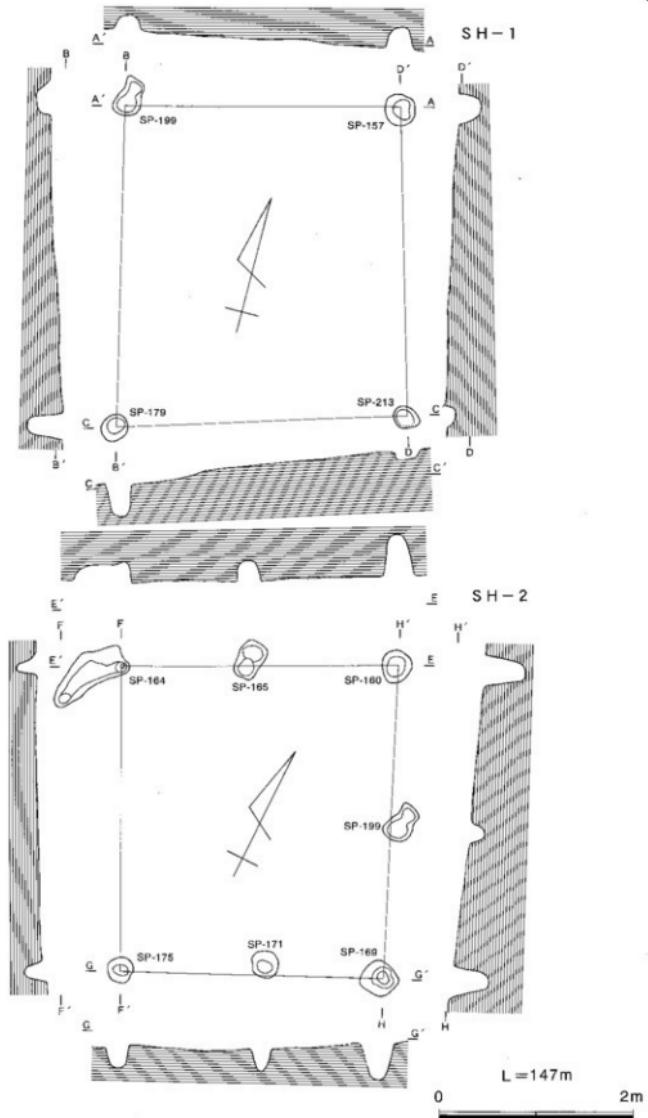
S A - 1はS H - 4の東側に位置する。小穴がN-14°-Eの方位で並び、柱間は2.5mを測る。

#### S H - 4 (第17図)

2-2区のA-16グリッドで検出された。西側は2-3区に延び、石垣と耕作による削平を受けていることから、全貌は不明である。したがって、ここでの推定とは異なるいくつかの建物プランの推定が可能であろう。桁行4m以上、梁行4.7mを測る掘立柱建物である。建物方位は桁を東西方向としている。柱間は約1.8mである。また、S A - 1と桁行が平行に並ぶことから、ほぼ同時期に存在したと考えられる。



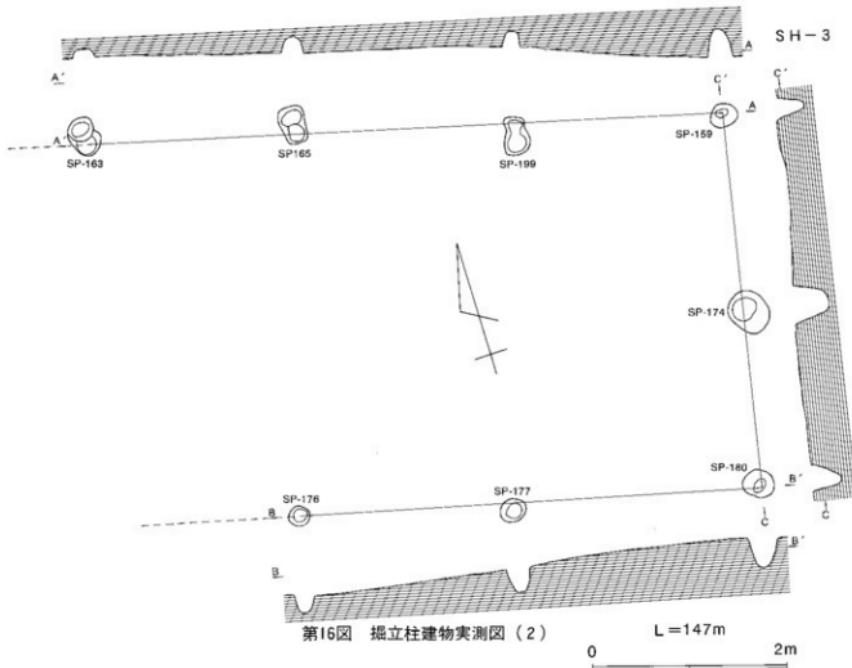
第14図 2区小穴群検出部分全体図



第15図 挖立柱建物実測図（Ⅰ）

第6表 小穴計測表(1)

遺構番号	出土区	グリッド	法量(cm)			覆土(土色)	平面形	備考
			N-S	E-W	深さ			
S H - 1	SP-157	2-2区	B-17(S)	32	30	24	黒褐色粘質土	丸
	SP-213	2-2区	B-16(N)	22	29	10	黒褐色粘質土	丸
	SP-179	2-2区	B-16(N)	28	27	37	黒褐色粘質土	丸
	SP-199	2-2区	A-17(S)	41	28	17	黒褐色粘質土	ダルマ型 元は2つの小穴
S H - 2	SP-160	2-2区	A-17(S)	33	31	33	黒褐色粘質土	丸
	SP-169	2-2区	B-16(N)	33	33	33	黒褐色粘質土	丸
	SP-175	2-2区	A-16(N)	27	26	19	黒褐色粘質土	丸
	SP-164	2-2区	A-17(S)	長径37 短軸33		24	黒褐色粘質土	不整形



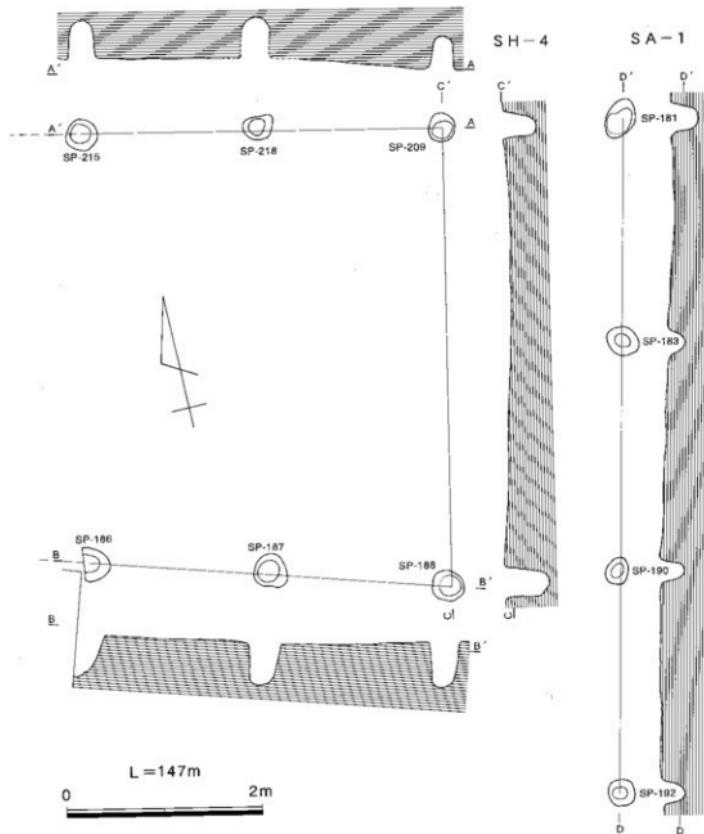
第16図 掘立柱建物実測図(2)

L = 147m  
0 2m

第7表 小穴計測表(2)

遺構番号	出土区	グリッド	法量(cm)			覆土(土色)	平面形	備考
			N-S	E-W	深さ			
S H - 3	SP-159	2-2区	B-16(N)	24	29	31	黒褐色粘質土	丸
	SP-174	2-2区	B-16(N)	46	41	41	黒褐色粘質土	丸 下部に暗褐色土
	SP-180	2-2区	B-17(S)	27	26	19	黒褐色粘質土	丸
	SP-177	2-2区	A-16(N)	24	27	27	黒褐色粘質土	丸
	SP-176	2-2区	A-16(N)	21	22	20	黒褐色粘質土	丸
	SP-163	2-2区	A-17(S)	(30)	30	25	黒褐色粘質土	楕円カ SP-220を切る
	SP-165	2-2区	A-17(S)	37	27	16	黒褐色粘質土	楕円
	SP-199	2-2区	A-17(S)	41	28	17	黒褐色粘質土	ダルマ型 元は2つの小穴

( ) 内は残存値

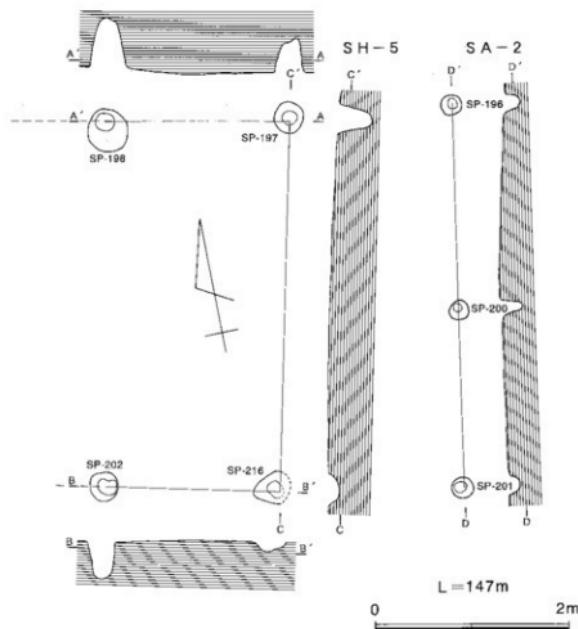


第17図 挖立柱建物・柵列実測図(1)

第8表 小穴計測表(3)

遺構番号	出土区	グリッド	法量(cm)			覆土(土色)	平面形	備考
			N-S	E-W	深さ			
S A - 1	SP-181	2-2区 A-16(S)	長軸 43	短軸 30	30	黒褐色粘質土	楕円	
	SP-183	2-2区 B-16(S)	30	31	19	黒褐色粘質土	丸	
	SP-190	2-2区 A-16(S)	27	24	25	黒褐色粘質土	丸	
	SP-192	2-2区 A-15(N)	27	26	25	黒褐色粘質土	丸	
S H - 4	SP-209	2-2区 A-16(N)	30	28	35	黒色粘質土	丸	
	SP-188	2-2区 A-16(S)	32	33	47	黒褐色粘質土	丸	
	SP-187	2-2区 A-16(S)	36	34	46	黒褐色粘質土	丸	
	SP-186	2-2区 A-16(S)	36	(27)	41	黒褐色粘質土	楕円カ	半分のみ
	SP-215	2-2区 A-16(N)	32	33	39	黒褐色粘質土	丸	
	SP-218	2-2区 A-16(N)	24	31	14	黒褐色粘質土	楕円カ	

( ) 内は残存値



第18図 樹立柱建物・柵列実測図（2）

第9表 小穴計測表（4）

遺構番号	出土区	グリッド	法量(cm)			覆土(土色)	平面形	備考
			N	S	E-W			
S A - 2	SP-196	2-2区 A-15(N)	20	22	16	黒褐色粘質土	丸	
	SP-200	2-2区 A-15(S)	20	20	22	黒褐色粘質土	丸	
	SP-201	2-2区 A-15(N)	21	22	13	黒褐色粘質土	丸	
S H - 5	SP-197	2-2区 A-15(N)	32	31	35	黒褐色粘質土	丸	
	SP-216	2-2区 A-15(S)	33	(40)	(12)	黒褐色粘質土	楕円カ	東半分割平
	SP-202	2-2区 A-15(S)	29	28	38	黒褐色粘質土	丸	
	SP-198	2-2区 A-15(N)	44	42	52	黒褐色粘質土	丸	

( ) 内は残存値

#### S A - 2 (第18図)

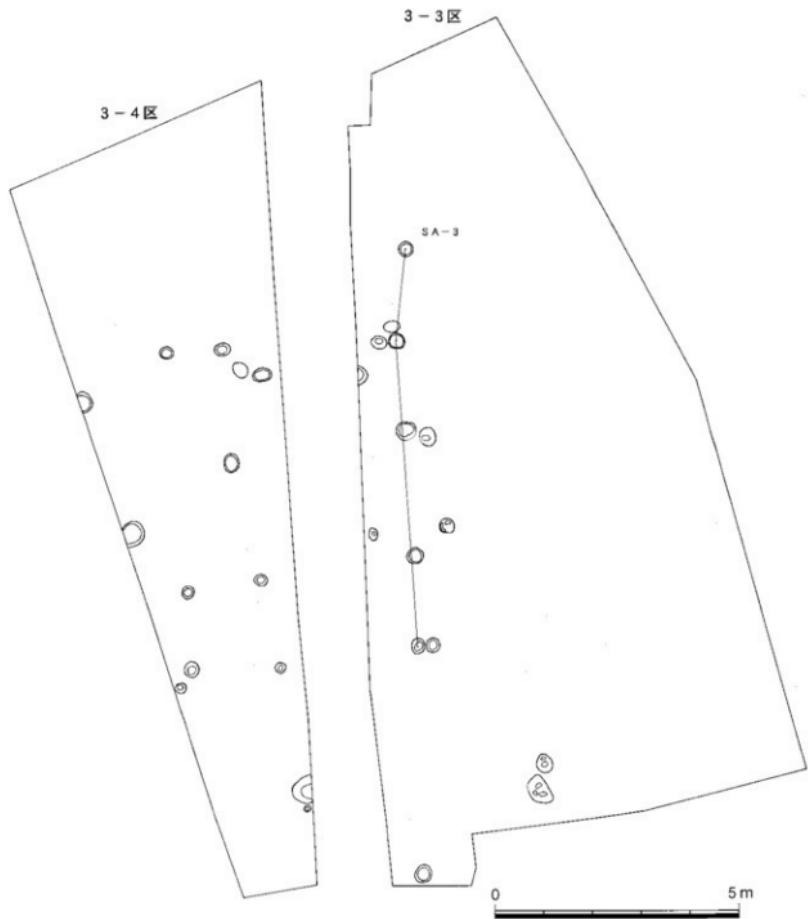
S A - 2 は A - 15 グリッド付近で検出され、S H - 5 の東に位置する。小穴は N - 10° - W の方位で並び、柱間は 2.1m ~ 1.9m を測る。

#### S H - 5 (第18図)

S H - 5 は 2 - 2 区の A - 15 グリッド付近で検出された。西側は 2 - 3 区に延び、石垣と耕作による削平を受けているため、全貌は不明である。桁行 2 m 以上、梁行 4 m で建物規模については様々な想定が可能である。建物方位は桁が東西方向であろう。柱間は約 1.8m である。東側にある S A - 2 とほぼ平行でプランも似ているため、同時期のものと考えられる。

S A - 3 (第20図)

S A - 3 は 3 - 3 区西端部分に位置する。3 - 4 区から検出された小穴と関連づけて建物の想定も可能であるが、プランが整わないことから 3 - 4 区の小穴列を棚列とした。小穴は N-9°-W の方位で並び、柱間は 1.8m ~ 2.6m を測る。北端の S P - 125 はや東にずれ、N-5.5°-E の方位に棚列が曲がることになるが、山裾に沿っての屈曲と考えた。



第19図 3区小穴群検出部分全体図

第10表 小穴計測表(5)

遺構番号	出土区	グリッド	法量(cm)			覆土(土色)	平面形	備考
			N	S	E-W			
SA-3	SP-125	3-3区	B-13(S)	29	30	28	黒褐色土	丸
	SP-123	3-3区	B-12(N)	31	34	6	不明	丸
	SP-120	3-3区	B-12(N)	38	41	28	黒褐色土	丸
	SP-117	3-3区	B-12(N)	32	34	14	黒色土	丸
	SP-116	3-3区	B-12(S)	30	27	21	黒褐色土	丸

## 3 溝状遺構

性格不明の溝状遺構が3区～5区の下段で検出された。以下、個々の形状について述べる。

## SD-111(写真図版11)

3-4区の北端で検出され、調査区外に延びる。最大幅は0.9m、深さは0.15m～0.3mを測る。底面から立ち上がる部分で人頭大の礫が多数出土した。おそらく廃棄されたものであろう。遺物は出土していない。

## SX-47(写真図版15)

4-4区北端より検出された。遺構が調査区外に延びるため長辺は不明であるが、最大幅は0.79m、深さは0.2m～0.16mを測る。炭化物、焼土が少量検出された。

## SX-1(写真図版17)

5-2区東端より検出された。石垣による削平で、長辺は不明であるが、短辺0.51m、深さは0.21mを測る。覆土は炭化物、焼土を少量含む。

## SX-2(写真図版17)

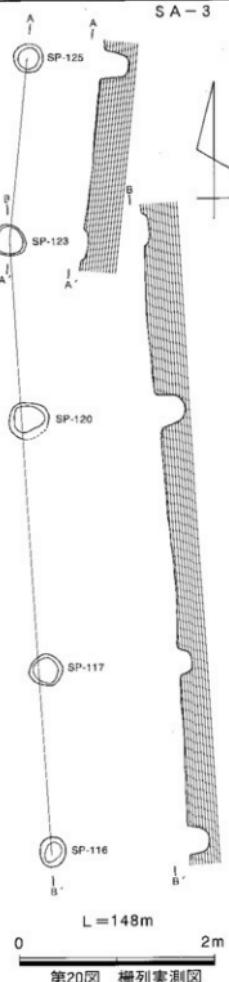
5-2区東端にSX-1と並ぶような形で検出された。石垣による削平で、長辺は不明であるが、短辺0.34m、深さは0.08mを測る。覆土は炭化物、焼土を少量含む。

## 4 焼土混小穴(写真図版3)

1-2区のC-20グリッド杭の南側で、黒色土を除去した段階で検出された楕円形の小穴である。長径は0.51m、短径は0.32m、深さは0.42mである。

## 5 その他の遺構

1区では黒色土を除去した段階で不整形の落ち込みが多数見られたが、おそらく根痕であると考えられる。3区、4区、5区の石垣上段は山崩れによる自然堆積で、遺構は検出されなかった。石垣下段部分は小穴、前述の溝状遺構がわずかながら検出された。出土遺物はほとんどなく、年代を特定するには至らなかった。



第20図 横列実測図

第II表 小穴計測表 (6)

No. I

遺構番号	出土区	グリッド	法量 (cm)			覆土(土色)	平面形	備考
			N-S	E-W	深さ			
SP-219	2-2区	A-17(S)	32	32	28	黒褐色粘質土	丸	
SP-161	2-2区	A-17(S)	28	38	17	黒褐色粘質土	橢円	
SP-162	2-2区	A-17(S)	42	29	19	黒褐色粘質土	橢円	
SP-220	2-2区	A-17(S)	23	27	21	黒褐色粘質土	丸	
SP-141	2-2区	A-17(S)	41	(20)	16	黒褐色粘質土	橢円カ	東側にかかる
SP-156	2-2区	B-17(S)	28	27	36	黒褐色粘質土	丸	
SP-157	2-2区	B-17(S)	32	30	24	黒褐色粘質土	丸	
SP-158	2-2区	B-17(S)	34	30	34	黒褐色粘質土	丸	
SP-167	2-2区	A-16(N)	36	31	48	黒褐色粘質土	隅丸方形	
SP-171	2-2区	A-16(N)	28	29	30	黒褐色粘質土	丸	
SP-173	2-2区	A-16(N)	40	36	26	不明	丸	
SP-214	2-2区	A-16(N)	28	26	31	不明	丸	
SP-212	2-2区	B-16(N)	20	21	13	黒褐色粘質土	丸	
SP-170	2-2区	B-16(N)	28	31	32	黒褐色粘質土	丸	
SP-182	2-2区	B-16(S)	27	25	15	黒褐色粘質土	丸	
SP-194	2-2区	A-15(N)	44	41	36	不明	丸	木の根力
SP-189	2-2区	A-15(N)	34	34	22	黒褐色粘質土	丸	
SP-193	2-2区	A-15(N)	55	52	15	黒褐色粘質土	丸	
SP-195	2-2区	A-15(N)	17	18	22	不明	丸	
SP-191	2-2区	B-15(N)	43	33	14	黒褐色粘質土	橢円	
SP-203	2-2区	A-15(S)	31	28	24	黒褐色粘質土	丸	
SP-204	2-2区	A-14(N)	24	(10)	32	黒色粘質土	丸カ	下部灰褐色粘質土
SP-205	2-2区	A-14(N)	18	21	13	黒褐色粘質土	丸	
SP-211	2-2区	A-14(N)	23	(13)	10	黒褐色粘質土	丸カ	西側が切れている
SP-206	2-2区	A-14(N)	23	31	12	黒褐色粘質土	橢円	
SP-207	2-2区	A-14(S)	23	23	14	黒褐色粘質土	丸	
SP-208	2-2区	A-14(S)	22	21	14	黒褐色粘質土	丸	
SP-217	2-2区	A-14(S)	24	20	7	不明	丸	
SP-141	2-3区	A-17(S)	41	(20)	16	不明	不整形	東側により半歳
SP-142	2-3区	A-17(S)	37	38	16	黒褐色土	不整形	
SP-143	2-3区	A-17(S)	44	44	7	黑色粘質土	不整形	
SP-144	2-3区	A-17(S)	19	27	15	黑色粘質土	橢円	
SP-145	2-3区	A-17(S)	36	29	18	黒褐色粘質土	橢円	
SP-146	2-3区	A-17(S)	24	23	18	黑色粘質土	丸	
SP-147	2-3区	A-16(N)	25	25	29	黒褐色粘質土	隅丸方形	
SP-148	2-3区	A-16(N)	20	21	18	暗褐色粘質土	丸	
SP-149	2-3区	A-16(N)	21	16	12	暗褐色粘質土	橢円カ	
SP-151	2-3区	A-16(S)	20	19	20	黒褐色粘質土	丸	
SP-153	2-3区	A-16(S)	20	(18)	12	黒褐色粘質土	丸	
SP-154	2-3区	A-15(N)	37	31	21	黒褐色粘質土	丸	
SP-155	2-3区	A-15(N)	19	(15)	18	黒褐色粘質土	丸カ	西側が切れている
SP-122	3-3区	B-13(S)	23	34	5	黒褐色土	橢円	
SP-124	3-3区	B-12(N)	26	32	3	黒褐色土	丸	
SP-121	3-3区	B-12(N)	39	(20)	9	黒褐色土	丸カ	西側が切れている
SP-119	3-3区	B-12(N)	36	32	10	暗褐色土	丸	
SP-118	3-3区	B-12(N)	28	30	17	黒褐色土	丸	
SP-128	3-3区	B-12(N)	24	18	16	黒褐色土	橢円	
SP-115	3-3区	B-12(S)	27	27	30	黒褐色土	丸	
SP-114	3-3区	B-12(S)	38	33	15	黑色土	丸	
SP-113	3-3区	B-12(S)	長軸68	短軸40	11	黑色土	不整形	
SP-112	3-3区	B-11(N)	34	35	25	不明	丸	

( )内は残存値

遺構番号	出土区	グリッド	法量(cm)			覆土(土色)	平面形	備考
			N-S	E-W	深さ			
SP-110	3-4区	A-12(N)	26	30	14	暗褐色土	丸	
SP-109	3-4区	A-12(N)	26	33	12	黒褐色土	丸	
SP-107	3-4区	A-12(N)	長軸37	短軸28	33	暗褐色土	楕円	
SP-108	3-4区	A-12(N)	46	(26)	29	黒褐色土	丸カ	西側が切れている
SP-106	3-4区	A-12(N)	38	31	24	黒褐色土	丸	
SP-105	3-4区	A-12(N)	52	(44)	13	褐色土	丸カ	西側が切れている
SP-102	3-4区	A-12(S)	26	25	18	黒色土	丸	
SP-101	3-4区	A-12(S)	33	30	31	黒褐色土	丸	
SP-99	3-4区	A-12(S)	22	22	15	黒褐色土	丸	
SP-104	3-4区	B-12(S)	23	25	12	黒褐色土	丸	
SP-100	3-4区	B-12(S)	22	24	40	黒褐色土	丸	
SP-97	3-4区	B-12(S)	59	(42)	26	黒色土	丸カ	東側が切れている
SP-96	3-4区	B-12(S)	13	14	22	暗褐色土	丸	
SP-90	3-2区	B-11(N)	43	37	12	黒褐色土	丸	
SP-92	3-2区	B-11(N)	49	48	33	黒褐色土	丸	覆土に褐色土混
SP-83	3-2区	B-11(S)	52	36	34	黒褐色土	楕円	
SP-84	3-2区	B-11(S)	22	26	31	黒色土	丸	
SP-86	3-2区	B-11(S)	46	66	32	黒色土	楕円	
SP-87	3-2区	B-11(S)	19	20	22	不明	隅丸方形	
SP-80	3-2区	B-11(S)	15	12	17	黒褐色土	丸	
SP-79	3-2区	B-11(S)	30	31	27	黒褐色土	丸	
SP-82	3-2区	B-11(S)	38	37	41	黒褐色土	隅丸方形	
SP-78	3-2区	B-10(N)	29	31	37	黒褐色土	丸	
SP-77	3-2区	B-10(N)	54	62	25	黒褐色土	丸	酸化鉄の集積あり
SP-67	3-2区	B-10(S)	51	47	15	明赤褐色土	丸	
SP-70	3-2区	C-9(N)	30	38	9	にぶい黄褐色土	楕円	
SP-66	3-2区	C-9(N)	56	58	21	褐色土	丸	
SP-65	3-2区	C-9(S)	60	62	20	褐色土	丸	
SP-71	3-2区	B-9(N)	28	24	18	暗褐色土	丸	
SP-72	3-2区	B-9(N)	29	30	14	黒色土	丸	
SP-75	3-2区	B-9(S)	32	32	24	黒色土	丸	
SP-43	4-4区	B-7(N)	長軸36 20	短軸(20) (10)	25 29	暗褐色土	楕円	2つの小穴
SP-44	4-4区	B-7(N)	長軸32	短軸12	23	不明	楕円	
SP-46	4-4区	B-7(N)	長軸32	短軸24	23	不明	楕円	
SP-45	4-4区	C-7(N)	33	37	46	暗褐色土	丸	下部は黄褐色土
SP-48	4-4区	B-7(S)	17	21	14	暗褐色土	楕円	
SP-49	4-4区	B-7(S)	31	30	15	不明	丸	
SP-61	4-4区	C-7(S)	17	15	8	不明	丸	
SP-50	4-4区	B-6(N)	53	38	9	にぶい黄褐色土	楕円	
SP-60	4-4区	B-6(N)	50	(34)	24	黒褐色土	不整形	西壁で切れている
SP-58	4-4区	C-6(S)	44	31	15	にぶい黄褐色土	不整形	
SP-53	4-4区	B-6(S)	長軸62	短軸24	34		楕円	
SP-52	4-4区	B-6(S)	短軸32	長軸62	17		不整形	
SP-56	4-4区	B-6(S)	30	30	10	にぶい黄褐色土	隅丸方形	
SP-57	4-4区	B-6(S)	42	45	13	褐色土	丸	
SP-59	4-4区	B-6(S)	31	36	12	にぶい黄褐色土	丸	
SP-131	4-3区	C-6(N)	36	33	21	黒褐色土	丸	
SP-130	4-3区	C-5(N)	19	20	14	黒褐色土	丸	
SP-129	4-3区	C-5(N)	短軸19	長軸29	16	黒褐色土	楕円	

( )内は残存値

遺構番号	出土区	グリッド	法量(cm)			覆土(土色)	平面形	備考
			N-S	E-W	深さ			
SP-19	4-2区	C-4(N)	30	34	8	暗青灰色土	丸	近現代カ
SP-37	4-2区	B-5(S)	20	28	9	不明	橢円	
SP-38	4-2区	B-4(N)	12	24	9	不明	橢円	
SP-17	4-2区	B-4(N)	長軸25	短軸17	67	不明	不整形	
SP-18	4-2区	B-4(N)	26	40	43	黒色土	不整形	
SP-20	4-2区	B-4(S)	36	29	12	暗褐色土	橢円	
SP-21	4-2区	B-4(S)	13	16	10	暗褐色土	丸	
SP-22	4-2区	B-4(S)	21	19	21	黒褐色土	丸	
SP-34	4-2区	B-4(S)	21	31	14	暗褐色土	橢円	
SP-36	4-2区	C-4(S)	21	31	5	褐色土	不整形	
SP-26	4-2区	B-4(S)	長軸30	短軸21	23	オリーブ褐色土	橢円	
SP-31	4-2区	B-4(S)	22	21	16	黒褐色土	丸	
SP-29	4-2区	C-3(N)	17	14	11	暗褐色土	橢円	
SP-8	5-2区	C-2(S)	17	20	15前後	褐色土	丸	
SP-7	5-2区	C-2(S)	16	16	15前後	褐色土	丸	
SP-6	5-2区	C-2(S)	22	23	15前後	褐色土	丸	
SP-5	5-2区	C-2(S)	16	15	15前後	褐色土	丸	
SP-4	5-2区	C-2(S)	21	21	15前後	褐色土	丸	
SP-9	5-2区	C-2(S)	25	36	15前後	褐色土	橢円	
SP-13	5-2区	B-2(S)	21	21	15前後	褐色土	丸	
SP-12	5-2区	B-2(S)	36	36	15前後	褐色土	丸	
SP-11	5-2区	B-1(N)	23	24	15前後	褐色土	丸	
SP-10	5-2区	B-1(N)	21	23	15前後	褐色土	丸	
SP-3	5-2区	B-1(N)	28	30	15前後	褐色土	丸	

## 第2節 遺物

### 1 土器(図版23)

本遺跡から出土した遺物はほとんどが表土および擾乱層中から出土し、遺構に伴った遺物は2-2区のS F-184から土師質の皿の細片が出土したのみであり、それ以外の遺構からは遺物が出土していない。出土遺物は中世から現代にかけての陶器を中心として取上げ点数で63点を数える。ここではその中でも年代などがわかるもの35点を取り上げる。

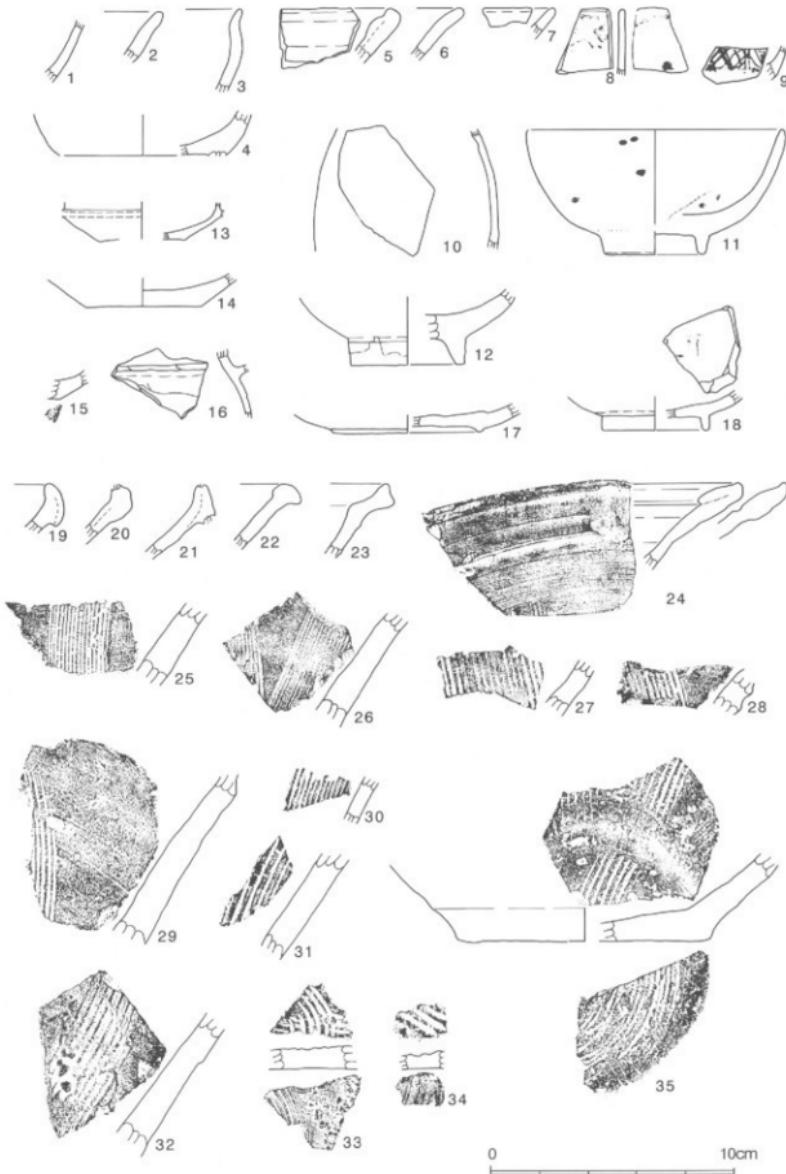
1は中国龍泉窯系の青磁で、14世紀代のものと考えられる。

2と3は瀬戸・美濃産の天目茶碗である。2は口縁部が緩やかに外反し、鉄釉が掛けられている。3は体部上方がやや内傾し、端部は外反する。鉄釉が掛けられており、16世紀後半のものと考えられる。

4~7は瀬戸・美濃産の陶器である。4は外面のみ鉄釉が掛けられており、19世紀後半のものと思われる。5は口縁部内面に凹線が見られる。6は体部上方に削り出しによる凸線が見られ、凸線から内面にかけて施釉されている。7は長石釉が掛けられており、16世紀後半から17世紀前半頃のものと思われる。

8と9は肥前系の産と考えられる。8は染付の筒形碗で、外面に菊花文、内面には四方博文が描かれている。18世紀後半から19世紀前半頃のものと考えられる。9は型成形の染付小鉢で、18世紀後半頃のものと思われる。

10と11は平戸・波佐見系の産と考えられる。10は染付の徳利で、胴部に一重網目文が施される。18世紀後半から18世紀初頭頃のものと思われる。11は染付の小碗で、体部下方は丸みを帯び、上方はやや開



第21図 中近世土器実測図

き気味である。いわゆる「くらわんか茶碗」であり、外面に梅樹文が描かれる。17世紀末から18世紀前半頃のものと考えられる。

12は磁器の小碗である。底部は鋭い削り出し高台である。胎土は白色を呈し、非常に硬質である。17世紀前半頃のものと思われ、初期伊万里と考えられる。

13と14は瀬戸・美濃産の灯明皿である。底部内面に灰釉が施され、底部外面は糸切り痕が見られる。19世紀前半頃のものと考えられる。

15は土師質の皿の細片である。SF-184の黒色土中より出土した。ロクロ成形で、わずかに残存する底部外面には糸切り痕が見られる。

16は羽釜の鉢部分で、粘土紐を貼りつけてナデ調整をしている。

17は灰釉陶器の小碗である。底部外面は糸切り痕が見られ、貼り付け高台である。内外面にナデ調整が見られる。胎土は白色砂粒を多く含む。13世紀頃のものと考えられる。

第12表 中近世の土器一覧表

番号	遺物番号	出土区・グリッド	層位	器種	法量(cm)	色調	胎土
1	P-6-2	5-2区	表土	碗または皿		灰オリーブ	緻密、灰色
2	P-57	3-3区C-12(N)	表土	天目茶碗(口縁)		暗褐	密、白色
3	P-42	3-2区B-10(N)	黒色土	天目茶碗(口縁)		黒褐	密、灰色
4	P-1-3	5-1区	表土	不明(底部)	底径 6.8	暗赤褐	密、灰褐色
5	P-45	3-2区B-10(S)	黒色土直上	鉢(口縁)		灰白	粗、白色、気泡多い
6	P-7-2	5-2区	暗灰色土層	小皿(口縁)		浅黄	粗、白色、気泡含む
7	P-51	3区	表土	小皿(口縁)		にぶい黄橙	密、白色
8	P-19-2	1-2区	表土	筒形碗(口縁)		明緑灰	緻密、白色
9	P-52-2	3区	表土直下	小鉢		灰白	緻密、白色
10	P-60-3	3-4区	表土直下	徳利		外面部明緑灰 内面部にぶい橙	緻密、白色
11	P-3-2 P-1-2	5-1区	表土直下	小碗(底部)	口径10.5 高さ5.15 底径 4	明緑灰	緻密、白色
12	P-61	4-1区C-5(S)	石垣裏込土	小碗(底部)	底径 4.6	明越灰	密、白色
13	P-59	3-1区No.3トレンチ	表土	灯明皿(底部)	底径 3.6	灰白	緻密、灰色
14	P-64	1-3区D-22~E-22 (S)	表土	小皿(底部)	底径 4.8	明オリーブ灰	密、白色
15	P-157	2-2区A-16(S) 157	黒褐色土	かわらけ(底部)	底径 6.2	にぶい褐	密、砂を少量含む
16	P-55	3-2区	黒褐色土層	羽釜		浅黄橙	密、土師質
17	P-50	9-2区C-11(N)	黒褐色土層	小皿(底部)	底径 6.2	灰白	粗
18	P-60-2	3-4区B-12	表土直下	小皿(底部)	底径 4.3	淡黄	緻密、白色
19	P-34	4-2区	表土直下	摺鉢(口縁)		暗赤褐	粗、にぶい橙、小石含む
20	P-2-2	5-1区	表土	摺鉢(口縁)		にぶい赤褐	粗、白色、小石含む
21	P-31	4-1区	表土直下	摺鉢(口縁)		黒褐	粗、白色、小石含む
22	P-231	2-1区B-17(N)	表土	摺鉢(口縁)		灰褐	密、白色
23	P-38	3-2区B-11(N)	黒色土直上	摺鉢(口縁)		外面部にぶい橙 内面部灰褐	粗、白色、小石含む
24	P-33	4-1区C-4(N)	極暗褐色土層	摺鉢(口縁)		極暗赤褐	密、灰色、気泡含む
25	P-3-3	5-1区	表土直下	摺鉢		褐	密、赤褐色、小石含む
26	P-5	5-1区	表土	摺鉢		灰黄褐	密、赤褐色、小石含む
27	P-119	2-3区A-17(S)	褐色土	摺鉢		黒褐色	密、白色
28	P-3-4	5-1区	表土直下	摺鉢		灰黄褐	密、白色
29	P-29-2	4-1区	表土直下	摺鉢		黒褐	粗、白色、長石粒含む
30	不明	1-2区C-19(N)	カワゴ平バミ ス直上	摺鉢		暗赤褐	密、白色、小氣泡含む
31	P-4	5-1区	灰色土層	摺鉢		黒褐	密、灰褐色、気泡含む
32	P-29-3	4-1区	表土直下	摺鉢		黒褐	粗、白色、小石を含む
33	P-46	3-2区B-10(S)	黒色土層	摺鉢(底部)		黒褐	密、灰白色、小石を含む
34	P-20	1-2区C-20(S)	表土直下	摺鉢(底部)		外面部にぶい褐 内面部極暗赤褐	密、白色
35	P-30	4-1区C-3(N)	表土	摺鉢(底部)	底径10.4	灰黄褐	粗、白色、小石を含む

18は京焼系陶器の小碗である。高台は断面方形に削り出している。見込み部分に鈎絵で山水文が描かれる。釉は黄白色を呈する。19世紀前半頃のものと考えられる。

19～22は瀬戸・美濃産の摺鉢である。19は口縁部上方がやや内傾し、口縁部下方は垂下し、縁帯を形成する。釉は錆釉が掛けられている。16世紀末頃のものと思われる。20は口縁部を丸く仕上げ、立ち上がりは短い。釉は錆釉が掛けられている。16世紀中頃のものと思われる。21は口縁部上方を尖り気味に立ち上げ、口縁部下方は垂れ縁帯を形成する。釉は錆釉が掛けられている。16世紀末から17世紀前半頃のものと思われる。22は体部上方がやや外反し、端部の立ち上がりが短い。18世紀後半頃のものと思われる。

24は志戸呂産の摺鉢である。体部上端が内側に折り返され、玉縁状になる。折り返された端部は体部と密着し、扁平になっている。また片口状に指ナデによる指頭圧痕がつき、錆釉が施される。胎土は暗灰色を呈する。

25と26は堺系の摺鉢である。釉は錆釉が施され、胎土は赤褐色を呈する。細かいハケメ状のスリ目が施されている。

27～35は瀬戸・美濃産の摺鉢で、釉は錆釉が掛けられている。32は破片断面に擦痕が見られ、二次的利用が認められる。16世紀末頃のものと考えられる。33と34は底部外面に糸切り痕が見られ、全面に施釉されている。35は底部外面に糸切り痕が見られ、全面に施釉されている。6本1単位のスリ目が施され、摩滅している。16世紀末頃のものと思われる。

## 2 錢貨（図版23）

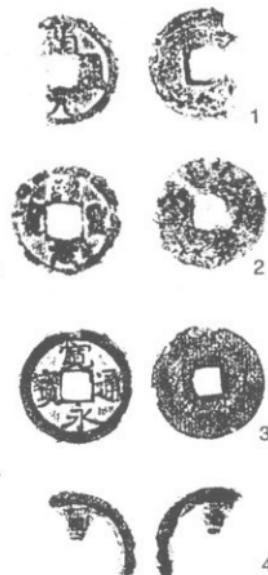
大見城跡より出土した錢貨は4枚である。このうち1枚が土坑の覆土より出土した他は、すべて包含層からの出土である。

1は3分の2が残存しており、「開元通」の3文字が読めるところから、開元通寶（唐、初鋤621年）と推定される。3-2区の北端の黒褐色土より、文字面を下に向けて出土した。土中の水分が多く、劣化し脆弱となっていた。背面に向かって折損している。背面は錆のため、月文や星文などは観察できない。別の個体が融着していた可能性がある。

2は完形で文字は摩滅しているが、X線撮影により紹聖元寶（北宋、初鋤1094年）と篆書体で記されていることがわかった。紹と聖、元と寶の間で断面くの字状に折れ曲がっている。背面は摩滅しているため、月文や星文などは観察できない。4-1区北西端の石垣の裏込め土中より出土した。

3は3-4区のS F-95の覆土上部より出土した完形の寛永通寶である。文字が太く、寶字が「ス貝寶」であることから1期の寛永通寶（古寛永、1636～1659年鋤造）と考えられる。S F-95の覆土上面の南東隅より、文字面を上にした状態で出土した。S F-95の覆土は3層に分層されており、寛永通寶は覆土上部の褐色土上面より出土している。

4は出土した時点で3分の1が残存していたが、劣化が著しく、現在はかろうじて「寛」の文字が読める程度の残存状況である。裏に「文」の文字があり、2期寛永通寶（新寛永、文錢、



第22図 錢貨拓影

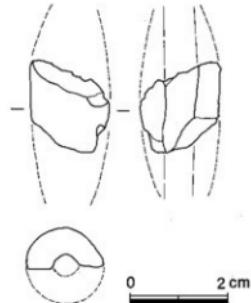
1668～1683年鉄造)と考えられる。3-2区の西端より出土した。遺構内の出土ではないが、付近より小穴が検出されている。

### 3 その他の遺物

土器と鐵貨以外の遺物としては、土錘と考えられる破片と漆椀と思われる漆の残欠が出土している。いずれも包含層の出土で、遺構内の出土ではない。

土錘と考えられる破片(第23図)は3-2区北端の黒色土層中より出土した。上下端とも欠損し、胸部が半分に割れた状態となっている。内側中心部に幅6mmの上下に抜ける穿孔痕跡が残ることから、紡錘形の小型土錘と推定した。土師質で焼成は良好、色調は橙色で、上部はやや赤みがかかり、下部に黒斑が見られる。胎土は密で、長石、石英を含む。復元径は約1.6cmである。

漆の残欠は3-2区西端部分の黒色土を掘り下げ、カワゴ平バミス集積層直上を精査している際に出土した。わずかではあるが、内面が丸く窪んでいたため漆椀と推定した。木質部は周囲が酸性土であることから腐食し、一部に著しく劣化した状態でわずかに残存する。漆は黒色で中央部に朱色が見られ、黒地に朱の文様を描く椀であった可能性がある。



第23図 土錘実測図

### 参考文献

- 藤沢良佑 「本業焼の研究(1)」『研究紀要VI』瀬戸市歴史民俗資料館 1987  
藤沢良佑 「本業焼の研究(2)」『研究紀要VII』瀬戸市歴史民俗資料館 1988  
藤沢良佑 「本業焼の研究(3)」『研究紀要VIII』瀬戸市歴史民俗資料館 1989  
兵庫埋蔵鉄調查会 『日本出土鉄總覽1996年版』 1996

## 第III章 繩文時代の遺構・遺物

### 第1節 遺構

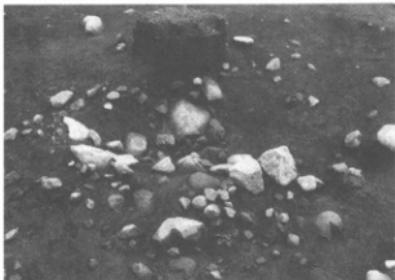
今回の発掘調査において、縄文時代の明確な遺構は認められなかった。各区において縄文時代と考えられる遺物は出土しているが、いずれも遺物の出土した付近に遺構と考えられるものは認められなかつた。以下、各区の状況を概観する。

1区は比較的土層の残存状況が良好であったが、カワゴ平バミス集積層の下は軽石を含む褐色土で、これを掘り下げたところ、大型礫が多量に検出された（図版18参照）。この褐色土中より縄文土器や黒耀石の剥片がわずかに出土している。いずれもほぼ破片が単独で検出され、分布はやや西に偏るが、多量にまとまって出土していない。礫はこぶし大から人頭大のものが多く、山からの転石と推定される。1-1区南部に、軽石を含んだ褐色土が落ち込んだ部分（右上段写真参照）が見られたが、周辺には遺物が検出されず、自然の堆みと考えられる。また、1-2区では西側に直径50cm程度の円形に礫が集まっている部分（右中段写真参照）が見られたが、遺物・土坑等は周辺に検出されなかつた。自然堆積の礫と考えられる。

2区は遺物が最も出土している調査区である。遺物は2-2区の西側に偏って分布している。カワゴ平バミスの集積層中より遺物が出土し始め、下層の褐色土から多く出土した。この褐色土は大型の礫を多量に含み（図版19参照）、遺構は検出されなかつた。東側には急傾斜で山が迫っていることから、褐色土は山からの流れ込みである可能性がある。

3区は試掘で配石遺構の存在する可能性が指摘された地区である。しかし、3区の北側は全面にわたって自然の礫が多く検出された（図版20参照）。配石遺構の可能性の指摘された箇所は、土砂崩れに伴う転石が縁辺部で弧状に広がるため、配石遺構に類似した形態となっていたことが確認された。遺物もほとんど検出されていない。

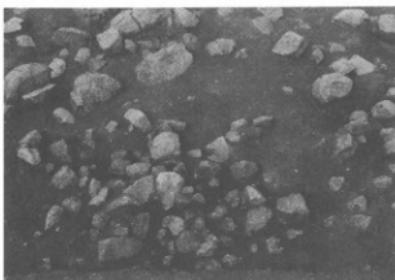
4区は中近世面と縄文面がほぼ同じ面である。礫が多く集まっている部分（右下段写真参照）が見られたが、土坑等も検出されず、自然に礫の密



I-1区 磯出土状況



I-2区 磯出土状況



I-2区 磯出土状況

度が高くなっている部分と考えられる。4区からは、遺物もほとんど検出されていない。

5区は土層の残存が悪い地区である。5-1区は山崩れと考えられる土層で、5-2区は表土直下に地山が現れる。検出された小穴も後世の耕作の際に礫を抜き取った跡と考えられ、縄文時代の遺構の可能性は低い。遺物は石鏃が2点出土している。

## 第2節 遺物

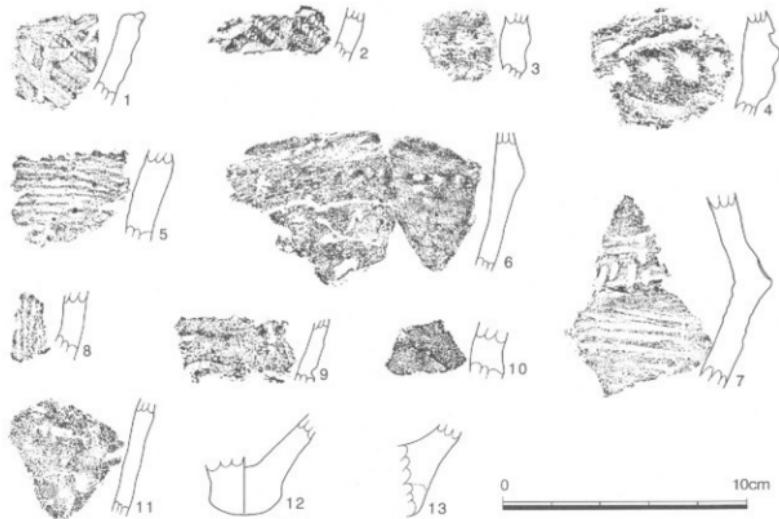
### 1 土器

縄文土器は270点余りの出土であったが、すべて破片であり、いくつかは接合したもの、器形を完全に復原できるものはなかった。その9割が2-2区からの出土で、A-15グリッドに集中している。このほか1-1区、1-2区、1-3区、2-1区より数点、4-2区より1点が出土している。

#### (1) 早期の土器

縄文時代早期と考えられる土器はわずかであるが出土している。9を除いてはすべて2-2区より出土している。3と6はやや出土位置が低いレベルであるが、他はほぼ前期の土器と変わらない位置で出土する。纖維を含むものが多い。すべて破片ではあるが、多くのものが茅山下層式と推定される。

1は口縁部と思われる破片である。上端に断面円形状の刻みの跡が1箇所見られる。外面は縄文の上に断面が弧状となる幅6mmの線を書く。内面は横方向のナデで調整している。外面は暗褐色で内面と色調がかなり異なる。2は1に文様がやや似るが、線の幅が4.7mmとやや細く、1が直線的な線であるのに対し、方向が不規則で蛇行した線となる。外面は暗褐色で内面よりもやや暗い色調である。3と4は幅広の隆帯に竪状のもので数回刺突して窪みを作り、隆帯の上部に幅広の沈線を入れる。茅山下層式と



第24図 縄文土器実測図（Ⅰ）

推定される。3は刺突部分を中心として外面の色調がやや暗く、隆帯下部には指頭圧痕と思われるわずかな窪みが見られる。4は隆帯上部に幅5.2mmの角棒を押しつけたと考えられる明瞭な沈線があり、下部は幅6.7mmの不明瞭な波状の沈線がある。5は内外面とも条痕文が施されている。外面は赤褐色で赤みが強い。6は幅約1.28cmの突帯を持ち、突帯上および突帯上部に細い棒で刺突して施文する。突帯上は一直線に刺突しているが、上部は右上がりに刺突している。褐色土の最下部より出土している。7は断面が「く」の字状となる。曲がっている部分がやや厚くなり、突帯を形成している。内外面とも横方向の条痕文があり、突帯上部は幅2.4mmの縦方向の短い沈線を入れている。外面はやや色調が暗い。

8は縦方向の条痕文が施文されている。内面も縦方向に幅広の沈線がある。9は劣化のため調整痕が不明な土器である。1-2区のカワゴ平バミス集積層上層から出土した。10は指頭圧痕と指ナデによる表面調整を行なっていると推定される。内面上部に横方向の条痕文があり、下部は横方向の指ナデと思われる。11は表面劣化のため調整痕は不明で、外面はやや赤みを帯びる。褐色土最下部より出土した。12と13は尖底土器の底部である。12は底に円形の粘土板を貼りつけ、乳房状に作る。13は欠損しているが、底部外面を平坦に作っていると考えられる。やや外面が赤みを帯びる。

## (2) 前期の土器

出土した繩文土器の大半は繩文時代前期の諸磯b式に属すると考えられる。大半の土器片に半截竹管文が見られること、入組木葉文の土器が見られることから、諸磯b式の中でも古段階にのものと推定される。出土した土器のほとんどが細片であり、接合したものがわずかであるため、口縁部や底部などを除く土器実測図の中には上下逆になる可能性のあるものが存在する。

14~18は一条の沈線による入組木葉文の土器である。14と15は口縁部であり、「フ」の字状に屈曲する。上面には幅約2.5mmの細い粘土紐を貼り付けた突帯がある。入組木葉文を描く側面は緩く内湾する。16も小片であるが、14・15と同様のものと考えられる。17は厚みが異なり、別固体と考えられる。断面が緩くS字状に屈曲しており、外側に膨らんだ部分が厚く、上部と下部は薄くなっている。上部は口縁に近い部分と考えられる。下部側面には入組木葉文を描く。18も入組木葉文が見られる破片であるが、地文にR Lの繩文を施文している。

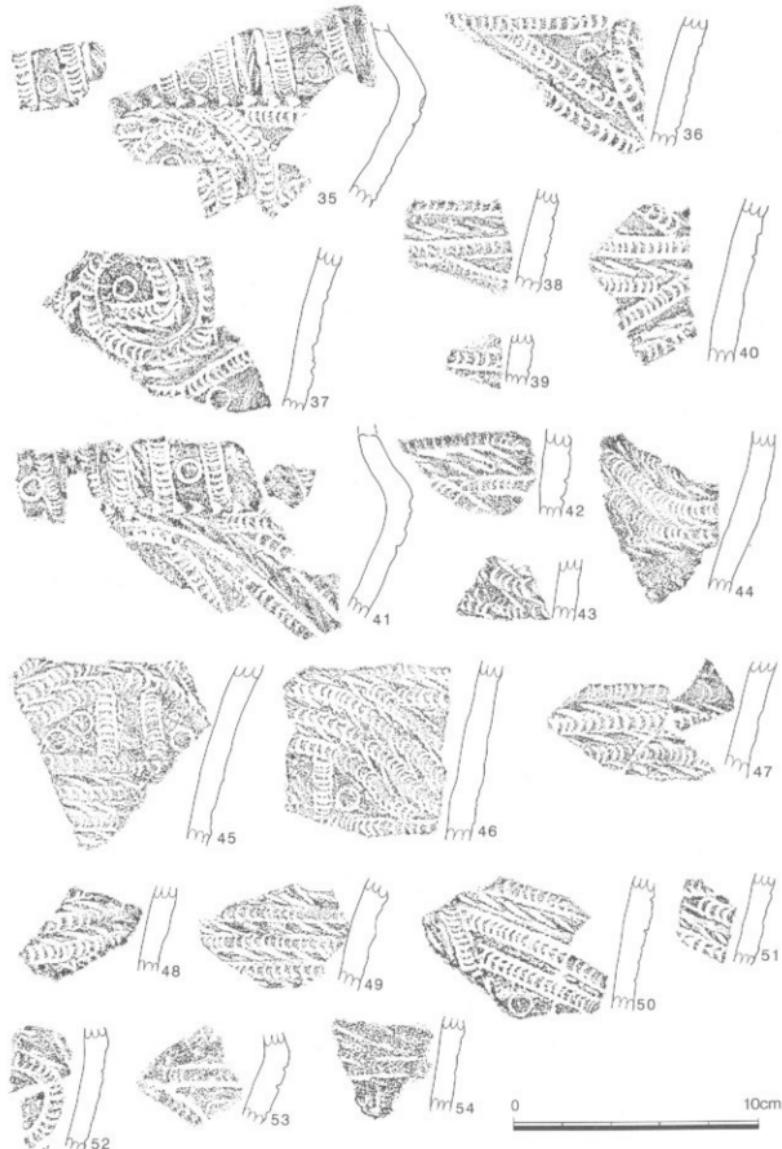
19は鉢形土器の底部と考えられる。底面は平坦で、円形であったとすると復元径は11.2cmとなる。上部は欠損しているため、形状は不明である。側面には条痕文が施文され、2条の平行線が施文の1単位と考えられる。

20・21は浅鉢の口縁部と考えられる。「く」の字状に屈曲し、上部が黒色、下部が橙色と色調が異なる。器面全面を磨き、屈曲部分は厚く突帯状となり、斜めの刻み目を入れる。この刻み目のなかに朱が付着していることから、下部には朱が塗られていた可能性がある。上部の色調の違いと合わせて考えると、朱と黒の2色に着色されていた土器の可能性がある。

22~84は半截竹管文を施した土器である。文様の密度、パターンの違い、施文方法の違いなどから、同じ半截竹管文の土器でも、多少の年代幅があると考えられる。22は口縁部である。口縁がやや外反する。口唇部は平坦で上面にも竹管文が施文され、外側には刻みを入れる。23~25も口縁部である。上部に指ナデによる沈線を1条入れる。下部は半截竹管を押し引きして橢円状の文様を描く。26~28は橢円状の文様の一部があり、同様の文様と考えられる。23~28は文様が竹管の押し引きと平行沈線による施文で、地文がなく、文様が大型で施文密度が低い。31は横方向の施文であるが、間にも弱く半截竹管による押し引き文が施文され、わずかに施文密度が高まっている。32はさらに文様の中に繩文が見られ、三角形の区画など、文様の複雑化が見られる。34と33は押し引き方法が2種類見られる。半截した竹管の内面を内側にして押し引くものと、外面を内側にして押し引くものが存在する。今回の調査で出土した半截竹管文の見られる土器は、内面を内側にして押し引くものが圧倒的である。35~84は非常に文様



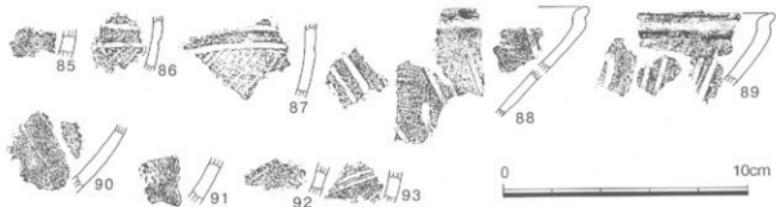
第25図 縄文土器実測図（2）



第26図 縄文土器実測図（3）



第27図 縄文土器実測図（4）



第28図 繩文土器実測図（5）

が発展し、施文密度も高くなっている。半截竹管文、沈線文、円形刺突文などが併用され、器面余すところなく施文を行なっている。文様パターンも渦巻き、三角形、波状平行線など多種にわたる。35と41は口縁部である。「く」の字状に屈曲し、上部には縱方向の半截竹管文、下部には渦巻きと波状の半截竹管文が施文され、空間には円形刺突文が施文される。また、半截竹管による押し引きによって隆帯状になった間の部分には斜めの沈線がつけられる。屈曲部には横方向からの刺突による三角形の刺突文が施される。76は半截竹管の押し引き文の下に平行沈線による三角形区画状の文様が施されている。80も平行沈線による三角形区画状の文様が見られる口縁部である。口唇部に粘土紐を貼り付けた浮文が見られる。指ナデでやや窪んだ部分に半截竹管文を施している。84は口縁部が外反する形状を持つ。胎土・色調が他のものと異なり、神奈川県西部出土の土器に似る。施文方法は似るが、斜めの刻みの下に地文として半截竹管文を入れているところがやや異なる。

85～93は薄手の鉢形土器と考えられる。厚さ5mm前後で、器面は硬く、全面磨かれている。88と89に見られるように口縁部はS字状に屈曲し、下部側面には沈線文が見られる。86と87のように沈線文と繩文が施されているものもある。

### （3）時期不明の土器

半截竹管文以外の文様には、繩文、刺突文、無文があり、小片では時期が不明となるものも多い。上部が半截竹管文で、下部が繩文という組合せは諸磲b式に多く、また出土層位もほとんど変わらないことから、これらの土器は大半が諸磲b式である可能性が高い。

97は浅鉢の底部周辺と考えられ。RLの繩文が施文されている。上部は欠損しており形状が不明である。94～96も胎土、文様から同一個体と考えられる。98と99は口縁部である。これもRLの繩文が施文されている。100は浅鉢の底部とその周辺である。底面は円形で平坦に作る。底部の周辺にRLの繩文を施文するが、上部は無文である。口縁部は立ち上がりやや外反するようだが、欠損により形状が不明である。

101は波状口縁の一部と推定される。無文でやや厚みがある。102も無文である。

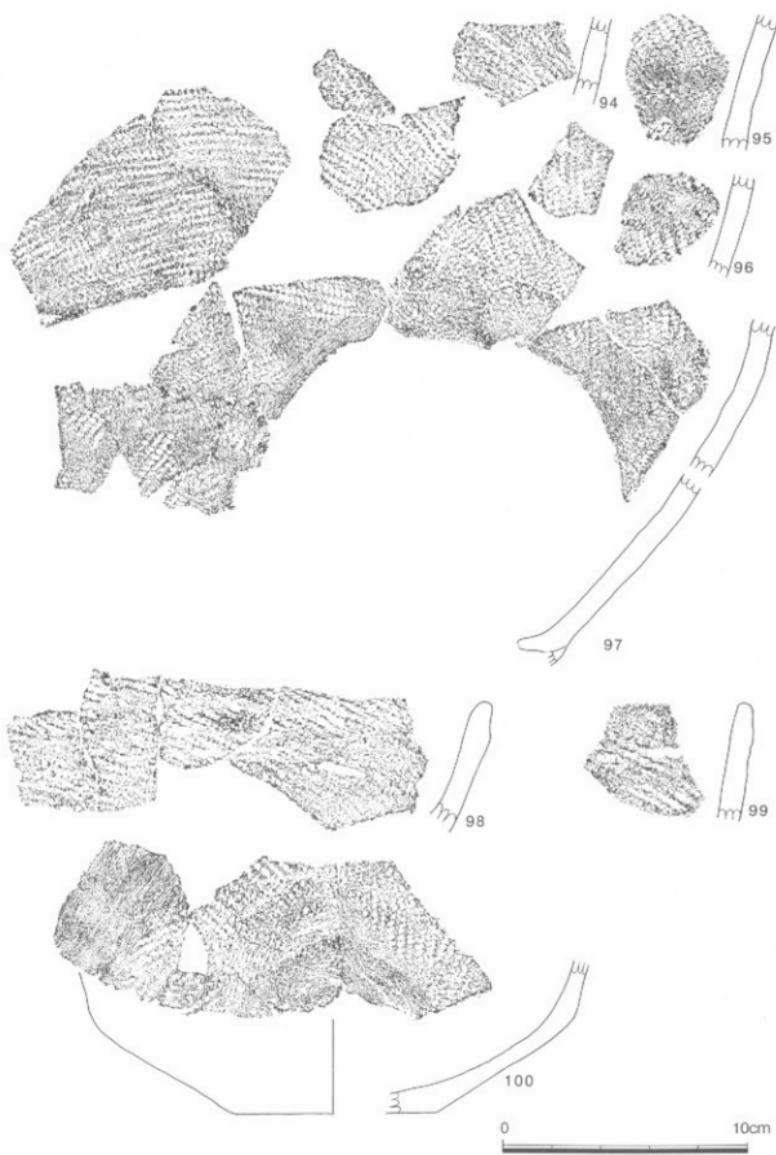
103～141は繩文の残る土器片である。摩滅しているものも多いが、ややRLがLRより多い傾向にある。107は平坦な口縁部である。

142～152も施文原体は繩と推定されるが、文様の密度が低い。153と154は目の細かい繩を使用しており、原体が絡条体である可能性がある。

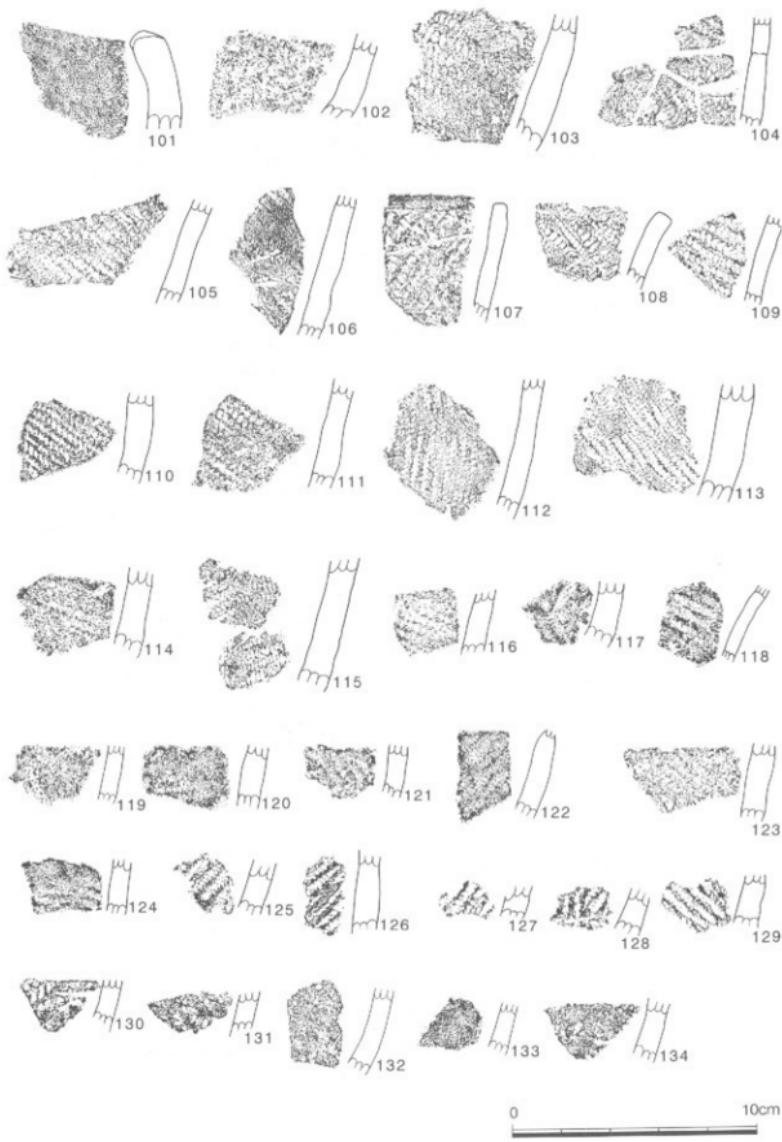
155～158は繩文を地文として施文し、上から幅広の沈線を引いたと考えられる。

159と160は粘土紐を貼り付けた突堤の上に沈線を入れている。161は上からの連続刺突を行なって施文している。162は2列の沈線を縱方向に引いている。

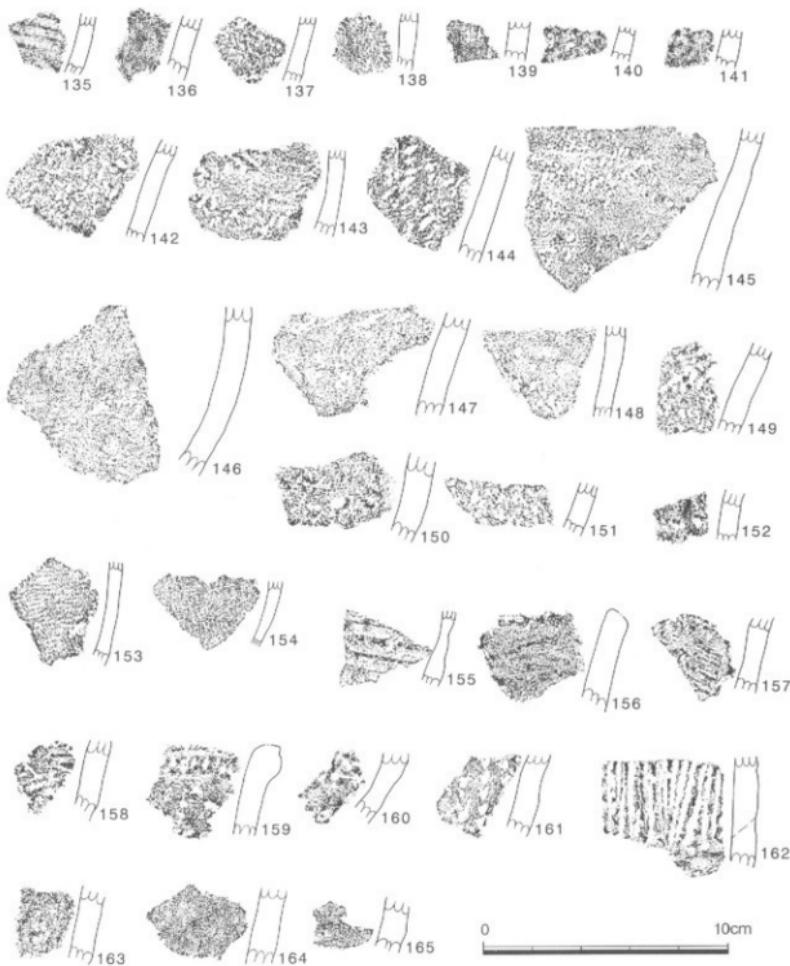
163～165は無文である。165は横方向の指ナデによるわずかな窪みが見られる。



第29図 縄文土器実測図（6）



第30図 縄文土器実測図 (7)



第31図 縄文土器実測図(8)

第13表 繩文土器観察表

No. I

No.	遺物番号	区・グリッド	形態 ①文様 ②胎土 ③焼成 ④色調	年代観
1	P-200	2-2区 A -15	①縄文 (R L) -一端広の沈線 ②大粒の砂を含む ③良好 ④明赤褐色	早期
2	P-337-2	2-2区 A -15	①同上 ②同上 ③やや不良 ④にぶい赤褐色	早期
3	P-146	2-2区 A -15	①有孔突唇文 ②大粒の砂と纖維を含む ③良好 ④明赤褐色	早期茅山下層式
4	P-337-3	2-2区 A -15	①同上 ②同上 ③良好 ④赤褐色	早期茅山下層式
5	P-291	2-2区 A -15	①貝殻条痕文 ②大粒の砂を少量と纖維を含む ③良好 ④にぶい橙	早期茅山下層式
6	P-331 P-332	2-2区 B -17	①刻目突唇 ②砂を微量、纖維を含む ③やや不良 ④橙	早期茅山下層式
7	P-337-4	2-2区 A -15	①貝殻条痕文 ②大粒の砂を少量、纖維を含む ③良好 ④明赤褐色	早期茅山下層式
8	P-232	2-2区 A -15	①貝殻条痕文、突帯上部に刺突文 ②同上 ③良好 ④明赤褐色	早期茅山下層式
9	P-24	1-2区 C -20	①不明 ②砂、纖維を含む ③やや悪い ④にぶい 黄橙	早期
10	P-337-5	2-2区 A -15	①無文 ②大粒の砂を少量、纖維を含む ③良好 ④明赤褐色	早期茅山下層式
11	P-207	2-2区 B -17	①不明 ②砂、纖維を含む ③やや悪い ④にぶい 黄橙	早期
12	P-337-6	2-2区 A -15	②大粒の砂を含む ③良好 ④浅黃	早期茅山下層式
13	P-180	2-2区 A -16	②同上 ③良好 ④にぶい黄橙	早期茅山下層式
14	P-229 P-219	2-2区 A -15	①木葉状沈線文 ②大粒の砂、金雲母を含む ③ 良好 ④にぶい橙	前期諸磧 b 式
15	P-309	2-2区 A -15	同上	前期諸磧 b 式
16	P-177	2-2区 A -15	同上	前期諸磧 b 式
17	P-290	2-2区 A -15	①同上 ②砂、少量の金雲母を含む ③良好 ④橙	前期諸磧 b 式
18	P-337-7	2-2区 A -15	①縄文 (R L) -木葉状沈線文 -隆帯上の沈線 ②砂、黒色鉱物を含む ③良好 ④にぶい赤褐色	前期諸磧 b 式
19	P-294	2-2区 A -17	①条痕文 ②砂、少量の雲母を含む ③良好 ④に ぶい橙	前期諸磧 b 式
20	P-203	2-2区 B -17	①全面磨研、突帯に刻目、上部黒色、突帯朱色 ② 砂を少量含む ③良好 ④橙	前期諸磧 b 式
21	P-246 P-337-8	2-2区 B -17	同上	前期諸磧 b 式
22	P-175	2-2区 A -14	①半截竹管文(竹一線)、内面ナデ ②砂を微量含 む ③良好 ④にぶい橘	前期諸磧 b 式
23	P-148	2-2区 A -15	①半截竹管文(竹管削突 -平行沈線)、口唇部ナ デによる縁 ②大粒の砂、少量の白色鉱物、微量 の金雲母を含む ③良好 ④橙	前期諸磧 b 式
24	P-307	2-2区 A -15	同上	前期諸磧 b 式
25	P-205	2-2区 A -15	同上	前期諸磧 b 式
26	P-234	2-2区 A -15	①半截竹管文(竹一線) ②大粒の砂を多量、黒色 鉱物、金雲母を少量含む ③良好 ④にぶい黄褐色	前期諸磧 b 式
27	P-289	2-2区 A -15	同上	前期諸磧 b 式
28	P-318	2-2区 A -15	同上	前期諸磧 b 式
29	P-299	2-2区 A -15	①半截竹管文(竹一線) ②大粒の砂を多量、黒色 鉱物を含む ③良好 ④にぶい橙	前期諸磧 b 式
30	P-174	2-2区 A -15	同上	前期諸磧 b 式
31	P-155 P-304	2-2区 A -15	①半截竹管文(竹一線) ②大粒の砂を多量、黒色 鉱物、金雲母を少量含む ②大粒の砂、白色鉱物少 量 ③良好 ④橙	前期諸磧 b 式
32	P-239 P-337-9	2-2区 A -15	①縄文 (L R) -半截竹管文 -沈線 ②砂、黒色鉱 物少量、金雲母微量含む ③良好 ④にぶい橘	前期諸磧 b 式
33	P-337-10	2-2区 A -15	①半截竹管文(縁一竹・竹管押し引き文様あり) ②大粒の砂を多量に含む ③良好 ④にぶい橘	前期諸磧 b 式
34	P-166	2-2区 A -15	同上	前期諸磧 b 式
35	P-146 P-337-11 P-277 P- 100 P-288	2-2区 A -15	①半截竹管文(縁一竹) -隆帯上に沈線・円形刺 突文 外面にスス付着 ②砂、金雲母を含む ③良 好 ④赤褐色	前期諸磧 b 式
36	P-83 P-327	2-2区 A -15	同上	前期諸磧 b 式
37	P-278 P-183	2-2区 A -15	同上	前期諸磧 b 式

No.	遺物番号	区・グリッド	形態 ①文様 ②胎土 ③焼成 ④色調	年代観
38	P-215	2-2区 A -15	①半截竹管文(線一竹) ②③④同上	前期諸磲 b 式
39	P-316	2-2区 A -15	①半截竹管文(線一竹)・円形刺突文 ②③④同上	前期諸磲 b 式
40	P-210	2-2区 A -15	①半截竹管文(線一竹) ②③④同上	前期諸磲 b 式
41	P-268 P-84 P-313 P-93 P-99	2-2区 A -15	①半截竹管文(線一竹)・隆帯上に沈線・円形刺突文 ②砂・金雲母を含む ③良好 ④によい褐色	前期諸磲 b 式
42	P-287	2-2区 A -15	①半截竹管文(線一竹)・隆帯上に沈線 ②砂・金雲母を含む ③良好 ④によい褐色	前期諸磲 b 式
43	P-337-12	2-2区 A -15	①繩文(R L)・半截竹管文(竹一線)・隆帯上の沈線 ②砂・金雲母を含む ③良好 ④赤褐色	前期諸磲 b 式
44	P-337-13	2-2区 A -15	同上	前期諸磲 b 式
45	P-161	2-2区 A -15	①同上・円形刺突文 ②③④同上	前期諸磲 b 式
46	P-235	2-2区 A -15	同上	前期諸磲 b 式
47	P-127 P-227 P-337-14	2-2区 A -15	①繩文(R L)・半截竹管文(竹一線)・隆帯上の沈線 ②③④同上	前期諸磲 b 式
48	P-242	2-2区 A -15	同上	前期諸磲 b 式
49	P-214	2-2区 A -15	同上	前期諸磲 b 式
50	P-337-15	2-2区 A -15	①繩文・半截竹管文(線一竹)・隆帯上の沈線・円形刺突文 ②③④同上	前期諸磲 b 式
51	P-253	2-2区 A -15	①繩文・半截竹管文(線一竹)・隆帯上の沈線 ②③④同上	前期諸磲 b 式
52	P-186 P-145	2-2区 A -15	①半截竹管文(線一竹) ②砂・雲母をわずかに含む ③良好 ④明赤褐色	前期諸磲 b 式
53	P-149	2-2区 A -15	①半截竹管文・円形刺突文 ②砂・雲母を含む ③良好 ④明赤褐色	前期諸磲 b 式
54	P-336	2-2区 A -15	①半截竹管文・内面丁寧なナデ ②砂・雲母を少量含む ③良好 ④明赤褐色	前期諸磲 b 式
55	P-337-16	2-2区 A -15	①繩文(R L)・半截竹管文(竹一線)・隆帯上の沈線 ②砂・金雲母を含む ③良好 ④赤褐色	前期諸磲 b 式
56	P-337-17	2-2区 A -15	①繩文R L・半截竹管文(線一竹)・沈線・円形刺突文 ②砂と雲母を少量含む ③良好 ④赤褐色	前期諸磲 b 式
57	P-271	2-2区 A -15	①半截竹管文(竹一線)・円形刺突文 ②同上 ③良好 ④赤褐色	前期諸磲 b 式
58	P-180	2-2区 A -16	①同上 ②砂を少量含む ③良好 ④明赤褐色	前期諸磲 b 式
59	P-264	2-2区 A -16	①半截竹管文・内面ナデ、ス付着 ②砂と微量の雲母を含む ③良好 ④によい褐色	前期諸磲 b 式
60	P-168	2-2区 A -15	①半截竹管文(線一竹)・円形刺突文 ②砂と雲母を少量含む ③良好 ④明赤褐色	前期諸磲 b 式
61	P-265	2-2区 A -15	①半截竹管文(線一竹) ②砂と雲母を含む ③良好 ④赤褐色	前期諸磲 b 式
62	P-326	2-2区 A -15	①半截竹管文・内面ナデ ②砂と雲母を少量含む ③良好 ④赤褐色	前期諸磲 b 式
63	P-175	2-2区 A -14	①半截竹管文(磨滅)・内面ナデ ②砂を含む ③良好 ④明赤褐色	前期諸磲 b 式
64	P-310	2-2区 A -15	①半截竹管文・円形刺突文 ②大粒の砂と雲母を少量含む ③良好 ④橙	前期諸磲 b 式
65	P-283	2-2区 A -16	①半截竹管文・円形刺突文 ②砂を少量含む ③良好 ④橙	前期諸磲 b 式
66	P-281	2-2区 A -15	①半截竹管文(線一竹) ②砂をわずかに含む ③良好 ④橙	前期諸磲 b 式
67	P-211	2-2区 A -15	①半截竹管文・内面ナデ ②砂を多く含む ③良好 ④明赤褐色	前期諸磲 b 式
68	P-328	2-2区 A -15	①半截竹管文(竹一線) ②砂を少量含む ③良好 ④橙	前期諸磲 b 式
69	P-318	2-2区 A -15	①半截竹管文(線一竹)・内面丁寧なナデ ②砂と雲母を少量含む ③良好 ④橙	前期諸磲 b 式
70	P-249	2-2区 A -15	①半截竹管文(竹一線) ②砂を含む ③良好 ④明赤褐色	前期諸磲 b 式
71	P-107	2-2区 A -15	①半截竹管文(線一竹) ②砂と雲母をわずかに含む ③良好 ④明赤褐色	前期諸磲 b 式
72	P-194	2-2区 A -15	①半截竹管文(竹一線) ②砂と雲母をわずかに含む ③良好 ④明赤褐色	前期諸磲 b 式

No.	遺物番号	区・グリッド	形態 ①文様 ②胎土 ③焼成 ④色調	年代観
73	P-292	2-2区 A-15	①半截竹管文(線一竹) ②砂と雲母を含む ③良好 ④にぶい黄橙	前期諸磯 b式
74	P-217	2-2区 A-15	①半截竹管文 ②砂を少量含む ③良好 ④にぶい黄橙	前期諸磯 b式
75	P-273	2-2区 A-16	①半截竹管文 ②砂と微量の雲母を含む ③良好 ④橙	前期諸磯 b式
76	P-171 P-178 P-298	2-2区 A-15	①半截竹管文(線一竹)-沈線 ②砂、金雲母含む ③良好 ④赤褐色	前期諸磯 b式
77	P-308	2-2区 A-15	①沈線文 ②砂と雲母を少量含む ③良好 ④赤褐色	前期諸磯 b式
78	P-267	2-2区 A-15	①無文 ②砂を含む ③良好 ④明赤褐色	前期諸磯 b式
79	P-163	2-2区 A-15	①半截竹管文 ②大粒の砂、金雲母を含む ③良好 ④にぶい赤褐色	前期諸磯 b式
80	P-244 P-276	2-2区 A-15	①繩文(R-L)-半截竹管文-沈線 ②砂と雲母を含む ③良好 ④明赤褐色	前期諸磯 b式
81	P-322	2-2区 A-15	①沈線文 ②大粒の砂、金雲母を含む ③良好 ④にぶい赤褐色	前期諸磯 b式
82	P-226	2-2区 A-14	①半截竹管文(線一竹) ②砂を含む ③良好 ④明赤褐色	前期諸磯 b式
83	P-87	2-2区 A-15	①半截竹管文(竹一線)・内面ナデ ②砂と雲母をわずかに含む ③良好 ④明褐色	前期諸磯 b式
84	P-117 P-156 P-169 P-224 P-250 P-282 P-286 P-262	2-2区 A-14 2-2区 A-15	①繩文(R-L)-半截竹管文(線一竹)-隆帯上の沈線 ②大粒の砂を少量含む ③良好 ④にぶい黄	前期諸磯 b式 前期諸磯 b式
85	P-252	2-2区 A-16	①沈線文 ②砂をわずかに含む ③良好 ④明褐色	前期
86	P-94	2-2区 A-15	①沈線文-繩文(L R)・内面ナデ ②砂を少量含む ③良好 ④にぶい赤褐色	前期
87	P-152	2-2区 A-14	①同上 ②砂と微量の黒雲母を含む ③良好 ④にぶい赤褐色	前期
88	P-88 P-108 P-89 P-270 P-301	2-2区 A-15	①沈線文・全面磨き・凹巻あり ②砂を少量含む ③良好 ④暗赤褐色	前期
89	P-101 P-111 P-305 P-129	2-2区 A-15	同上	前期
90	P-184 P-103	2-2区 A-15	①磨き-沈線文・内面磨き ②同上 ③良好 ④にぶい赤褐色	前期
91	P-320	2-2区 A-15	①繩文-沈線文・内面磨き ②砂と黒雲母を含む ③良好 ④にぶい赤褐色	前期
92	P-297-1	2-2区 B-17	①沈線文 ②砂をわずかに含む ③良好 ④明褐色	前期
93	P-297-2	2-2区 B-17	同上	前期
94	P-131	2-2区 A-15	①繩文(R L) ②砂と金雲母を含む ③良好 ④にぶい赤褐色	前期諸磯 b式
95	P-118	2-2区 A-15	同上	前期諸磯 b式
96	P-247	2-2区 A-15	同上	前期諸磯 b式
97	P-128 P-140 P-159 P-147 P-187 P-216 P-238 P-250 P-256 P-275 P-284 P-285 P-315 P-334 P-337-18・19	2-2区 A-15	同上	前期諸磯 b式
98	P-151 P-161 P-222	2-2区 A-15	①繩文(R L) ②多量の砂、金雲母を含む ③良好 ④赤褐色	前期諸磯 b式
99	P-193-2	2-2区 A-15	①繩文(R L) ②砂と金雲母を含む ③良好 ④にぶい黄橙	前期
100	P-134 P-187 P-225 P-259 P-337-25	2-2区 A-15	①繩文(R L) ②砂を少量含む、まれに大粒あり ③良好 ④にぶい黄橙	前期諸磯 b式
101	P-27	1-2区 C-20	①無文・外側ナデ・波状口縁 ②砂と微量の金雲母を含む ③良好 ④明黄褐色	
102	P-92	2-2区 A-15	①無文カ ②砂と少量の金雲母を含む ③良好 ④明赤褐色	
103	P-158	2-2区 A-14	①繩文(R L) ②大粒の砂を含む ③良好 ④にぶい黄橙	
104	P-213 P-295 P-337-20	2-2区 A-15	①繩文(R L) ②大粒の砂を含む ③やや悪い ④明赤褐色	
105	P-272	2-2区 A-15	①繩文(R L) ②砂と金雲母を含む ③良好 ④にぶい赤褐色	

No.	遺物番号	区・グリッド	形態 ①文様 ②胎土 ③焼成 ④色調	年代観
106	P-120	2-3区 A -16	①織文(L R) ②砂と金雲母を含む ③良好 ④赤褐色	
107	P-16	1-2区 C -20	①織文(L R) ②砂を少量含む ③良好 ④にぶい黄褐色	
108	P-67	1-3区 F -22	①織文(L R) ②砂と少量の金雲母を含む ③不良 ④明褐色	
109	P-109	2-1区 B -18	①織文(L R) ②多量の砂を含む・金雲母を含む ③良好 ④明赤褐色	
110	P-311	2-2区 A -15	①織文(L R) ②砂を少量含む ③良好 ④にぶい赤褐色	
111	P-209	2-3区 A -16	①織文(L R) ②大粒の砂と金雲母を含む ③良好 ④褐色	
112	P-337-21	2-2区 A -15	①織文(L R)・内面ナデ ②砂を含む ③良好 ④赤褐色	
113	P-240	2-2区 A -14	①織文(L R) ②大粒の砂を多く含む ③良好 ④橙	
114	P-279	2-2区 A -15	①織文(L R) ②砂と金雲母を少量含む ③良好 ④にぶい黄褐色	
115	P-221 P-337-22	2-2区 A -15	①織文(L R) ②大粒の砂を多く含む ③良好 ④にぶい褐色	
116	P-337-23	2-2区 A -15	①織文(L R)・内面ナデ ②砂と金雲母を含む ③良好 ④にぶい褐色	
117	P-204	2-2区 A -15	①織文(L R) ②大粒の砂を含む ③良好 ④明赤褐色	
118	P-79	2-1区 B -18	①織文(L R) ②大粒の砂と金雲母を含む ③良好 ④明赤褐色	
119	P-254	2-2区 A -15	①織文(L R)カ ②大粒の砂と金雲母を含む ③良好 ④にぶい黄褐色	
120	P-191	2-2区 A -15	①織文(L R)カ ②砂と微量の金雲母を含む ③良好 ④明赤褐色	
121	P-149-2	2-2区 A -15	①織文(L R)カ ②砂を含む ③良好 ④明赤褐色	
122	P-85	2-2区 A -15	①織文(L R) ②砂と金雲母を含む ③良好 ④にぶい褐色	
123	P-182	2-2区 A -15	①織文(L R) ②大粒の砂を多量、金雲母を少量含む ③良好 ④明赤褐色	
124	P-173	2-2区 A -15	①織文(L R) ②砂と金雲母を含む ③良好 ④にぶい黄褐色	
125	P-170	2-2区 A -15	①織文(L R) ②砂を少量含む ③良好 ④にぶい黄褐色	
126	P-110	2-2区 A -15	①織文(L R)・内面ナデ ②砂を服務・気泡あり ③良好 ④にぶい黄褐色	
127	P-260	2-2区 A -15	①織文(L R) ②砂を含む ③良好 ④にぶい黄褐色	
128	P-97	2-2区 A -15	①織文(L R)カ ②砂と金雲母を少量含む ③良好 ④にぶい黄褐色	
129	P-245	2-2区 A -15	①織文(L R) ②砂を少量含む ③良好 ④にぶい黄褐色	
130	P-91	2-3区 A -16	①半截竹管文 ②砂と金雲母を含む ③不良 ④褐色	
131	P-230	2-2区 A -15	①織文(L R) ②砂を少量含む ③良好 ④にぶい橙	
132	P-154	2-2区 A -15	①無文・内外面ナデ ②砂と金雲母を含む ③良好 ④赤褐色	
133	P-257	2-2区 A -15	①無文カ ②砂と金雲母・黒色転物を含む ③良好 ④にぶい赤褐色	
134	P-199	2-2区 A -15	①織文(L R)カ・内外面ナデ ②砂を少量含む ③良好 ④明赤褐色	
135	P-300	2-2区 A -15	①織文(L R) ②砂を少量含む ③良好 ④橙	
136	P-266	2-2区 A -15	①織文(L R)カ ②砂と金雲母を含む ③良好 ④にぶい褐色	
137	P-255	2-2区 A -15	①織文(L R)カ ②砂と金雲母、黒雲母を含む ③良好 ④明黄褐色	

No.	遺物番号	区・グリッド	形態 ①文様 ②胎土 ③焼成 ④色調	年代観
138	P-261	2-2区 A-15	①縞文(R L)カ ②砂を含む ③良好 ④褐色	
139	P-306	2-2区 A-15	①縞文(L R) ②砂と金雲母を含む ③良好 ④にぶい黄褐色	
140	P-323	2-2区 A-15	①不明 ②砂と金雲母を含む ③良好 ④明赤褐色	
141	P-167	2-2区 A-15	①不明 ②砂と金雲母を含む ③良好 ④明赤褐色	
142	P-218	2-2区 A-15	①縞文(L R) ②大粒の砂、金雲母を含む ③良好 ④にぶい赤褐色	
143	P-133	2-2区 A-15	同上	
144	P-335	2-2区 A-15	①縞文(R L)カ ②③④同上	
145	P-337-24	2-2区 A-15	①縞文(L R) ②③④同上	
146	P-165	2-2区 A-15	①縞文(R L) ②大粒の砂を含む ③良好 ④明黄色	
147	P-263	2-2区 A-15	①縞文(R L ?)-沈線 ②大粒の砂を含む ③良好 ④明黄褐色	
148	P-172	2-2区 A-15	①縞文(R L)カ ②砂と金雲母を含む ③良好 ④赤褐色	
149	P-143	2-2区 A-15	同上	
150	P-139	2-2区 A-15	①縞文(R L)カ ②大粒の砂を含む ③良好 ④明黄色	
151	P-151	2-2区 A-15	①縞文(R L)カ ②砂と金雲母を含む ③良好 ④赤褐色	
152	P-86	2-2区 A-15	①縞文(R L)カ ②③④同上	
153	P-115	2-2区 A-14	①縞文(L R)・内面ナデ ②砂と金雲母を少量含む ③良好 ④にぶい褐色	
154	P-241	2-2区 A-15	①縞文(R L)カ・内面丁寧なナデ ②砂を少量含む ③良好 ④にぶい褐色	
155	P-135	2-2区 A-14	①縞文-沈線文 ②砂を含む ③良好 ④明黄色	
156	P-116	2-2区 A-14	①沈線文カ ②大粒の砂を少量含む ③良好 ④明赤褐色	
157	P-196	2-2区 A-15	①縞文(R L) ②大粒の砂を含む ③良好 ④にぶい褐色	
158	P-230	2-2区 A-15	①縞文(R L)カ ②大粒の砂を含む ③良好 ④にぶい橙	
159	P-49	4-2区 B-4	①刻み目突帯・内面ナデ ②砂を含む ③良好 ④にぶい黄褐色	
160	P-333	2-2区 B-17	①不明 ②砂を多く含む ③良好 ④にぶい黄褐色	
161	P-251	2-2区 A-15	①半截竹管刺突文 ②砂を含む ③良好 ④にぶい褐色	
162	P-80	2-1区 B-18	①条痕文 ②大粒の砂を少量含む ③良好 ④明赤褐色	
163	P-90	2-2区 A-15	①無文カ ②砂と金雲母、黒雲母を含む ③良好 ④明赤褐色	
164	P-188	2-2区 A-15	①無文 ②砂と黒雲母を含む ③良好 ④灰黄色	
165	P-274	2-2区 A-15	①指ナデ ②砂を少量含む ③良好 ④灰黄色	

## 2 石器

今回の調査では石鎌18点、石鎌未製品2点、削器・搔器4点、楔形石器2点、使用痕のある剝片1点、石ヒと思われる石器1点、打製石斧2点、磨石4点、石皿1点が出土した。このほか、2区を中心として黒耀石の剝片が150点余り出土している。石材となる黒耀石の原産地は、製品では神津島の恩馳島が多く、中伊豆町柏崎と長野県霧ヶ峰があわざかにある。しかし、剝片については柏崎と推定されるものが圧倒的であった。

1～18は石鎌である。すべて石材は黒耀石で、このうち12点が神津島産、4点が柏崎産、2点が霧ヶ峰産である。石鎌は1区～5区の各区で出土した。1～10は縦長の三角鎌で、下部は無茎、わずかに抉りが入る。3と9は下部を欠損しているが、同様の形状であると考えられる。また、7は小片であるが、加工方法が似ており同様の形状と推定される。11と12は横長の石鎌である。下部は無茎で緩いV字形に抉りを入れている。13は三角鎌に似るが、やや横幅が広く、基部の抉りも他の三角鎌に比べて深い。14は横長の石鎌で、三日月形の形状をしており、先端は鋸きを欠いている。15は側縁が鋸歯状をしている。下部が欠損しており、基部の加工は不明である。尖頭器の可能性もあるが、幅と厚みから石鎌と推定した。16は木葉形で、基部はやや細くなるが、円基と考えられる。17は外形は木葉形に似るが、基部に抉りを入れている。18は不整形ではあるが、加工方法から石鎌と判断した。片側の下部が作成途中で割れ、新たに側縁部を加工しなおしていると思われ、三角鎌の一種と考えられる。基部は無茎で直線的に作られている。

19と20は石鎌の未製品と考えられる。2～2区より出土しており、19には基部の抉り加工が、20には先端の加工が見られる。2～2区は剝片が多く出土しており、未製品と合わせて石器製作をこの地で行なっていたと考えられる。石材は2点とも柏崎産の黒耀石である。

21～24は削器・搔器である。21は先端に刃を作り出すエンドスクレイバー、22は先端から側面にかけて刃を作り出している削器と搔器の複合石器である。23は下部を欠損し、刃部がどの部分まで作り出されていたかは不明であるが、形状からサイドスクレイバーと推定される。24は鋭く尖らせた部分の内側に刃を作り出しているノッチドスクレイバーである。石材は21～23は神津島産、24が柏崎産である。

25と26は薄い部分を作り出し、楔形に仕上げられた石器である。石材は黒耀石で、25が柏崎産、26が神津島産のものを使用している。

27と28は石核である。いずれも柏崎産の黒耀石である。

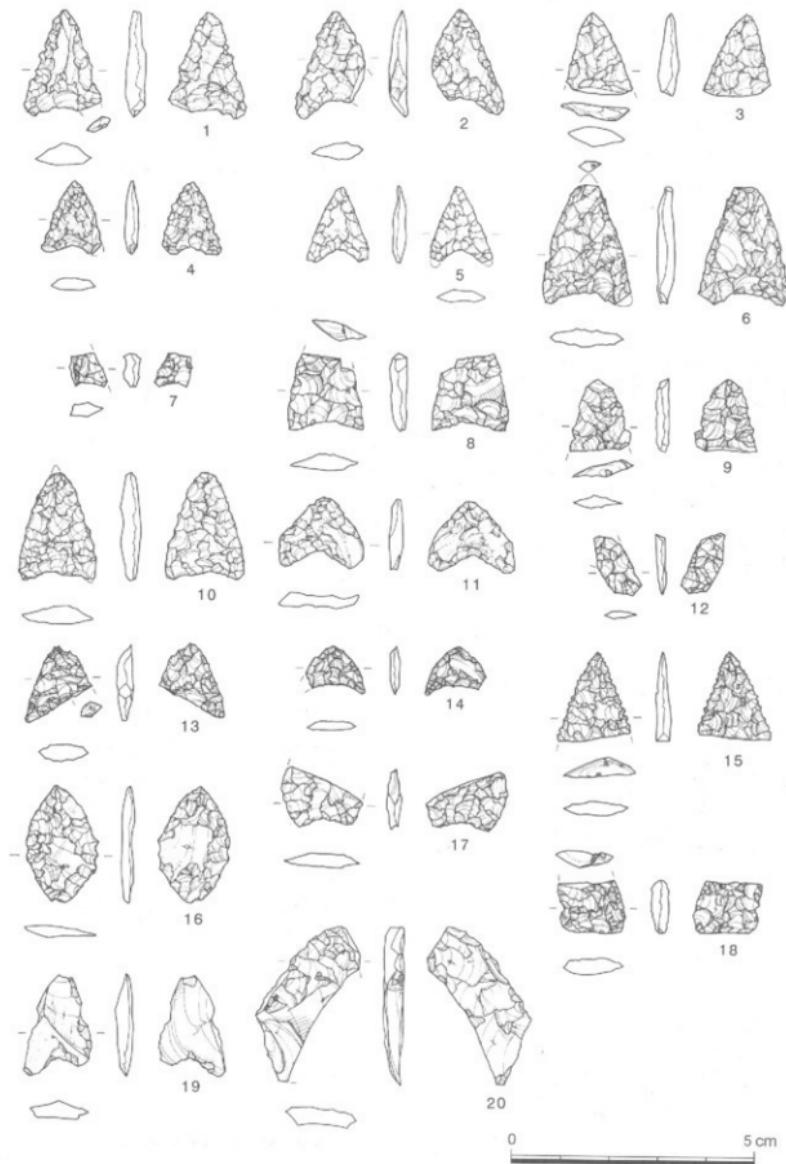
29と30は石器としては形状が不完全ではあるが、使用痕が認められる石器である。29は縦長の剝片である。石材は黒色緻密安山岩で、側縁に使用痕が見られる。30は台形状の石器である。石ヒに似た形で下辺と両側辺に使用痕が認められる。石材は黄味のかかった灰白色の凝灰質頁岩である。

31は橢円形の打製石斧である。4～4区の西側の土層帶褐色土中より出土した。

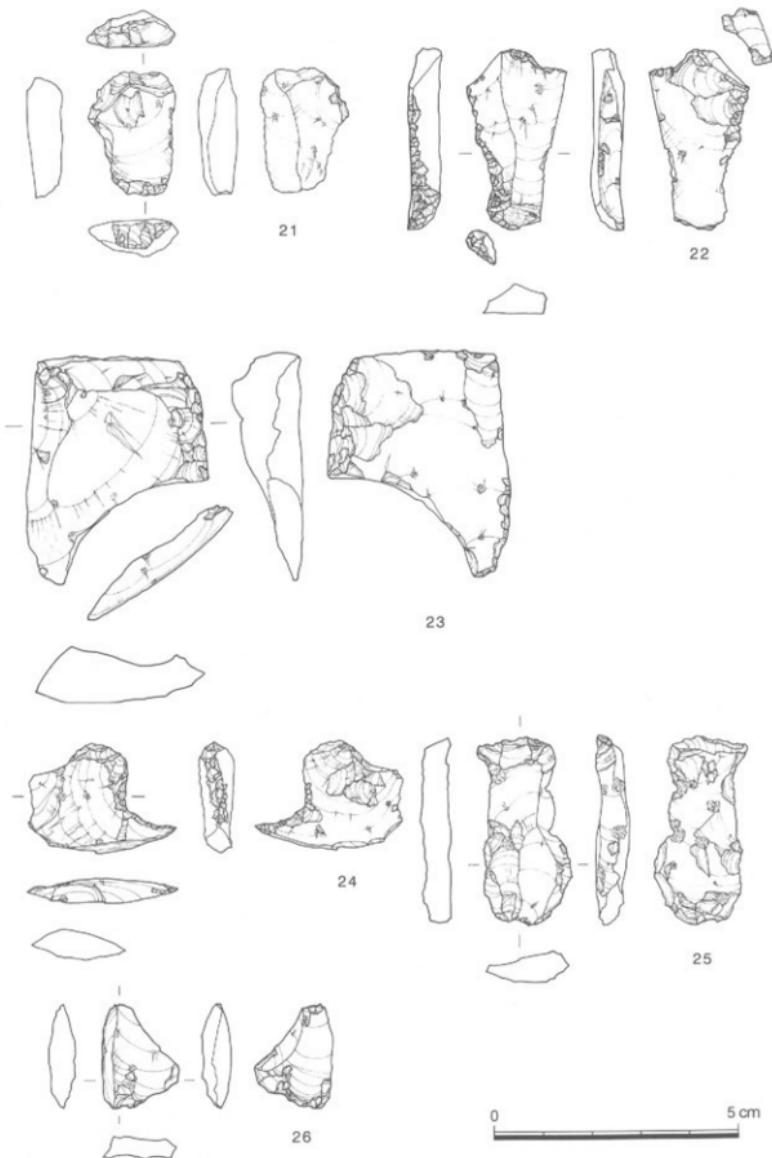
32は石斧またはスクレイバー状の石器と考えられる。焼痕が残り、石を焼いて割り取り、石器として加工したと考えられる。概形は斧状であるが、片方の側縁に刃を作り出している。1～2区西側の礫が多く検出される地区で出土した。

33・34・36・37は磨石と思われる。磨り方向はいずれも不明瞭である。33・34は2面が、36・37は1面が磨り面と考えられる。石材は33・34・36は輝石安山岩、37は石英安山岩である。

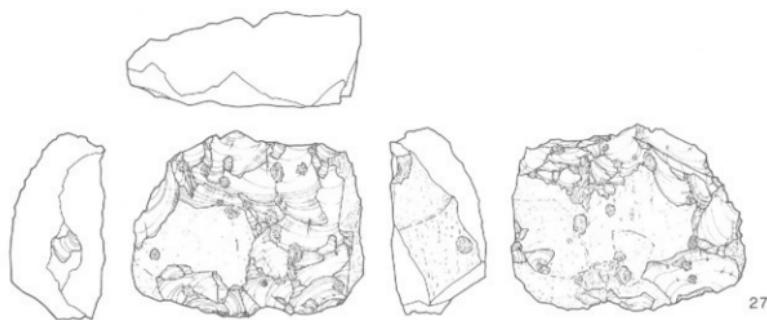
35は石皿である。上面に対して下面が斜めになっており、平坦な場所に置く場合はかなり傾いてしまう。このため、片側に土石などを敷かなければ使用しにくいと考えられる。石材は輝石安山岩である。4～2区からの出土で、周囲にはこぶし大の礫が数個検出されたが、磨石・敲石に使用されたものは見当らなかった。



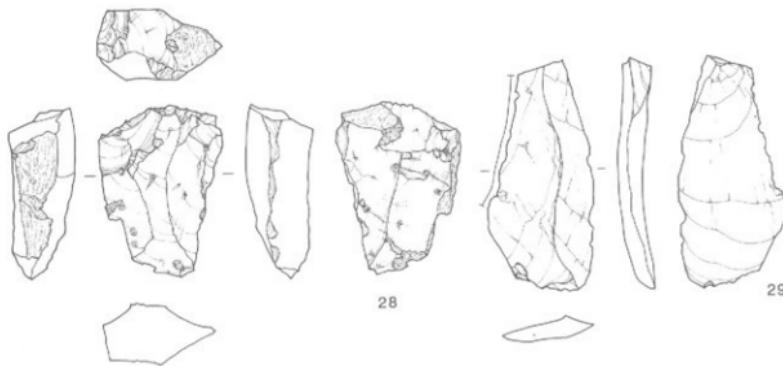
第32図 石器実測図（1）



第33図 石器実測図 (2)

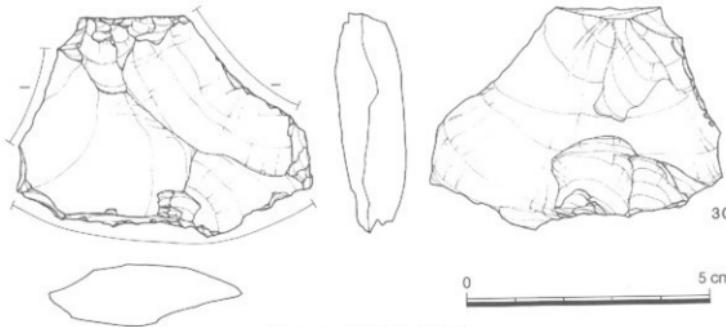


27



28

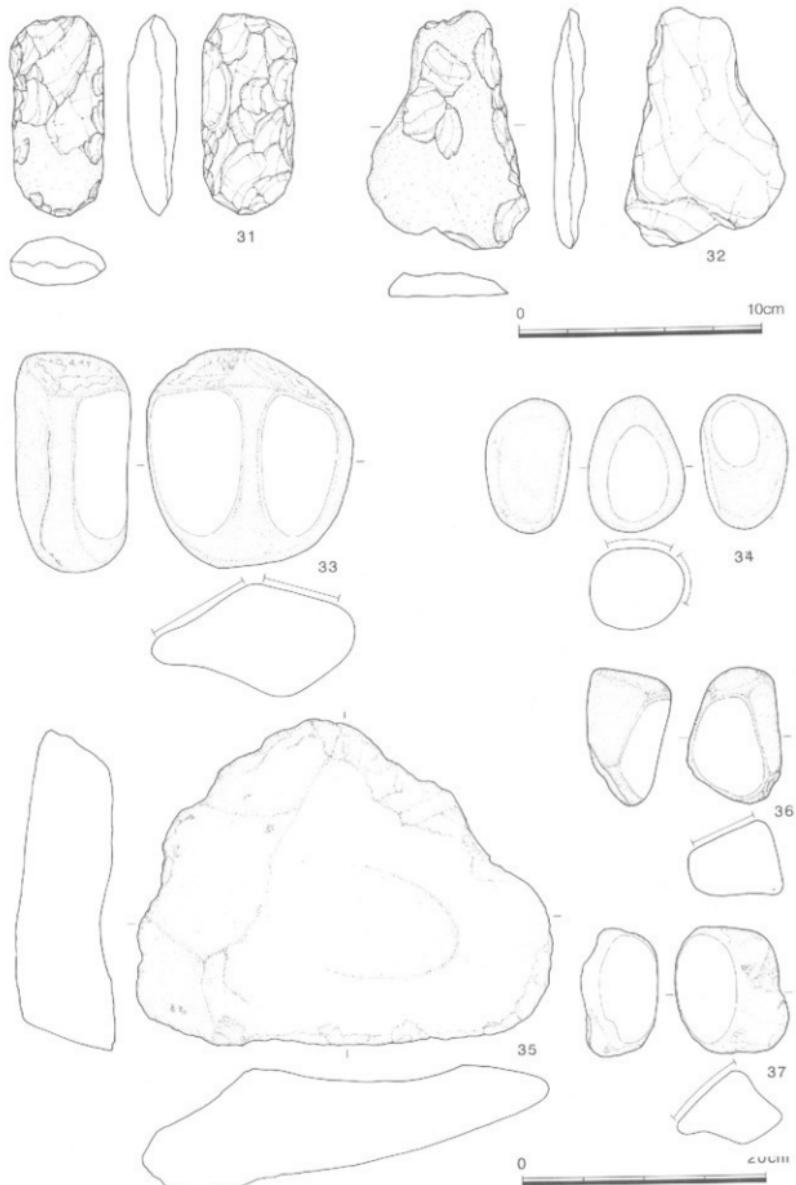
29



30

0 5 cm

第34図 石器実測図(3)



第35図 石器実測図 (4)

第14表 石器一覧表

No.	遺物名	遺物番号	地区	グリッド	材質(産地)	法量(mm)			重量(g)	形 状
						長さ	幅	厚さ		
1	石鎌	S-30	1-2区	C-20(N)	黒耀石(KOZ)	22	(16)	4	0.9	無茎 一部欠損
2	石鎌	S-92	3-4区	A-12(N)	黒耀石(KOZ)	22	(14.5)	4	0.8	無茎
3	石鎌	S-222	2-2区	A-15(N)	黒耀石(KOZ)	(17)	(14)	(4.5)	(0.7)	下部欠損
4	石鎌	S-44	4-2区	B-4(N)	黒耀石(KSW)	15	(12.5)	3	0.37	無茎 脚の一部を欠損
5	石鎌	S-170	2-2区	A-15(N)	黒耀石(KOZ)	(15.5)	13	3	(0.3)	無茎 脚の一部を欠損
6	石鎌	S-1	5-1区	D-2(S)	黒耀石(KOZ)	(24)	18.5	4	1.5	無茎 上端欠損
7	石鎌	S-147	4-3区		黒耀石(KOZ)	(22)	16	4	(1.1)	無茎 上端欠損
8	石鎌	S-102	1-3区	E-22(S)	黒耀石(KOZ)	(16)	15.5	4	0.88	無茎 上部欠損
9	石鎌	S-4	5-1区		黒耀石(KSW)	(15)	(13)	3	(0.4)	下部欠損
10	石鎌	S-135	2-3区	A-16(S)	黒耀石(KRM)	(7)	(8)	(4)	(0.2)	大部分が欠損
11	石鎌	S-120	2-2区	A-15(S)	黒耀石(KSW)	14	17.5	3	0.57	無茎 完形品
12	石鎌	S-25	1-2区	B-20(S)	黒耀石(KSW)	(12.5)	(9.5)	(2)	(0.1)	無茎 1/2を欠損
13	石鎌	S-39	4-2区	C-4(S)	黒耀石(KOZ)	(16)	(14)	3.5	(0.5)	無茎 上端と脚部を欠損
14	石鎌	S-50	4-4区	C-7(N)	黒耀石(KRM)	10	(13)	2	0.2	無茎 脚の先端を欠損
15	石鎌	S-29	1-2区	C-20(N)	黒耀石(KOZ)	(18.5)	(15)	(3.5)	(0.7)	下部欠損 鋸歯状加工
16	石鎌	S-87	3-2区	B-11(N)	黒耀石(KOZ)	23.5	14.5	2.5	0.8	木の葉形 完形品
17	石鎌	S-148	4-3区		黒耀石(KOZ)	(12)	(17)	(3)	(0.5)	無茎 上部1/2を欠損
18	石鎌	S-43	4-2区	C-3(N)	黒耀石(KOZ)	(11)	(14)	(4)	(0.62)	無茎 上部を欠損 不整形
19	石鎌未製品	S-188	2-2区	A-15(S)	黒耀石(KSW)	21	14	3.5	0.6	無茎カ
20	石鎌未製品	S-162	2-2区	A-14(N)	黒耀石(KSW)	32	21	4	1.7	
21	撫器	S-209	2-2区	A-15(S)	黒耀石(KOZ)	35.5	18.5	8	3.3	エンドスクレイバー
22	削器・撫器	S-46	4-4区	B-6(S)	黒耀石(KOZ)	37	21	7	4.4	削器・撫器の複合
23	削器	S-90	3-4区	B-13(N)	黒耀石(KOZ)	(46.5)	38	19	16.6	下部欠損 サイドスクレイバーか
24	抉入削器	S-118	2-2区	A-15(S)	黒耀石(KSW)	22.5	30.0	7.5	3.7	ノッチドスクレイバー
25	横形石器	S-49	4-4区	B-5(S)	黒耀石(KOZ)	21.5	16	6	1.5	ビエスエスキュー
26	楔形石器	S-88	3-2区	B-10(N)	黒耀石(KSW)	39	20	7	4.6	ビエスエスキュー
27	石核	S-15	1-1区	C-21(S)	黒耀石(KSW)	38	48	19.5	34.7	
28	石核	S-180	2-2区	A-14(N)	黒耀石(KSW)	35.5	26	14	10.1	
29	剥片石器	S-205	2-2区	A-16(S)	黑色緻密安山岩	47.5	22	7	4.3	使用痕あり
30	石匕カ	S-129	2-2区	A-16(S)	凝灰質頁岩	45.0	60.0	14.0	31.4	使用痕あり
31	打製石斧	S-95	4-4区	B-7(S)	石英安山岩	81.5	28	20	80.8	
32	打製石斧カ	S-33	1-2区	C-20(N)	輝石安山岩	98	66	13	80.3	焼痕あり 糜より加工
33	磨石	S-94	3-3区	B-12(N)	輝石安山岩	126	134	69	1603.8	磨面2面
34	磨石	S-84	1-1区	D-21(N)	輝石安山岩	83	60	53	363.6	磨面2面カ
35	磨石	S-68	1-2区	C-20(N)	輝石安山岩	83	58	50.5	285.9	磨面1面
36	磨石	S-223	2-3区	A-17(S)	石英安山岩	78.5	70.0	52.0	273.4	磨面1面
37	石皿	S-54	4-2区	B-4(N)	輝石安山岩	250	199	75	3550	

KOZ: 神津島 KSW: 相岬 KRM: 霧ヶ峰

## &lt;参考文献&gt;

小林達雄編『縄文土器大観1 草創期 早期 前期』 小学館 1989

鈴木道之助『図録 石器入門事典 縄文』 柏書房 1991

## 第Ⅳ章　まとめ

今回の調査において、縄文時代と中近世の2つの時代の存在が明らかとなった。各時代についての調査成果を簡単に整理し、まとめとしたい。

### 縄文時代の様相

茅山下層式と諸磯b式の縄文土器が出土したことにより、縄文早期後半と前期後半の2時期の文化面が調査区の周辺に存在したと考えられる。

土器が出土した層位は同じ褐色粘質土中であり、早期も前期もほとんど変わらないレベルである。しかも、土器の多量に出土する部分が2-2区のA-15~17の西側を中心とし、遺構が全く検出されていない。このことから、褐色土は山からの流れ込みで、居住域は2-2区の東側にあたる山の上部に存在していた可能性が高いと思われる。上部のカワゴ平バミスは良好に残存しているため、縄文後期頃にはすでに土砂の崩落が起きていたことになる。

石器は各区から検出されているが、剥片については圧倒的に2-2区より出土している。2-2区からは石鎚の未製品、ポイントフレイク等が出土しており、石器製作の跡であると考えられる。しかし、出土する範囲・層位は縄文土器とほぼ重なっているため、石器製作跡も山の上部に存在したのではないかと思われる。

### 中近世の様相

中近世の遺構面はほとんどが後世の削平によって失われている。特に山に近い部分は、山裾の開墾や用水路・町道の建設のために削平され、ほとんど土層が残存していない。このような状況ではあるが、2区・3区の西側を中心に小穴群が検出された。検出された小穴の並びを検討し、建物遺構の存在を推定したが、検出されている範囲が限られていたため、建物のプランを明確にすることはできなかった。柵列とした部分も実際には建物であった可能性や、推定した建物が別のプランであった可能性も残る。しかし、小穴群は確実に人々の生活跡であり、大手道につながると考えられる2区において建物跡・柵列と推定される遺構は大見城に付随したものとして大きな意味を持つと考えられる。

遺物はわずかではあるが、16世紀に遡る陶器類が出土しており、大見三人衆の活躍した時代のものと考えられる。後世に畠の耕作で攪乱を受けてはいるが、集落跡にしては遺物がかなり少なく、當時人々が生活していたわけではなく、非常用の施設であった可能性がある。中世に遡る遺物としては中国鏡が2枚出土しているが、鎌倉時代の大見氏につながる可能性は低いと思われる。

中近世の遺構面からは土坑も検出されている。土坑については円形や不整形のものなど、形や大きさが様々であったが、2-2区～2-3区、3-4区で検出された径約1mの円形土坑は、2～3基まとまっており、その規格性から同様の目的で作られた可能性が高いと思われる。覆土は小穴群とほぼ変わらず、新旧関係は不明である。しかし、建物の内外に土坑が存在することから、建物群と同時期に土坑があったとは考えにくい。近世の墓壙の可能性があったため、2-2区で覆土および周辺土壤の理化学分析を実施したが、ヒト遺体につながるものは検出されなかった。表土に近く、耕作による影響が強く出ていると思われ、墓壙である可能性は残る。

### おわりに

今回の調査範囲は大見城の山裾部分に限られていたが、大見城に付随すると思われる建物群の検出は、記録の少ない大見城について、その一端を伺い知ることができる良好な資料であると考えられる。城本体の調査が行なわれていないため、建物群はどのような役割を与えられていたかは不明である。今後の調査・研究に期待したい。

## 第Ⅳ章 特論

### 第1節 戦国城郭—後北条氏の築城法を探る

#### 『大見城の縄張について』

静岡中世城郭調査研究会 関口宏行

大見城は、中伊豆町柳瀬、大見川とその支流の冷川の合流点に位置する。東南から北西に延びた山陵が川の合流点に向かうが、その北端部の尾根上に占地して築城された山城である。

海拔約207m、比高差60m余の山は、通称「城山（しろやま）」と呼称され、城郭遺構は、山上部分や山腹、降下する尾根上等に現在も遺存している。

大見城の縄張は、背後の尾根と一条の堀切りで遮断し、尾根を北西方向に階段上に削平して各曲輪を構築した連郭式山城の形態を有している。これは北西方向よりの攻撃を想定して縄張がなされたものである。大小9つの余の曲輪が認められる。又周辺の斜面には15本余の堅堀が確認されており、最大の堅堀は長さ50mに達している。

本曲輪は「1」から「4」までの削平地の總体部分と考えられる。長さ50m、幅20m前後で東端に一段下がって「4」を、北端では二段の削平地を造成している。本曲輪「1」は、南縁部の一部に幅の狭い低土壘（長さ約20m余）が残存しているだけで、外周に土壘が巡っていた痕跡がない。これは、曲輪外方の斜面の緩慢な地形によるものであろう。本曲輪の虎口については、南端の土壘が一部幅1m余にわたり開口している部分と考えられ、又削平地「3」の北端部が一部張り出し、下方からの小径に連結していることから、この箇所も虎口と推定される。但し、現在の本曲輪へのルートが、城の存在期のルートと一致するのかどうかは、今後の調査の課題である。

本曲輪「1」の下段に、横円形で長軸9m、短軸6mの櫛鉢状の窪地が認められる。本曲輪全体の面積と比較し、異常な面積であるが、これは、井戸ではなく後世の開削であろう。なお本曲輪の東端部「4」の堀切り側に、変形の掘込み部分があり、虎口に類似しているが、やはり、後世の加工と考えられる。

背後を遮断している堀切りは、幅10m、1条のみであり、防御法としては単純な構えである。板状の尾根が、水平のまま城郭部分まで達しているのではなく、南へ降下していることから、地形に依存し、二重の堀切りを構えることはなかったものだろう。堀切りの断面は、薬研を示し、底部は水平ではない。中央が盛り上がって両端方向に降下している構造である。この構造は、戦国城郭ではしばしば認められるものであり、武田氏が関係した北遠地方の城郭にも散見される。

本曲輪の東端部斜面には、二段の狭少な削平地が並んで構えられており、その両端には小規模な堅堀をそれぞれ付属させている。北面の斜面は、雜木が繁茂して堅堀の確認が容易ではないが、精査により更に數本の堅堀の検出が可能となるだろう。

本曲輪斜面の南下から、北西に向けて、回りこむように、長大な帶曲輪（長さ約50m余）が存在する。しかし、この帶曲輪は同一の平面や構造ではなく、途中に堅堀を入れて、侵入の防御を図り、土壘状の突起物を設けたり、段差を意図的につけるなど、帶曲輪の機能を最大限に発揮させていることが特徴である。従って、この曲輪に侵入した敵は、段差が障害となり、しかも幅の狭い場所を通過する時、頭上から俯射されることになる。機能的には、幅広の犬走りの一面を持ち、曲輪「8」と本曲輪「1」との連絡路として用いられ、中間防御ともなり得たはずである。

曲輪「8」は場内では比較的広い面積を持ち、平面（長さ約31m、幅4~12m）では不整形である。

位置的には、ほん曲輪や帶曲輪と連動して防御ができるように構築された重要な曲輪である。南縁部の半分から土塁を東方にかけて設け、外方に幅4m余の堅堀を構えている。堅堀の土を脇に盛り上げて、登り土塁状として、山腹まで攻め上げた敵の行動を阻止できるようにした。この堅堀と上段の帶曲輪の堅堀と喰い違いをみせているのは、上方からの俯射が効率よくできるように配慮したものと考えられる。削平地「6」と曲輪「8」に狭まれて長さ9m、幅1.5m余の細長い部分がある。これは「8」と「6」又は「5」を結ぶ連絡路として活用したものであろう。これ以外に連絡路として認められるルートは検出されていない。

曲輪「8」と「7」は、かつて連絡していた部分であったものを、切断して、堅堀を2条設け、北側部分を掘り込んで片側を土塁として、機能させ、虎口としたものと考えられる。「7」に到達した敵は、「6」・「1」・「8」の三方からの攻撃を受けることになり、極めて巧妙な構造をもって防衛したものだろう。

帶曲輪「7」は本曲輪の北西部下方に位置し、長さ約35m、幅6mで、南端部に虎口を構えている。ただ山際の斜面下に弧状を描くように溝状の窪地があり、現在北端に至って堅堀に連絡し、「12」の外方にある堅堀と合流している。

帶曲輪「12」は、「7」と構造的には類似しており、長さが南進して53mに達するが。途中、仕切り土塁があり、すぐに幅6mの大規模な堅堀が設けられ、一応遮断されている。従ってこの堅堀は改修された結果を示すものである。「12」の斜面下は、「7」と同様、溝状のものが存在している。帶曲輪「12」の下方は、不整形な「14」の曲輪があり、自然地形を残した部分が目立つものの、両端部では、加工が認められる。斜面下方にて掘込み式の虎口を構成し、片側に土塁を設けている形式となっている。この構造は、「7」の南端部と同一であり、改修が同時期であることを示しているものと考えられる。この虎口からは、曲輪内に直進できず、左折して土塁に沿って進み（2回折れの虎口）、土塁と段差面との幅2mの開口部を通り、東に向かい、「15」の部分から、北端斜面を登り「13」へのルートが城内道であったと考えられる。「16」は、自然地形であり、特に土塁や溝等は設けられていない。

「16」の東方は、後世削平されたと思われる痕跡があり、不自然な地形を見せている。「17」は、現在、神社の境内地となっており、平面は不整形で、「16」側の土を削土して、北側へかなりの量を埋土し、拡張したと考えられ、下段の曲輪を埋めてしまったことも推定される。従って現在の形状が、城の存立期の形状ではないことは明らかである。曲輪として、存在したにせよ、幅の狭い曲輪であったことであろう。「22」は、現在不整形であり、三角状に狭長の削平が接続した形となっているが、堀切りの上方に位置することから曲輪として機能したことは考えられる。

ところで、「22」の機能は、下方の箇所（「23」・「24」）と合わせて考える必要がある。しかし、「23」等の部分は、神社への参詣道の造成工事より破壊を受け、当初の形態を大きく損ねてしまっている。

縄張図中の番号「23」は、尾根を横断して設けられた最北端の堀切り外方の土塁を示す。上幅約2mで、長さは現在約20m余で西側は神社の参詣道で切断による破壊で、明確な形状は認められない。堀切りと外方の土塁が途中で終息することは防御上考えられないため、西側へ通っていたと推定される。西側斜面には長大な堅堀（幅5m、長さ50m余）が降下し、見事な遺構を現在に残している。「23」より、下方には、寺院である實成寺の境内（2段）となる。現在、境内地には、明確な城郭遺構は認められないが、唯一、東側に土塁状の高まりを目にすると、城郭遺構かどうか、考古学的調査が必要である。

境内地から川の合流点までは、平坦地となり、「城ヶ平」と呼ばれ、根小屋部分に想定されている。しかし、土塁や堀は、全く認められない。根小屋の範囲を大見川までとすると、斜面地も含まれ、極めて広範囲となってしまうため無理が生じる。従って、山麓の北端部に根小屋を想定することになると

囲は限定して考える必要がある。

大見城の西麓部分も、時期的な差で集落（根小屋）が若干形成された時期を考えても良いであろう。

さて、大見城の縄張の概略を述べてきたが全体からその特性を考えると、次の点が挙げられる。

①現在の縄張は、連郭式の山城で、戦国期の元龜か天正年間初頭頃の構造を示すと考えられる。創築当時は、山頂の本曲輪と山腹の帯曲輪程度の素朴で単純な構造の山城が、伊豆地方の軍事的緊張を何度か経験する中で、順次改修がなされ、現在の縄張となったものだろう。従って、初期の大見城は、土豪クラスの城で、後北条氏の伊豆侵攻後は、漸次伊豆内陸部の支城の一つとなり、眼下の街道を押えるため、後北条氏の直當の改修工事が実施されたと考えれる。

②全体を構成する曲輪の中で、本曲輪が巨大化しており、他の曲輪は、半分以下の面積である。伊豆地方で、後北条氏の創築又は改修を受けたと考えられる城郭を調査すると、しばしば、大見城と同様の傾向をもつ城郭が認められる。(狩野城、柏久保城、白水城など)

本曲輪の面積が広くなっているのは、地形にも制限されていることも考慮しなくてはならないが、従来の連続する小曲輪を削平して拡張工事を実施し、同一平面の一つの曲輪として、改修し、防衛の強化をねらったものではないか。

③長大な帯曲輪を、最大限に活用するため、堅堀や虎口・段差等と複合的組合せを行い、複雑な構造に発展させたこと。

④緩斜面の防衛のため、堅堀を多く設けている。大見城の場合、大小15条余を数えることがてぎ、狩野城（天城湯ヶ島町）より多い。後北条氏の場合、海域と異なり、内陸部の城は、特に堅堀を多様化し敵兵の斜面移動に特別な警戒をしている。

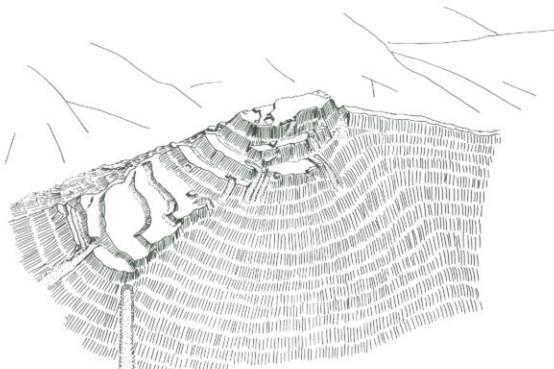
⑤大見城内の曲輪の中で、土壘の使用についてであるが、曲輪全体を土壘で囲むいわゆる团郭式の曲輪は存在しない。最高地所にある本曲輪さえ、西縁部に約20m余が存在するにすぎない。高さ、幅とも小規模であり、外縁部の補強とも解釈できるほどであり、防衛のみと考えにくい。本曲輪背後の掘切りに面した側に、遮断用の土壘は存在しない。

曲輪「8」で、L字型にやや幅広の土壘を設けている。曲輪「7」から「22」までの曲輪でも、外縁部に土壘は使用されていない。土壘の効果的な使用例として、虎口の片側や虎口内の枠形状を形成する位置に設けている。これは、地形の要害性に依存し、土豪の城から、戦国大名の支城に発展した過程をもつ城ではあるが、曲輪配置と面積拡大に制約があったためと、長期間の籠城を想定してはいないためであろう。

大見城の大手口は、今日の位置を特定することはできないが、北方下方の實成寺境内地か、西麓が考えられる。

大見城の創築時期に関する直接の史料はないが、明応6年（1497）4月の伊勢新九郎による伊豆侵攻の際、大見三人衆（佐藤藤左衛門、梅原六右衛門、佐藤七郎左衛門）が守備していたと推定されている。従って、この時すでに、土豪たちの番城としての性格を有していたものと思われる。後北条氏領国となって以来、大きな軍事的緊張や衝突があったのは天正6年（1537）から天文23年までの争乱のあった『河東一乱』である。そして、甲斐の武田信玄が元龜元年（1570）に蘿山城を攻撃している。又、天正8年（1580）の伊豆重須沖の武田・後北条の両水軍による海戦等があり、各動乱期を通して大見城の防備が増強されていったことは十分考えられることである。





大見城鳥瞰図（一部復元）  
作図：関口宏行

## 大見城縄張図

■ 土塁  
— 堀切・堅堀・横堀  
■ 斜面



## 第2節 大見城跡より検出された土坑の内容物について

パリノサーヴェイ株式会社

### はじめに

大見城跡では近世（？）の墓と考えられる土坑が検出されたが、人骨や副葬品と見られる遺物は認められなかった。そこで、土坑への遺体埋納を検証するために、自然科学分析調査を実施することとなった。そこで、今回はリン酸分析を実施することとした。

リン酸分析は、人体（特に人骨）に多量に含まれ、しかも土壤中で比較的移動しにくいとされるリン酸の含有量を測定し、その値から遺体の痕跡を定性的に把握する方法である（竹迫ほか、1981）。また、土壤中のリン酸には動物起源のものばかりではなく、植物起源のものもある。植物起源のリン酸が濃集している場合には植物起源の有機炭素含量も高くなる。逆に、動物起源のリン酸が濃集している場合には、リン酸含量に対して相対的に有機炭素含量が低くなる。そのため、リン酸とともに炭素含量の値を把握することで、全体のリン酸量に対する植物遺体の影響を相対的に知ることができる。そこで、今回は有機炭素含量の測定も試みた。

### 1 試料

調査対象は、2-2区より検出された土坑S F-168、S F-184の2基である。分析試料の詳細は、分析結果とあわせて第15表に示す。

S F-168は平面プランが円形を呈し、片側が掘り込まれ、黒褐色あるいは暗褐色の粘質土で埋積される。一方、S F-184は平面プランが円形を呈し、底部は平坦であり、疊1点が検出された。また、黒褐色あるいは暗褐色の粘質土が埋積される。

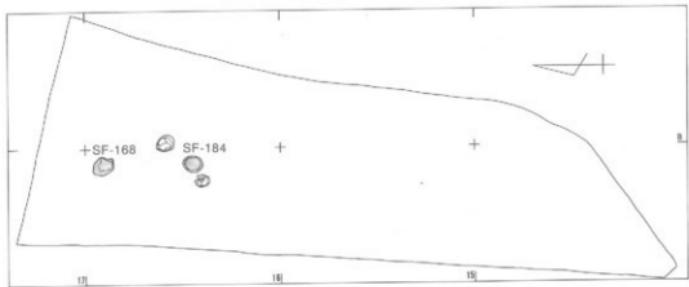
各土坑からは、底部と覆土より3点の土壤が採取された。また、対照試料として地山と検出土坑面より土壤各1点が採取された。（第38図参照）分析には、これらの合計10点全てを用いた。

### 2 方法

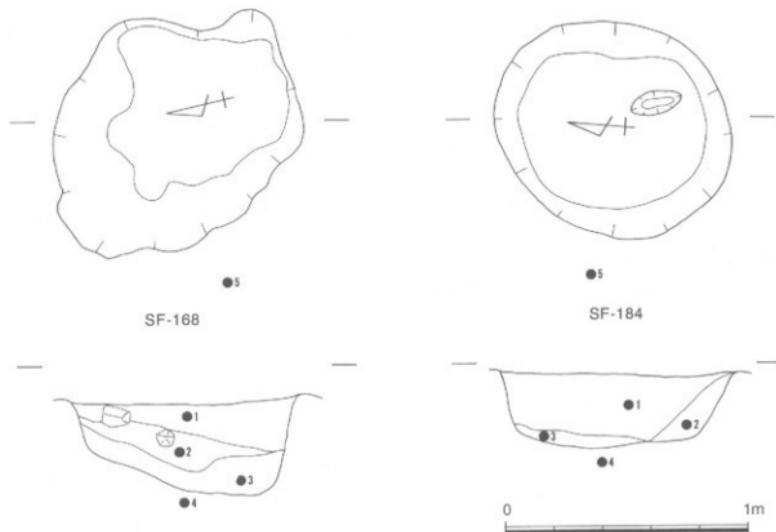
分析は、土壤標準分析・測定法委員会編（1986）、土壤養分測定法委員会編（1981）、京都大学農学部農芸化学教室編（1957）、農林水産省技術会議事務局監修（1967）、ベドロジスト懇談会（1984）などを参考にした。以下に、分析方法を示す。

試料を風乾後、軽く粉碎して2.0mmの筋を通過させる（風乾細土試料）。風乾細土試料の水分を加熱減量法（105°C、5時間）により測定する。風乾細土試料2.00gをケルダールフラスコに秤とり、はじめに硝酸（HNO<sub>3</sub>）5mLを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸（HClO<sub>4</sub>）10mLを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、蒸留水で、100mLに定容して、ろ過する。今回は、リン酸含量をリン酸（P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>）濃度として測定する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて、分光光度計によりリン酸濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から、乾土あたりのリン酸含量（P<sub>2</sub>O<sub>5mg/g</sub>）を求める。

有機炭素量については、風乾細土試料の一部を微粉碎し、0.5mm筋に全通させた微粉碎試料を用いる。微粉碎試料1,000mg前後を精粹し、助燃剤（酸化コバルト）5.0gを混合する。混合試料はサンプルボーダに乗せ、CNコーダー（柳本製作所製：MT-600）に挿入する。挿入された混合試料をキャリアガス（He）気流中で950°に加熱燃焼する。発生した燃焼ガスを純化させ、CO<sub>2</sub>およびN<sub>2</sub>の組成にする。次いで希釈、分取の工程を経て、T C D検出器により炭素および窒素の濃度を測定する。この測定値から、乾土あたりの有機炭素量（O r g-C乾土%）を求め、1.724を乗じて腐植含量（%）とした。



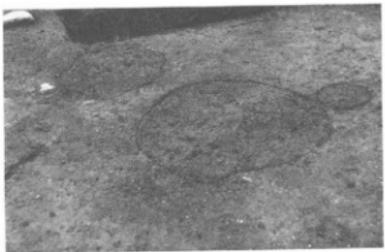
第37図 2-2区土坑分布図



第38図 試料採取位置図



SF-168検出状況



SF-184検出状況

### 3 結果

結果を第15表に示す。以下に、各土坑の腐植含量とリン酸含量について記す。

第15表 SF-168・SF-184の土壤理化分析結果

試料名		土性	土色	腐植含量(%)	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> (mg/g)
SF-168	土壤サンプル1：覆土	S L	10Y R2/1	6.97	2.56
	土壤サンプル2：覆土	S L	10Y R3/1	6.02	2.56
	土壤サンプル3：底部	S L	10Y R2/1	6.51	2.44
	土壤サンプル4：地山（対照試料）	H C	10Y R2/1	1.36	1.48
	土壤サンプル5：検出面（対照試料）	C L	10Y R4/4	4.30	2.38
SF-184	土壤サンプル1：覆土	C L	10Y R4/3	6.68	2.96
	土壤サンプル2：覆土	S L	10Y R3/1	5.37	2.23
	土壤サンプル3：底部	S L	10Y R2/1	5.96	2.72
	土壤サンプル4：地山（対照試料）	S L	10Y R3/2	3.33	1.72
	土壤サンプル5：検出面（対照試料）	S L	10Y R3/1	6.65	2.82

土色：マンセル表色系に準じた標準土色貼（農林水産省農林水産技術会議監修、1967）による

土性：土壤調査ハンドブック（ドロジス）標準会議、1984）の野外土性の判定法による

SL：砂質土（砂の感じが強く、粘り気はわずかである）CL：埴土（わずかに砂を感じるが、かなり粘る）

HC：重埴土（ほとんど砂を感じないで、よく粘る）

#### ・ S F-168

土坑覆土各部の腐植含量とリン酸含量はそれぞれ近い値を示し、下位の試料ほど含量が低くなる。また、対照試料と比較して土坑覆土の両成分の含量は高い。しかし、いずれも腐植含量が高いほどリン酸含量が高い傾向が認められる。

#### ・ S F-184

土坑覆土の腐植含量とリン酸含量は、S F-168と同様である。また、対照試料と比較すると土壌サンプル4よりは高いが、土壌サンプル5と同等あるいは低い。本土坑でも、腐植含量が高いほどリン酸含有量が高い傾向が認められる。

### 4 考察

土壤中に自然に存在するリン酸含量、すなわち天然賦存量と今回の結果を比較する。リン酸の天然賦存量は3.0 P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/gで、最大でも5.0 P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/gと推定される。（Bowen, 1983; Bolt and Bruggenwert, 1980; 川崎ら, 1991; 天野ら, 1991）。調査対象とした両土坑の覆土はいずれも天然の賦存量の範囲内の含量であった。また、腐植含量が高いほどリン酸含量が高い傾向が認められた。そのため、土坑覆土には植物に由来するリン酸混入していること示唆される。今回の結果を見る限り、土壌内に人体を含む動物遺存体成分が残留しているとは考えにくい。

しかし、両土坑の土性は砂質土に区分されるように理化学成分を保持しやすい粘土分が少なかった。そのため、外部から富化された成分の保持が難しいと思われる。また、遺体が埋納されている場合には局所的にリン酸などの遺体成分が濃集することが知られている（中根, 1992など）。そのため、土坑覆土内のリン酸含有量を空間的に検討し、底部を中心とした平面的試料と覆土の層位の試料を採取しておくことが望まれる。また今後、同様な土坑について分析調査を行い、類例を蓄積したい。

### 引用文献

- 天野洋司・太田 健・草場 敬・中井 信（1991）中部日本以北の土壤型別蓄積リンの形態別計量。農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発」、p.28-36

- Bowen, H. J. M. (1983) 環境無機化学－元素の循環と生化学－、浅見輝男・茅野充男訳、297 p., 博友社 [ Bowen, H. J. M. (1979) Environmental Chemistry of Elements ].
- Bolt, G. H. · Bruggenwert, M. G. M. (1980) 土壤の化学、岩田進午・三輪觀太郎・井上隆弘・湯 捷行訳、309 p., 学会出版センター [ Bolt, G. H. · Bruggenwert, M. G. M. (1976) SOILCHEMISTRY ], p. 235-236.
- 土壤標準分析・測定法委員会編 (1986) 土壤標準分析・測定法、354 p., 博友社.
- 川崎 弘・吉田 塚・井上恒久 (1991) 九州地域の土壤型別蓄積リンの形態別計量。農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発」、149 p. : p. 23-27.
- 中根秀二 (1992) 1号方形周溝墓の自然科学的分析、田園調布南2—都立田園調布高校内埋蔵文化財発掘調査報告書—、p. 133-146、都立学校遺跡調査会。
- 農林水産省農林水産技術会議事務局監修 (1967) 新版標準土色帖。
- ペドロジスト懇談会 (1984) 野外土性の判定。ペドロジスト懇談会編「土壤調査ハンドブック」、156 p. : p. 39-40、博友社
- 竹迫 誠・加藤哲郎・板上寛一・黒部 隆 (1981) 神谷原遺跡への土壤学的アプローチ。神谷原 I , p. 412-416、八王子市鴨田遺跡調査会。

# 大見城関連史料

はじめに

大見三人衆についての文献は、鈴木覚馬氏が著した『歴南史』第二卷所載の「佐藤氏藏の早雲の文書」、「北条五代記」、「鎌倉九代後記」と少なく、大見三人衆については今ひとつはつきりしていなかった。近年、小和田哲男氏の『地方史静岡19号』「北条早雲と大見三人衆」によつて、中伊豆町城地区の佐藤藤郎宅から発見され、「大見二人衆由来書」が紹介され、これによると「佐藤氏藏の早雲の文書」については、継続部分があることが判明した。

そこで今回は、新史料である「大見三人衆由来書」(一号文書・七号文書)と大見三人衆について記されている「北条五代記」「鎌倉九代後記」の抄録を併せて掲載した。

〔第一号文書〕

今度柏窪一戦刻、忠節

無比類、仍当郷陣夫、

同細工事、差置之了、

當要普請年中三箇度

是者可勤、同定夫

候事、是も可致其沙汰、

奥・中・入手者<sup>御</sup>定<sup>御</sup>可<sup>加</sup>

扶持、各類母敷存候、

弥可<sup>励</sup>忠功<sup>者</sup>也、仍

如<sup>レ</sup>件、

明応六年四月廿五日  
御判

（佐藤）

佐藤藤左衛門尉殿

梅原六右衛門尉殿

佐藤七郎左衛門尉殿

〔一号文書〕

一号文書より明応六年四月二十五日以前に柏久保城において戦闘があり

佐藤藤左衛門、梅原六右衛門、佐藤七郎左衛門の三人が軍功をあげていたことがわかる。また軍功の賞として、陣夫役が免除されているが、年中に三回の要害の普請を行うようにしており、三人の宛名より、「要害」はおそらく大見城のことと考えられる。

〔第二号文書〕

就敵伊東<sup>勤</sup>、無等閑申候、

悦甚候、時宜者軍宣可<sup>得</sup>注進一

候、若急泊之儀候得者、御一

要候者也、仍可<sup>如</sup>件、

明応六年七月二日  
御判

佐藤藤左衛門尉殿

梅原六郎右衛門尉殿

佐藤七郎左衛門尉殿

(二号文書)

二号文書からは、狩野氏の軍勢が伊東へ動いていたことを示しており、大見郷は、狩野城と伊東との中間点にあたり、大見城の果たす戦略上の役割は高かつたと思われる。

(第三号文書)

長年籠城祝着候、其郷堅固  
簡要候、巨細定<sup>シテ</sup>弘二郎・大  
道寺可<sup>レ</sup>申候也、謹言、  
明応六<sup>丁</sup>十一月五日 御判

大見三人衆中

(第四号文書)

今度忠節無比類候付、當  
郷年貢之内半分、為給分被宛  
行畢、尚以可致<sup>シ</sup>忠節者也、仍  
如件、  
正月廿七日 御判

佐藤藤左衛門尉殿  
梅原六右衛門尉殿  
佐藤七郎左衛門尉殿

(第五号文書)

当郷為<sup>シ</sup>代官、差<sup>シ</sup>越宗<sup>ミツル</sup>上  
使<sup>シ</sup>候、如<sup>シ</sup>鶴首座之時、年貢諸  
納所等可<sup>レ</sup>致<sup>シ</sup>取沙汰之者也、

仍而如<sup>シ</sup>件

永正十六 正月廿日

大見郷三人衆中

(四号文書) (五号文書)

四号文書は、大見郷からの年貢の内半分は給分として与えている。また五号文書からは、鶴首座と呼ばれる人物が代官であつたことがわかる。小和田氏の研究によれば、一つの郷を二つに分割して、半分を直轄地にし、もう半分を給人の知行地とする方式は、後北条氏の一般的な方式であるという。つまり、大見郷にこの方式がとられていたことは、後北条氏の影響力がこの地に深く浸透していたことを窺わせる。

(第六号文書)

豆州大見郷事、先年柏原合戦  
難義之時節、兩三人、敵之致後詰、  
依<sup>リ</sup>忠<sup>ヒ</sup>、<sup>シテ</sup>兩人ニ宛<sup>シ</sup>行<sup>ス</sup>一、但シ四  
拾<sup>シ</sup>賣<sup>シ</sup>四捨<sup>シ</sup>石<sup>シ</sup>者、為<sup>シ</sup>上<sup>シ</sup>分<sup>シ</sup>致<sup>シ</sup>進<sup>シ</sup>納<sup>シ</sup>  
者也、此外一粒一錢之儀不<sup>可</sup>申懸<sup>シ</sup>、  
若<sup>シ</sup>時<sup>ニ</sup>代官横合沙汰申懸<sup>ハ</sup>、  
直<sup>ニ</sup>以<sup>シ</sup>目安<sup>シ</sup>可<sup>レ</sup>、令<sup>シ</sup>言上<sup>シ</sup>、此外  
郡代不<sup>入</sup>、但<sup>シ</sup>國<sup>ニ</sup>定公事、狩野  
之村可<sup>レ</sup>致<sup>シ</sup>沙汰<sup>シ</sup>、如<sup>シ</sup>人數時<sup>ニ</sup>  
代官申附、公方公役不<sup>可</sup>、司<sup>シ</sup>事欠候、  
代官<sup>ハ</sup>未<sup>シ</sup>代<sup>シ</sup>直<sup>ニ</sup>納<sup>シ</sup>可<sup>レ</sup>為<sup>シ</sup>被<sup>シ</sup>成<sup>シ</sup>、右  
定置所、宗端於<sup>シ</sup>子孫<sup>シ</sup>、守<sup>シ</sup>此<sup>シ</sup>  
旨可<sup>レ</sup>致<sup>シ</sup>、仍<sup>シ</sup>有<sup>シ</sup>忠節<sup>シ</sup>定處、相違  
不可<sup>レ</sup>有<sup>シ</sup>、何末代継跡残<sup>シ</sup>

一紙候者也、仍如一件、  
永正六年正月廿九日御判

佐藤四郎兵衛殿

梅原六郎右衛門尉殿

佐藤兵衛太郎尉殿

(第七号文書)

豆州大見郷事、先年柏塙之  
合戦時節、彼是人數両三人之  
為大將令<sup>サムライ</sup>策<sup>シテ</sup>本屋依致<sup>シテ</sup>後詰<sup>シテ</sup>、

狩野之一<sup>シテ</sup>党其外敵悉打取候、  
口<sup>シテ</sup>彼等忠節依無比類<sup>シテ</sup>、郷内、

於三人宛行事、雖然、奥部  
も不<sup>レ</sup>入手<sup>シテ</sup>偏乃貢之義依て

為上分四十貫定上候也、此外

者一紙半錢も不<sup>レ</sup>申懃<sup>シテ</sup>、然も  
給人之代官頗為<sup>シテ</sup>如何<sup>シテ</sup>、右鶲

首座<sup>シテ</sup>お<sup>リ</sup>直務之上使<sup>シテ</sup>、彼地

お補佐候<sup>シテ</sup>、然<sup>シテ</sup>彼人奉行之

刻<sup>シテ</sup>機首座類<sup>シテ</sup>上表之

上ハ<sup>シテ</sup>可<sup>シ</sup>定<sup>シテ</sup>上使<sup>シテ</sup>候間<sup>シテ</sup>、清水<sup>シテ</sup>

申付<sup>シテ</sup>、其以後関東之義依<sup>シテ</sup>  
取乱候<sup>シテ</sup>、直納<sup>シテ</sup>不<sup>可</sup>定上使

(後久)

(六号文書) (七号文書)

六号文書及び七号文書は大見三人衆に宛てられた貢高が具体的な数字と

して出でる。六号文書からは、四拾貫四拾石とあり、七号文書からは四十貫とある。また、永正十六年段階においても大見三人衆として掌握されていたことを示している。

## 北条記 二

其後、堀越殿も不<sup>レ</sup>叶して御自害有しかば、早雲、伊豆押移て、北条に徵を立、<sup>(北条)</sup>蘿山の城に在城し給ひ、末代凡下の侍は、義を忘れ欲に命を忘るゝそとて、多年貯へ給ひし金銀米錢を取り出し、悉く施し民を撫育し、軍兵を哀み給へば、当國の勢は申に不<sup>可</sup>及、近國の浪人我も<sup>シテ</sup>と華山殿へ参ける、就<sup>シ</sup>中、伊豆国の住人等、三津、松下、江梨の鈴木、火見の梅原・佐藤・上村、土肥の富永、田子の山本、雲見の高橋、日良の村田など云侍、吾劣らしと體付ける、彼等上杉の成敗を欺き、御所の政道を背し共成しが、早雲の器量、何様唯人ならしとて各同心して、皆彼下知に隨ひける、

## 鎌倉九代後記

明応年中、政知ノ子息茶々丸、伊豆国堀越ノ御所ニ居ス、其家臣外山豊前守・秋山藏人ヲ議言ニヨリテ誅伏ス、此時豆衆騒動、伊勢新九郎氏<sup>モサニ</sup>、<sup>(北条)</sup>去<sup>リ</sup>今川氏親ニ居ス、今川氏親ニシテ、駿州興國寺ニアリテ、時節到来スト相謀テ、堀越<sup>シテ</sup>押寄せ亂入<sup>ス</sup>、堀越方ノ侍閑戸播磨守打死<sup>ス</sup>、茶々丸大森山へ退去<sup>シ</sup>、則彼山下ノ寺ニテ自害<sup>ス</sup>、其後長氏<sup>モサニ</sup>豆州ヲ領<sup>シ</sup>、蘿山ノ城ニ居ス、彼國住人三津ノ松下、江梨ノ鈴木、火見ノ梅原・佐藤・上村、土肥、田子ノ山本、雲見高橋、メラノ村田ナト云侍、皆長氏ニ属<sup>ス</sup>ニアリテ定正<sup>ト</sup>源氏<sup>モサニ</sup>伊豆タルニヨリテナリ

## 北条五代記 卷一

(北条)

摠又堀越の御所と号し伊豆の国北条にまします、外山豊前守・秋山藏人と

云て二人のからう有、倭人の魂により此両臣をせつふくせしめ給ふ、此義に付て伊豆の国さへき、諸人の心つかならず、早雲するか高國寺に有て此由を聞、是天のあたふる所なりと、延徳年中に人数をもよほし、夜中に黄瀬川を取こし、北条のみたれ入、御所ハおもひの外とおどろき、はるかに落行、大もり山へにけ入給ぬ、早雲ハ北条にはたをたて、近辺の民屋を放火し、まういをふるひければ、此いきほひにをそれ、三津の松下三郎左衛門尉・江梨の鈴木ひやうこの助・大見の三人衆と号して梅原木工ゑもん・さとう四郎兵衛・うへむら玄番、これらの者在々所々に有て名をえたる侍、いそきはせて來て早雲幕下に付、時日をうつさす御所をぼろぼさんと大もり山へせめのほ口、御所ハ山を下り、会下寺に入て切腹し給ひぬ、この威勢にをそれ、土肥の富長三郎左衛門尉・田子の山本太郎左衛門尉・雲見の高橋将監・妻良の村田市之助などといふ侍共、こと／＼来て隣人となる、伊豆一国八三十日の中に相違なくおさめられたり、

#### 参考文献

- 小和田哲男「北条早雲と大見三人衆」『地方史静岡』十九号  
小和田哲男「北条早雲の伊豆侵攻過程と中伊豆の城—柏久保城と大見城をめぐって」『古城』二八号  
基山町教育委員会『基山町史 通史編』十巻  
沼津市教育委員会『沼津市史 史料編 古代・中世』、「北条記」「鎌倉九代後記」「北条五代記」は、この抜粋による。

# 図 版

図版 1



大見城全景

図版 2

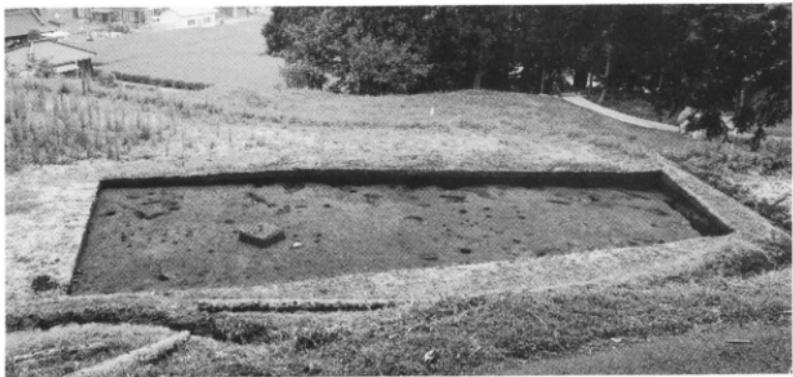


調査前風景（1区）

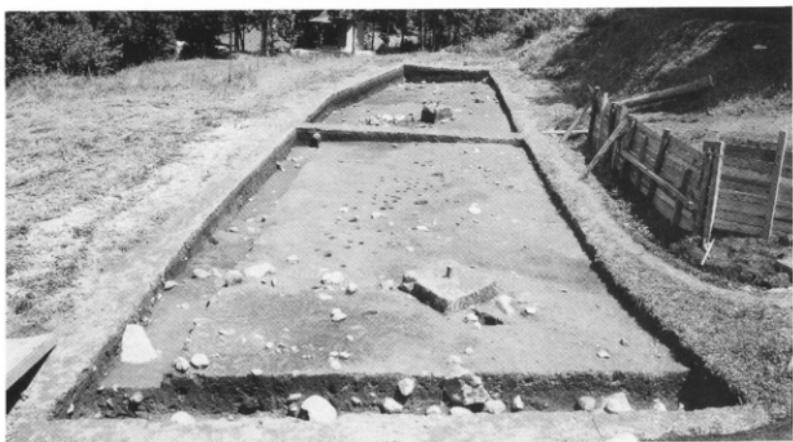


調査前風景（2区）

図版 3



1-1区中近世面検出状況（東より）



1-2区中近世面完掘状況（南より）



焼土混ビット検出状況



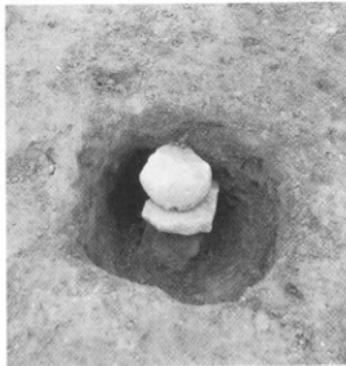
焼土混ビット完掘状況



2-1区中近世面完掘状況



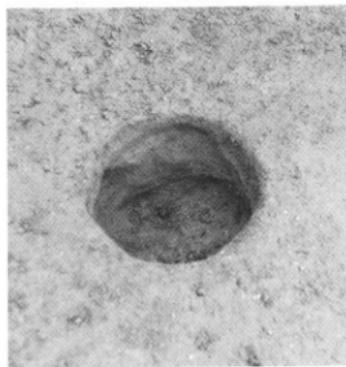
小穴群完掘



SP-135完掘



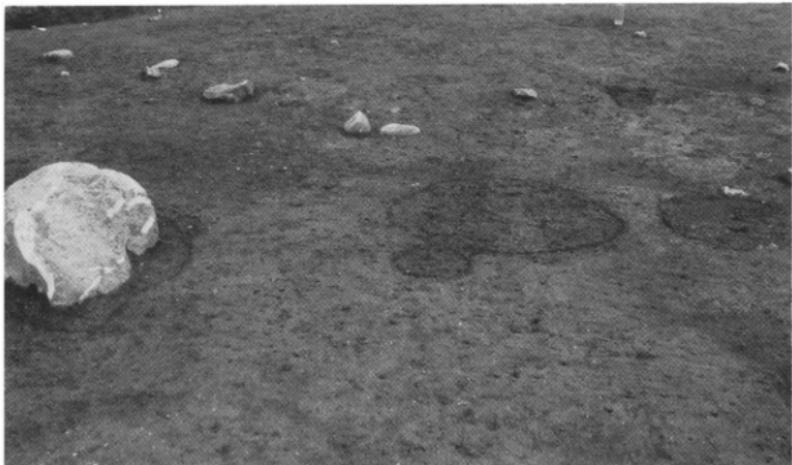
SX-139完掘



SP-140完掘



2-2区中近世面全景（南より）



2-2区土坑検出状況（北より）



SF-168覆土堆積状況



SF-168完掘状況



SF-184覆土堆積状況



SF-184完掘状況



2-2区ピット検出状況（北より）



2-2区ピット完掘状況（東より）



2-2区掘立柱建物完掘状況（東より）



2-2区掘立柱建物完掘状況（東より）



2-2区ピット完掘状況（北より）



2-2区ピット完掘状況（東より）

図版 9



2-3区ピット検出状況（北より）



2-3区ピット完掘状況（北より）



SF-150検出状況（南より）



SF-150完掘状況（西より）

図版10



3-3区・3-4区中近世面全景（南より）

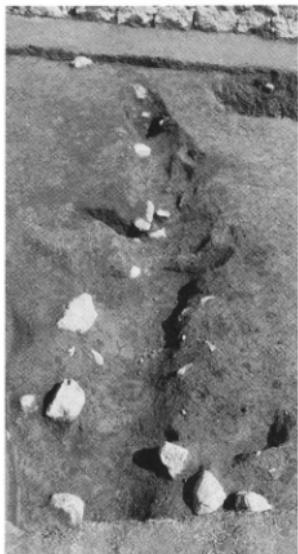


3-4区全景（南より）



3-3区・3-4区遺構検出部分

図版11



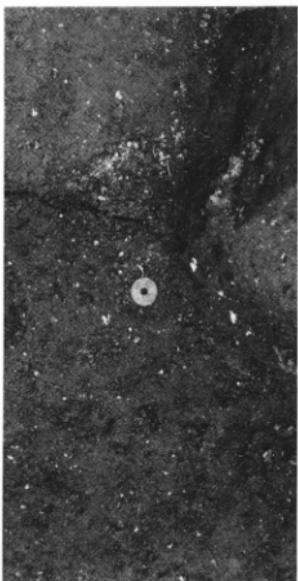
SD-111完掘状況



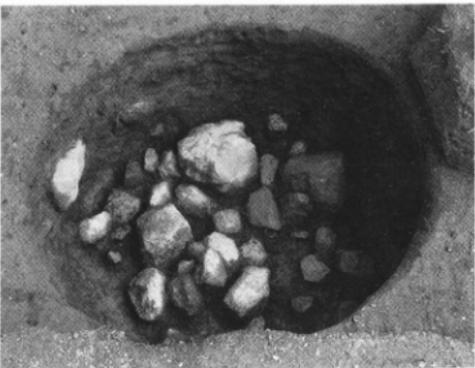
SF-103完掘状況



SF-98完掘状況



銭貨出土状況 (SF-95)



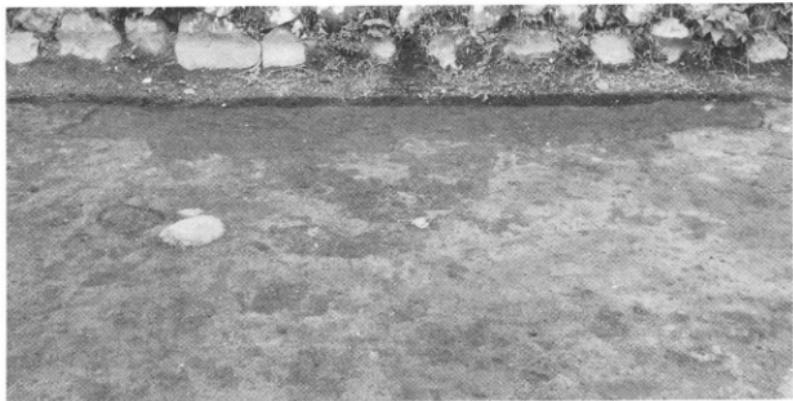
SF-95内礫出土状況



3-1区・3-3区中近世面全景（南より）



3-2区・3-3区・3-4区中近世面全景



3-2区遺構検出状況（西より）



3-2区SF-85検出状況（西より）



SF-76土坑内疊出土状況



SF-85土層堆積状況

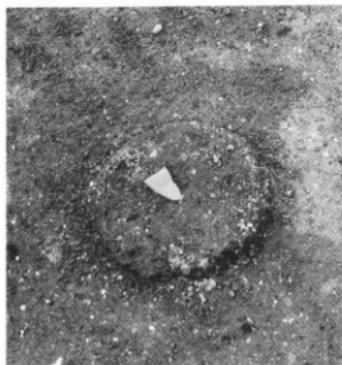
図版14



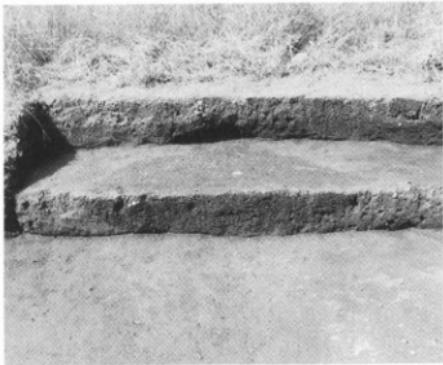
摺鉢出土状況



SP-65検出状況



陶器出土状況



SF-62検出状況



錢貨出土状況



漆製品出土状況



4-4区中近世面完掘状況（南より）



4-3区中近世面検出状況（南より）



4-1区・4-2区中近世面全景（南より）



SX-147覆土堆積状況

図版16



4-1区 ピット出土状況



SP-21・SP-22覆土堆積状況



摺鉢出土状況



SX-40・SX-41・SX-42完掘状況



SP-129覆土堆積状況



SX-35完掘状況



5-1区全景（北より）



5-2区全景（北より）



SX-1・SX-2検出状況



SX-1覆土堆積状況



1-3区縄文土器出土状況



1-3区北半部完掘状況（南より）



1-1区縄文土器出土状況



1-3区南半部全景（東より）



1-2区石器出土状況



1-1区・1-2区縄文面全景（南より）



2-2区石器出土状況



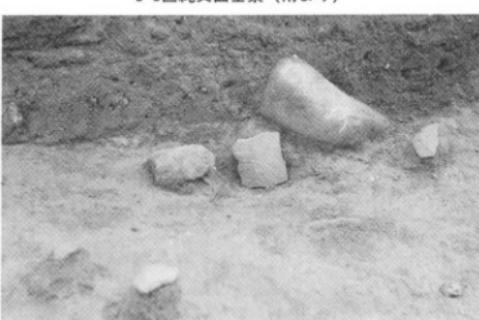
2-1区縄文面全景（南より）



2-2区縄文面全景（南より）



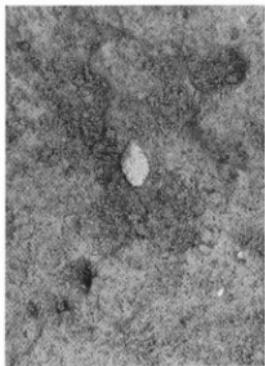
2-2区遺物出土状況



2-2区トレンチ内縄文土器出土状況



2-2区縄文土器出土状況



3-2区石錐出土状況



3-3区縄文面全景（南より）



4-2区石皿出土状況



3-3区北端縄文面検出状況



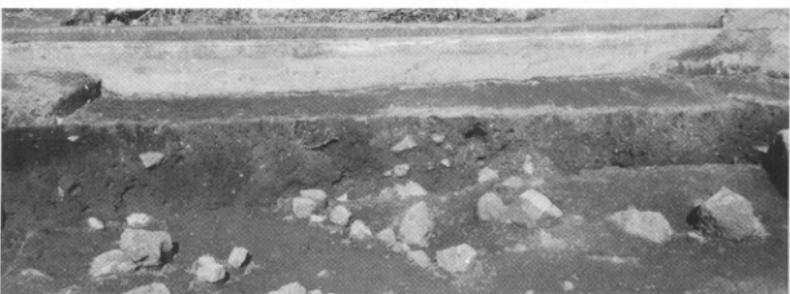
5-2区石錐出土状況



1-1区北壁土層堆積状況



2-2区西壁土層堆積状況



3-3区北壁土層堆積状況



3-2区西壁土層堆積状況



4-3区西壁土層堆積状況



4-2区西壁土層堆積状況



5-2区西壁土層堆積状況



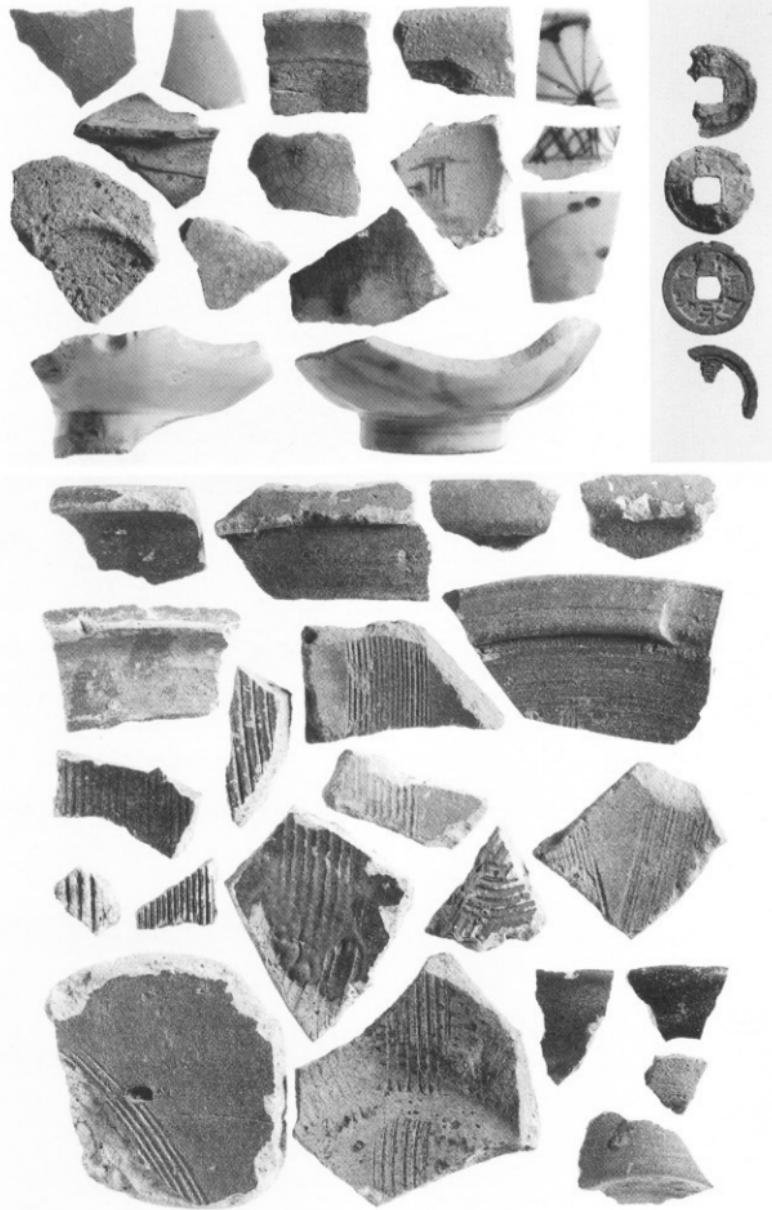
6区テストピット土層堆積状況（北より）

中近世の土器 1

鉄貨

中近世の土器 2

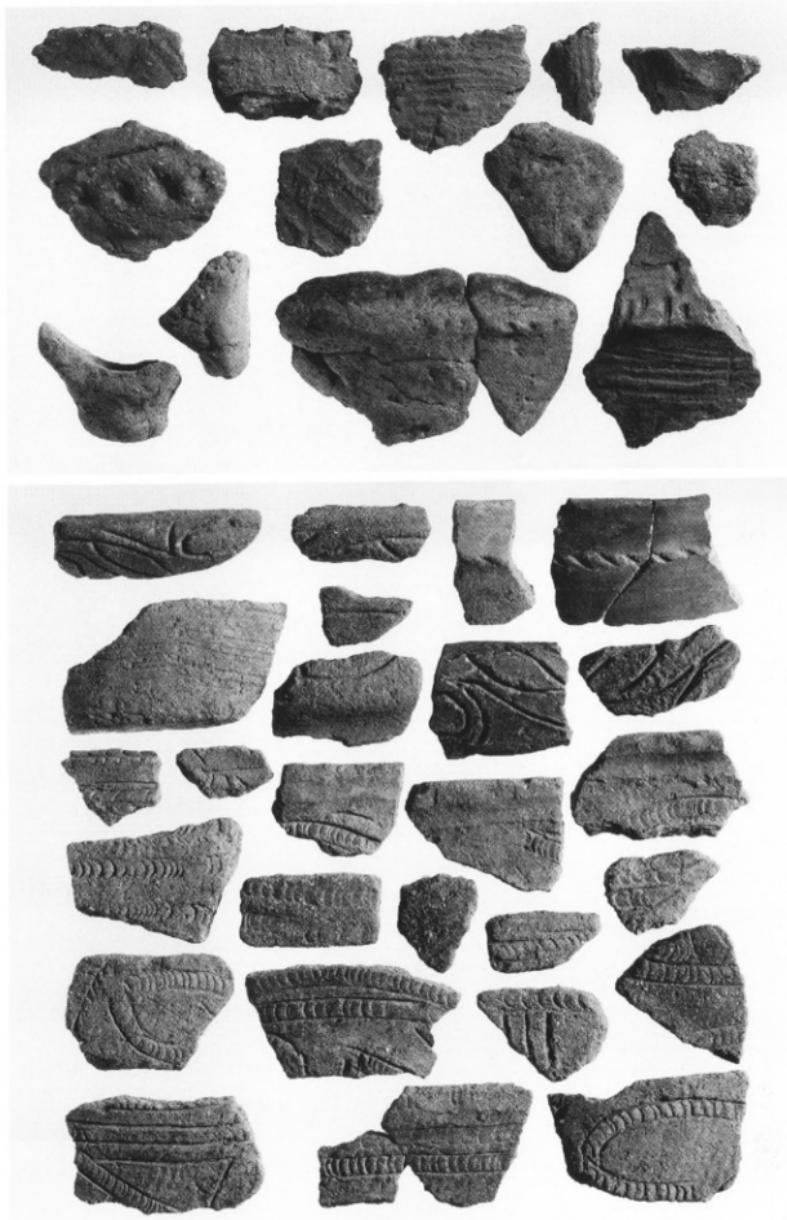
図版23



縄文土器 1（早期）

縄文土器 2（前期 半截竹管文）

図版24



縄文土器 3 (前期 半截竹管文)

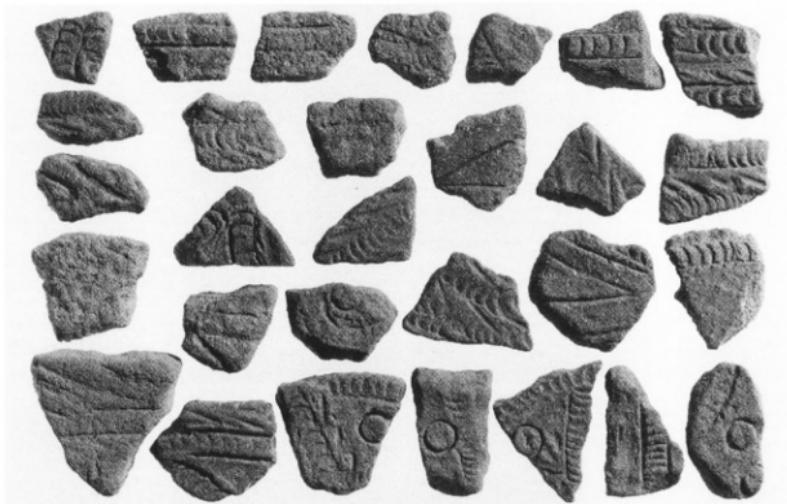


縄文土器 4 (前期 半截竹管文)

縄文土器 5 (薄手の鉢形土器)

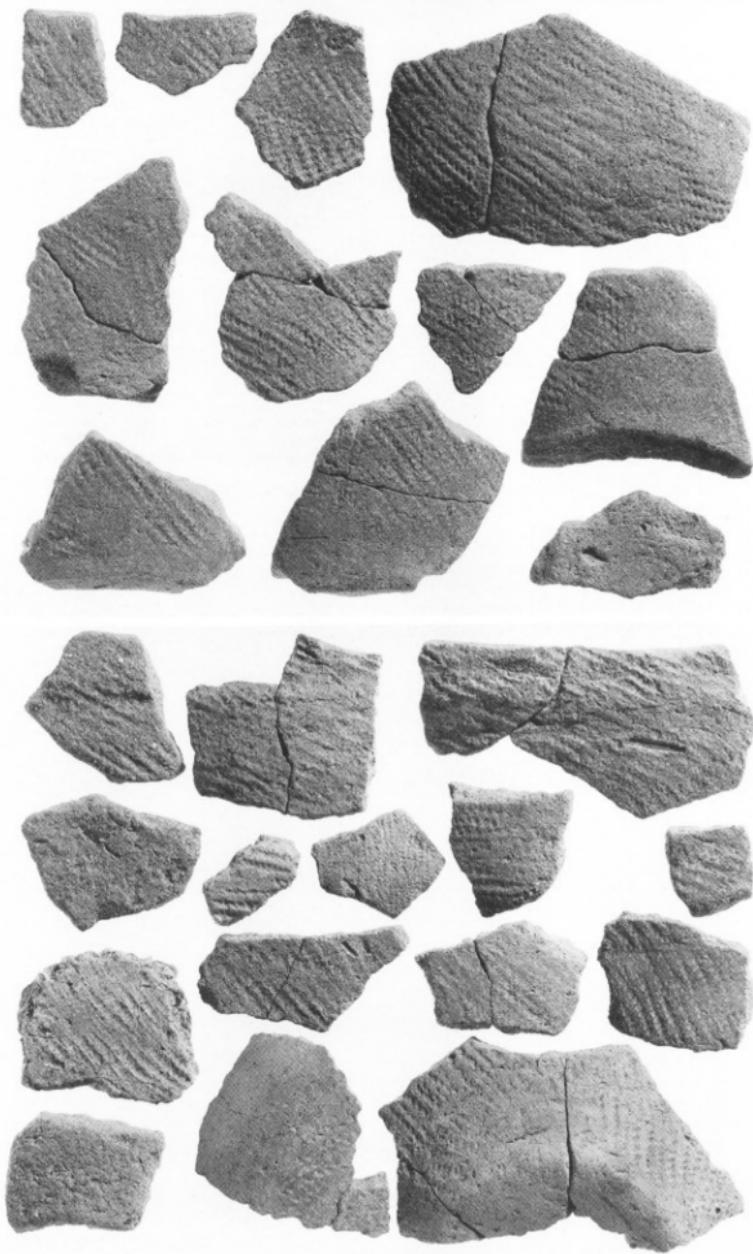
縄文土器 6 (前期 半截竹管文)

図版26



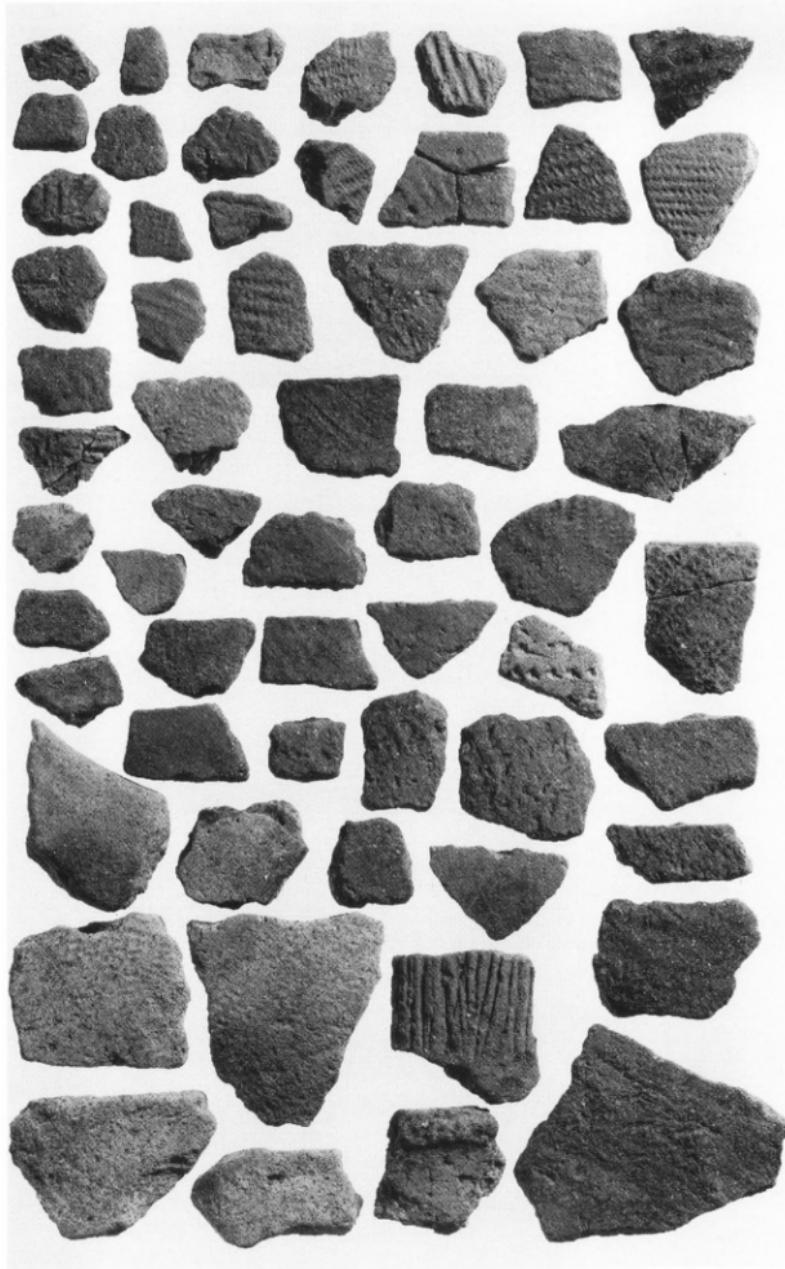
縄文土器 7 (前期力 縄文)

縄文土器 8 (前期力 縄文)





図版28

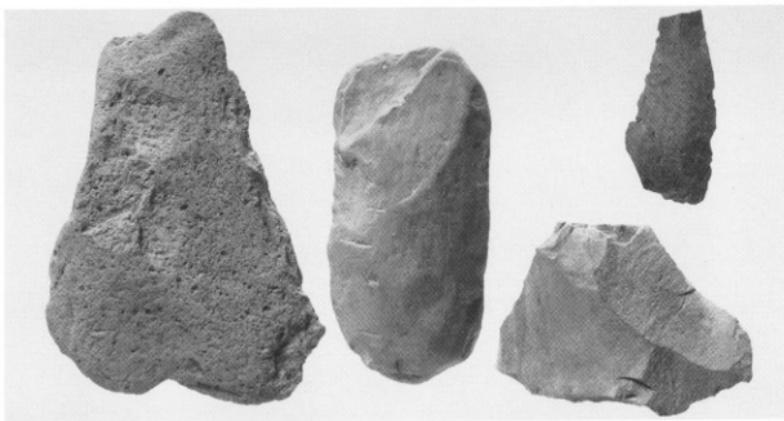
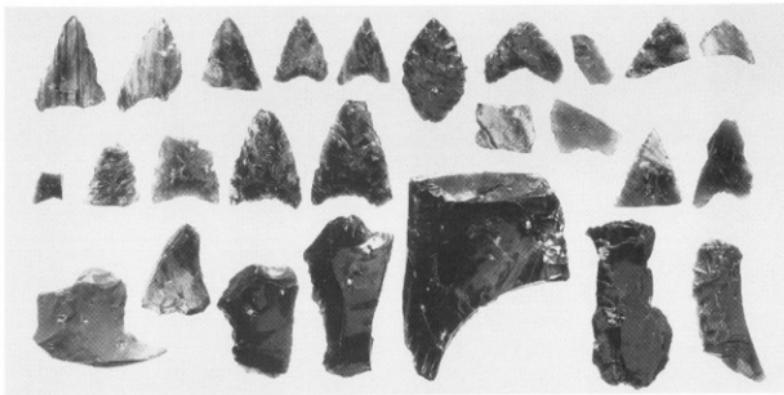


石器 1 石鏟・搔器・削器・楔形石器

石器 2 打製石斧・剥片石器・石匕力

石器 3 磨石・石皿

図版29



現地発掘調査は大見城跡発掘調査事務所（中伊豆町柳瀬 334-1）を拠点として行なった。  
整理作業は三島整理事務所（三島市文教町1丁目3-93）で行なった。  
各作業参加者は以下のとおりである。

#### 発掘調査参加者

磯 幸市 伊東 忠 今井明子 江部信一郎 大倉克敏 大倉信彦 岡田艶子  
岡田みどり 小倉かよ子 川口きよみ 菊池 茂 工藤隆夫 久保田親則 栗木 崇  
佐藤つや子 真田敬子 杉山かずえ 杉山正美 鈴木英世 高山 巍 滝川 弘  
田村和夫 津々野詩織 原田清子 日吉平夫 三田人見 山口 尚 山下美江子  
山田隆造

#### 整理作業参加者

栗木 崇 鈴木里江 鈴木輝美 津々野詩織 渡 嘉秀 山本和美  
岩名健太郎 夏目不比等

#### 石材鑑定

森島富士夫（技術作業員）

#### 陶磁器産地同定

栗木 崇（技術作業員）

#### 調査協力

中伊豆町教育委員会  
川口平次郎（中伊豆町文化財保護審議会会長）  
池谷信之（沼津市教育委員会）

## 報告書抄録

ふりがな	おおみじょうあと							
書名	大見城跡							
副書名	(主)伊東西伊豆線県道道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告							
シリーズ番号	第91集							
編著者名	望月由佳子 井鍋譽之 栗木 崇(関口宏行、パリノ・サーヴェイ株式会社)							
編集機関	財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所							
所在地	〒422 静岡市谷田23-20 TEL.054-262-4261							
発行年月日	1997年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ○○° ○○'	東経 ○○° ○○'	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
大見城跡	静岡県田方郡 中伊豆町柳原	22329		34° 56' 41"	139° 00' 41"	19960620 19961216	5,264	(主)伊東西伊豆線県道道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務
所収遺跡名	種別	主な時代	主な造構	主な遺物			特記事項	
大見城跡	城館跡	中近世	掘立柱建物 5棟 柵列 4列 土坑 14基	陶磁器片 漆製品残欠(椀カ) 錢貨(開元通寶・紹聖元寶・寛永通寶) 土鍬			大見城に伴う建物群(根小屋)の可能性	
	散布地		縄文時代	包含層	縄文土器(茅山下層式・諸磯b式) 石鏃・打製石斧・搔器・削器・磨石・石皿 剝片・未製品・石核			土坑は近世墓か 石器製作跡の可能性

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第91集

## 大見城跡

(主)伊東西伊豆線県道道路改築工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成9年3月31日発行

編集発行 財団法人  
静岡県埋蔵文化財調査研究所  
静岡県静岡市谷田23-20  
054-262-4261 (代)

印 刷 株式会社 三 創  
静岡市中村町166番地の1  
T E L (054) 282-4031